

2024 年度

東北学院大学外部評価報告書

2025 年 3 月

東北学院大学外部評価委員会

目 次

第5期東北学院大学外部評価（2022～2024年度） 概要	1
1. 第4期外部評価委員会からの引き継ぎ事項	1
2. 第5期外部評価の概要	1
2024年度東北学院大学外部評価委員会の活動及び報告書について	2
1. 東北学院大学外部評価委員会	2
2. 2024年度外部評価の活動及び評価項目	3
3. 2024年度外部評価活動スケジュールの概要	4
4. 本報告書の構成	5
I. 2024年度東北学院大学外部評価に係る書面調査	6
I-i. ヒアリングシート	6
I-ii. ヒアリングシートに対する外部評価委員からの質問・意見・評価と 大学からの回答	7
1. ピアサポート	8
2. 国際化・国際交流	40
II. 2024年度東北学院大学外部評価委員会 委員による所見	45
1. ピアサポート	45
2. 国際化・国際交流	50
III. 2024年度東北学院大学外部評価委員会 総評	54
IV. 第5期外部評価（2022～2024年度）の所見	57
V. 第6期外部評価（2025～2027年度）への引き継ぎ	64
【別紙】	66
2024年度東北学院大学外部評価委員会 ヒアリングシート	66
【参考資料】	109
① 2024年度東北学院大学外部評価委員会 名簿	109
② 東北学院大学外部評価委員会規程	110
③ 2024年度第1回東北学院大学外部評価委員会 議事録	112
④ 2024年度第2回東北学院大学外部評価委員会 議事録	115
⑤ 2024年度第3回東北学院大学外部評価委員会 議事録	117

第5期東北学院大学外部評価（2022～2024年度） 概要

1. 第4期外部評価委員会からの引き継ぎ事項

2019～2021年度の第4期外部評価では、中教審で「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」（2018年11月26日）が提示され、大学分科会で「教学マネジメント指針」（2020年1月22日）が策定されたこと等を踏まえ、学修者本位の大学教育の実現や学修成果の可視化を進める上で必要となる教学マネジメントの運用体制を評価対象として実施した（各年度に掲げた具体的テーマは下記の通り）。2020年度及び2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、コロナ禍対応下における授業運営・方法の点検・評価に軸足を置くこととなったが、全学レベルでの教学マネジメント体制や各学位プログラムにおける教学上の3つの方針の設定とその運用について評価を行うことができた。

2019年度：2017年大学評価結果の長所として特記すべき事項の伸長

2020年度：新型コロナウイルス感染症感染拡大による遠隔授業の実施状況

2021年度：学士課程における教学上の3つの方針の点検・評価状況

第4期委員会からの引き継ぎ事項としては、内部質保証システムの運用状況と併せ、全学及び学部・研究科における教学マネジメントの機能的有効性の検証が求められている。

2. 第5期外部評価の概要

第5期外部評価委員会では、教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況を評価対象とすることが、2022年度第1回外部評価委員会で承認された。

なお、外部評価委員会は独立した立場から、①自己点検・評価との差別化を図ること、②教学に関する懇話会や西南学院大学との相互評価のテーマとの住み分けもしくは共存を図ることを基本原則とし、新たな外部評価委員、継続される外部評価委員それぞれの意見を尊重しつつ、計画・実行していく予定である。

2024 年度東北学院大学外部評価委員会の活動及び報告書について

1. 東北学院大学外部評価委員会

東北学院大学外部評価委員会（以下、「本委員会」という。）は、東北学院大学外部評価委員会規程」に基づき、東北学院大学に設置された委員会である。本委員会は、学外の第三者による外部評価を実施する委員会であり、評価を通じて、同大学の教育・研究水準の向上及び組織の活性化に資する提言を行うことを目的としている。

第5期となる本委員会は、杉本和弘東北大学高度教養教育・学生支援機構教授を委員長として、2022 年度に発足した（任期：2022～2024 年度）。構成員は、下記のとおりである。

No.	所属	氏名	根拠規程
1 委員長	東北大学高度教養教育・学生支援 機構教育評価分析センター長	杉本 和弘	第5条第1項第1号 (大学等の教育機関の教員)
2 副委員長	東北工業大学地域連携センター 事務長	阿部 智	第5条第1項第6号 (大学に関して広くかつ高い見識 を有する者)
3	尚絅学院大学 学長	鈴木 道子	第5条第1項第1号 (大学等の教育機関の教員)
4	株式会社ミヤギテレビサービス 非常勤相談役	高野 昌明	第5条第1項第5号 (本学の学部を卒業した者又は大 学院を修了した者)
5	宮城県美術館 館長	伊東 昭代	第5条第1項第3号 (本学の所在する地域の関係者)
6	宮城県仙台南高等学校 校長	熊谷 聡也	第5条第1項第3号 (本学の所在する地域の関係者)
7	株式会社 一条工務店宮城 代表取締役社長	峯岸 宏典	第5条第1項第2号 (経済界の関係者)

2. 2024 年度外部評価の活動及び評価項目

(1) 2024 年度の評価の概要

本年度は、教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況として、大学における正課外での学生支援の取り組み（一部、正課内を含む）に焦点を当て、「ピアサポート」及び「国際化・国際交流」をテーマとし、書面調査及び大学関係者への質疑応答を通して評価する。

(ア) 書面調査

- ① 現状と根拠資料の提出
 - ピアサポート及び国際化・国際交流に関する大学の取り組み状況を書面（ヒアリングシート）にて提出。
- ② 委員より大学への質問を提出
 - 質問項目を事務局へ提出。

(イ) 質疑応答

- 外部評価委員会から大学関係者への質問について、大学の関係部署の部長、課長を中心とした業務に精通している教職員から回答（第2回外部評価委員会）。また、回答は後日書面で外部評価委員へ提出。

(2) 評価項目・観点

(ア) ピアサポート

- ① 意思決定及び評価の状況
 - ・ ピアサポートに関する方針等の策定状況
 - ・ 意思決定・実施のための体制整備状況
 - ・ 取り組みに関する評価（効果検証）の体制・実施状況
- ② 実施状況（過去5年間の経年変化）
 - ・ ピアサポート実施体制（関連のセンター、教職員数）
 - ・ ピアサポートの取り組み実施数・内容
 - ・ ピアサポート学生数（サポートを提供または利用した学生数）
- ③ 課題と今後の取り組み
 - ・ 課題（強みと弱み）
 - ・ 今後推進すべき取り組み

(イ) 国際化・国際交流

- ① 意思決定及び評価の状況
 - ・ 国際化・国際交流に関する方針等の策定状況
 - ・ 意思決定・実施のための体制整備状況
 - ・ 取り組みに関する評価（効果検証）の体制・実施状況
- ② 実施状況（過去5年間の経年変化）

- ・ 国際交流協定校数（大学名、国・地域等）
- ・ 受け入れ・送り出し留学生数
- ・ 受け入れ・送り出し留学生に対する修学・生活の支援状況
- ・ 留学プログラムの設置・実施状況
- ・ 国際交流・留学フェア等への参加数
- ・ 国際関連科目や正課外活動（イベント等）の実施数・内容
- ・ 国際ボランティア活動参加学生数
- ・ 教職員に対する海外派遣・国際交流活動の支援体制・実施状況

③ 課題と今後の取り組み

- ・ 課題（強みと弱み）
- ・ 今後推進すべき取り組み

3. 2024 年度外部評価活動スケジュールの概要

時 期	活動内容
8 月下旬	●2024 年度第 1 回外部評価委員会（メール審議） 内容：2024 年度の評価対象・内容・方法およびスケジュールの検討・決定。
10 月上旬	○ピアサポート、国際化・国際交流の取り組み状況（ヒアリングシート）を外部評価委員会に提出。
10 月下旬	○外部評価委員から大学関係者への質問項目を事務局で取りまとめ、学内当該部局へ回答の提出を依頼。
12 月中旬	●2024 年度第 2 回外部評価委員会 内容：大学関係者との質疑応答（ピアサポート、国際化・国際交流）
1 月上旬	○質疑応答をふまえた回答一覧を事務局より外部評価委員へ提出。 追加質問の受付。
1 月中旬～ 2 月上旬	○外部評価委員は、「所見」、「第 5 期外部評価に関する所感」及び「第 6 期外部評価に対する引き継ぎ事項」の振り返りを記入し、事務局へ提出。
2 月中旬～ 3 月上旬	○提出された「所見」等を事務局で取りまとめ、外部評価委員及び大学で内容を確認し、外部評価報告書を作成。
3 月下旬	●2024 年度第 3 回外部評価委員会 ・ 内容：外部評価報告書を大学へ提出。
4 月	○大学 HP に外部評価報告書を掲載、学内外へ公表。

4. 本報告書の構成

本報告書は、以下の構成となっている。

- I. 2024 年度東北学院大学外部評価に係る書面調査
 - I-i. ヒアリングシート
 - I-ii. ヒアリングシートに対する外部評価委員からの質問・意見・評価と
大学からの回答
- II. 2024 年度東北学院大学外部評価委員会 委員による所見
- III. 2024 年度東北学院大学外部評価委員会 総評
- IV. 第 5 期外部評価（2022～2024 年度）の所見
- V. 第 6 期外部評価（2025～2027 年度）への引き継ぎ

【別紙】

- 2024 年度東北学院大学外部評価委員会 ヒアリングシート

【参考資料】

- ① 2024 年度東北学院大学外部評価委員会 名簿
- ② 東北学院大学外部評価委員会規程
- ③ 2024 年度第 1 回東北学院大学外部評価委員会 議事録
- ④ 2024 年度第 2 回東北学院大学外部評価委員会 議事録
- ⑤ 2024 年度第 3 回東北学院大学外部評価委員会 議事録

I. 2024 年度東北学院大学外部評価に係る書面調査

I-i. ヒアリングシート

書面調査として、評価項目・観点に応じたヒアリングシート（【別紙】参照）を大学から外部評価委員へ提出した。

ヒアリングシートは、以下の部署が作成した。

テーマ		部署名	備考
ピアサポート	1	東北学院史資料センター	学長諮問「ピアサポートを活性化するための諮問」（2023 年 9 月 25 日）の諮問先各部署 ※ 諮問先のうち、宗教センター及び理数基礎教育センターについては、評価実施時点でピアサポートの実績はなかったため対象外とし、宗教センターは実績に基づき国際化・国際交流について作成した。
	2	図書館	
	3	博物館	
	4	ラーニング・コモンズ	
	5	情報処理センター	
	6	外国語教育センター	
	7	就職キャリア支援部	
	8	教職課程センター	
	9	国際交流部	
	10	入試部	
	11	広報部	
	12	学生部	
	13	学生健康支援センター	
	14	地域連携センター	
国際化・国際交流	1	国際交流部	
	2	宗教センター	

I - ii．ヒアリングシートに対する外部評価委員からの質問・意見・評価と 大学からの回答

外部評価委員は、「I．2024年度東北学院大学外部評価に係る書面調査（ヒアリングシート）」により、大学の取り組みについて確認を行った後、ピアサポート及び国際化・国際交流に関連する各部署について、その取り組みに関する質問及び意見、評価を書面にて大学へ提出した。

また、大学からは、質問に対する回答を第2回外部評価委員会（2024年12月16日開催）において回答し、詳細を書面にて外部評価委員へ提出した。

以下に、外部評価委員からの質問及び意見、評価と、大学からの回答を示す。

1. ピアサポート

① 東北学院史資料センター

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
金銭的報酬をなしとしている理由、学内業務支援（ワークスタディ）との区別はどうしているのか。	ピアサポートの理念として無償とされているために、本センターにおいても無償としている。従来からの資料整理に関しては、アルバイト学生を雇用しているが、これは自発的活動ではなく、期日と業務内容を契約条件の下で管理しており、ピアサポートと区別している。
活動開始に当たって考えている「ある程度の活動案」とはどのようなものか。博物館との連携に課題はあるか。	2024 年 11 月から、歴史学科 1 年生 2 名をメンバーとして、毎週水曜日 4 校時目の時間をつかって、ピアサポートの活動を開始している。具体的には史料の写真撮影、目録作成といった今後必要となるであろう業務体験を軸としている。博物館との連携は今後の課題であるが、例えばここで挙げた資料整理技術の習得といった連携・共有可能な部分と、それぞれの組織に合わせた別個の進め方をすべき部分の切り分けが課題となるので、2025 年度以降に博物館とも議論を深めていきたい。
①活動の主な成果物として何を期待しているか。 ②既に多くの出版物や記録誌等があるが、本活動との整合性はどのようになっているか。 ③PR の対象はどちらを考えているか（学生/一般）。	①活動の具体的成果としては、終戦 80 年を記念した展示関連業務が、仙台市戦災復興記念館で開催される。ピアサポートの一つの柱としては、東北学院史資料センターが運営する予定の展示の一部分を、学生主体で資料の選別・パネルの作成に関わらせたい。先方のあることなので確定はできないが、例えばパネルにピアサポートメンバーの氏名を明記するなどの成果（インセンティブ）を考えている。②将来的には、史資料センター展示室の展示企画の運営と併せて、『展示録』をピアサポートメンバーによって企画・執筆する方向性も検討している。③「史資料センター展示室の PR」活動、という点で考えれば、対象としては本学学生と一般向け、両方が想定できる。具体的には全学に開講されている「東北学院史の探求」という講義においては、一方的な講義スタイルではなく、学生グループが自らテーマを決めて、調べた結果を報告するスタイルをとっており、史資料センターの史料の利用も想定している。将来的にはこのような授業と絡めた形でのピアサポートメンバーによる展示解説は現実的である。また特に 15 日会（同窓会）や、OC の際には、一般の来客も多いので、その際にピアサポートメンバーによる展示解説も現実性が高いと判断している。

<p>ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きしたい。</p>	<p>メンバー募集に関しては、先行する博物館を前例とすれば、歴史学科新入生全員（180 名）を対象として PR した場合、80 名以上の登録希望者が手を挙げてくれる可能性がある。本センターのピアサポートの特性としては、貴重資料を扱う関係上、センター外への史料の持ち出しは不可能であり、センター内のスペースの関係上、多くても学生 10 名以上を引き受けることはできない。よって、今年度はまず 2 名の歴史学科 1 年生をモデルとして、ケーススタディーを積み重ねている段階である。サポート機会の掘り起こしも重要な課題であるが、PR の結果、キャパシティを超えた多数の希望者が出た場合の対応については、今後の継続審議事項としたい。</p>
<p>ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考え。このことについて、考えや方策をお聞きしたい。</p>	<p>具体的な検討はこれからであるが、①まずは「コアメンバー」というべき学生を育成し、彼等彼女等が後続のメンバーにノウハウを伝えていくという形で、ピアサポートメンバー本来の活動に結び付けていきたい。また、②その際に、単に学生間の共有にとどまらず、センター所員との共有も可能にするため、「東北学院史資料センターピアサポート会議」を年に複数回開催し、「サポート内での相談・回答内容」やノウハウの共有を図ってきたい。</p>

【その他意見】

- 第一義的な意味での「ピアサポート」という枠組みにとらわれることなく、学生の関与を高める取り組みを推進していただくことが重要であると思う。
- 事業内容自体がピアサポート活動の推進にそぐわないのではないかと。学内全体の方針として認識しつつも、機会があれば対応するスタンスを維持することで足りるのではないかと。
- 学生のサポーターを入れることで、従来の卒業生、一般市民等に加え、現役学生の利用が増えることが期待できるのではないかと。学院史跡めぐりツアーは、なかなか面白い企画であると思う。初年次教育に取り入れていくと、関心を持つ学生が増えるかもしれない。
- 「歴史認識 / 帰属意識 / 愛校心」を醸成する上では大変意義ある活動だと思う（自社でも現在取り組んでいる）。

【評価】

- 学芸員や司書、アーキビスト等を目指す学生を視野に学生サポーターの導入を進めていることは評価できる。
- 新たにピアサポートの制度を採り入れる段階ということで、現時点での評価は難しいが、その方向性については評価できる。
- 学生を積極的に参加させ、学生のアイデアをもとにした企画運営を図っていこうとすることはとても評価できる。
- マーケティング上の「4P: Product/ Price / Place / Promotion」がより明確になると学生も活動しやすいかと思う。

② 図書館

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
イベントへの一般学生の参加が少ないとのことだが、教養教育等における授業科目との連携はどのような状況になるか。	図書館サービス概論、図書館概論の授業で告知活動を行っている。今後他の授業での告知も増やしていきたい。
金銭的報酬をなしとしている理由、学内業務支援（ワークスタディ）との区別はどうしているのか。	学内業務支援としてではなく、あくまでも学生の自主的な活動として位置づけている。このため金銭的な報酬はなしとしている。
「ピアサポート」の要素として多様な学生がアクセスできることが重要で、図書館はそうした居場所になれると考えるが、この考えについてどうか。取り組んでいることがあるか。	<p>図書館が多様な学生の居場所になるという考えはその通りである。現在幅広い学科と学年の学生 18 名が「図書館サークルライブス」のメンバーとして活動している。彼らは部室に集まり、イベントの企画をしたり、様々なジャンルの本の情報を共有したり、懇親会を開催したりしている。</p> <p>また、図書館サークルライブスの学生が企画した「図書館クイズラリー」というイベントも、多様な学生が集まる取り組みの一つとして挙げられる。このイベントは、普段図書館に来ることのない学生をターゲットとして、図書館内にある様々な本を探してもらうもので、参加者からは「図書館は専門書ばかりだと思っていたが、小説、映画、旅行など自分が興味のある本があることが知れて良かった」などの感想が多く寄せられた。</p> <p>こうした取り組みを積み重ねていくことで、多様な学生が図書館に来館し、そこに居場所を見出すことにつながっていくと考えている。</p>
図書館内に「活動スペースを用意」とあるが、“静かに勉強したい”という学生との共存はどのようにされているか。	「活動スペース」は図書館の入退館ゲートの外にある会話可能なエリアの中にあることと、「活動スペース」は移動式の壁で区切られた独立したスペースになっているので、他の学生の邪魔になることはない。
ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きたい。	図書館におけるピアサポートの取り組みは、まだ初年度であったため、教員がピアサポーターを指導する場面が多かったが、今後は学生同士（先輩・後輩）の協力と助け合いによって、ピアサポーターが成長できようように促していく方針である。また、ピアサポーターを増やす手立てとして、一般学生がピアサポーターが活躍している姿を見ることが重要だと考えているので、例えば今年度実施した「ビブリオバトル・ワークショップ」のほか、「学生による図書館ガイド」「学生による読書案内」など、ピアサポート学生の活躍を、多くの一般学生に見てもらえるイベントを増やしていきたいと思う。

<p>ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考え。このことについて、考えや方策をお聞きたい。</p>	<p>イベントの企画から運営までを学生自身で担えるように工夫をしてきたため、例えば企画書の書き方、イベント参加者募集のための告知方法、学生同士の協力の仕方などの経験やノウハウを身に付けることができた学生は多いと考える。</p> <p>ピアサポート活動に参加できない学生（図書館サークルライプスのメンバー以外）には、今年度実施した「図書館クイズラリー」「著者と語ろう」「ビブリオバトル・ワークショップ」のほか、「学生による図書館ガイド」などのイベントを実施することで、学びと成長の機会を提供できると考える。こうしたイベントに参加する一般学生の数を増やせるように関連する授業との連携も考えていきたい。</p>
--	--

【その他意見】

- 相応数のサポートメンバーが在籍しているので、今後の取り組み状況を注視したい。
- 学生のタイプ別に企画を立案していくことは、興味深く、結果が期待される。設定されているゴール設定は素晴らしいので、その成果を期待したい。
- 多様な価値観を持った学生が自ら学び、交流し、議論し、自らの探究が深まる場となるよう期待する。
- 「オープンでインタラクティブな図書館」という将来の理想像が伝わり、かつ実行アイディアも楽しそうでワクワクしている。

【評価】

- 2024 年度からピアサポート活動を開始し、すでに活発な活動が行われていることは評価できる。
- 図書館活動にピアサポートを導入し、また、そのサポートのための体制づくりができていること、また、ゴール設定をして、効果検証を行う体制づくりに向かっていることは、高く評価できる。新しい企画の経費を、削減予算から捻出する努力も、評価できる。
- 初年度ながら学生主体の活動を具体的に開始しており今後正課外だからこそ参加でき学生同士の交流ができる場となる可能性がある。
- 図書館としての本来の機能の他に、各種イベントによる学生の交流の場の提供など、新たな機能を構築しようと模索しているところが評価できる。
- 既に具体的な活動が実行され「実行回数・参加人数・取材」などの実績もあり、素晴らしいと思う。

③ 博物館

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
<p>参加学生が文学部（歴史学科）にほぼ限られているとのことだが、教養教育において、博物館関連の授業科目の設置状況、さらに、当該科目と博物館との連携状況はどのようなになっているか。</p>	<p>本学における学芸員課程は文学部(歴史学科・総合人文学科・英文学科)のみで設置されている。学芸員科目の一部は、博物館の非常勤学芸員・兼任学芸員(教員)が担当しており、特に3年次開講の実習科目では博物館を積極的に活用して実施している。それ以外の科目（教養教育科目等）では、博物館と関わる授業科目は特に開講していない。</p>
<p>サポーター制度はピアサポートを具現化するものか。何故史資料センターと運用に関する申し合わせを策定しているのか。</p>	<p>ミュージアムサポーター制度は、2024 年度に本学が全学的にピアサポートに取り組むよりも前から、より広範な学生に博物館活動への参加の機会を開くための施策として当館が独自に構想・検討してきたものである。実施に際し、学生により多彩なメニューを提供するため、同じく展示・普及教育などの活動を実施している史資料センターと共同で運用を行うことで合意し申し合わせを制定した。2025 年度以降については、2024 年度の実績や問題点を踏まえ、あり方を検討する予定である。</p>
<p>①金銭的報酬をなしとしている理由、学内業務支援（ワークスタディ）との区別はどうしているのか。</p> <p>②より幅広い学部学生の参加を促すためにはどのようなことが必要と考えているか。具体的な方策を検討しているか。</p>	<p>ミュージアムサポーターを無報酬としているのは、①ピアサポートを無報酬とすることが本学全体の方針であること、②限られた予算の中で多数のサポーターに報酬を支払うことが困難であることによる。ただし当館では、2010 年の開館当初から、非常勤職員として雇用した大学院生を「学芸研究員」に任命し、ワークスタディの意味も込めて、展示の企画・製作、広報、実習授業の補助など博物館の日常業務に参加させている。一方の「ミュージアムサポーター」は、企画展やワークショップ、フィールド活動などプロジェクト型の活動を中心に、低年次の段階から学部生に広く博物館活動への参加機会を提供することを目的としており、両者の棲み分けは明確である。</p> <p>「東北学院大学全体の博物館」として、多くの学部からの参加は重要な課題と考えており、全学的な方針とも合わせながら学生への周知・情報発信を強化していきたい。ただし現在文学部の学生だけでも 100 名を超える参加希望者がある状況であり、他学部の学生も加えた多数の学生の希望に応えていくためにも、専任学芸員の不在など現在の博物館の体制が抱える問題点を改善していく必要がある。</p>

<p>多数のプロジェクトが既に実行もしくは今後企画されているようだが、学生から挙げたアイデア等はあるか。</p>	<p>前記の「学芸研究員」をも含めるなら、多くの企画に、学生のアイデアが活かされている状況である。例えば2024年12月に「SMMA ミュージアムユニバース」（於せんだいメディアテーク）において実施し好評を博した子供向けのワークショップも、学芸研究員の大学院生が企画し、「ミュージアムサポーター」の学部生とともに内容を練り上げ実施したものである。このような事例を今後も増やしていきたい。</p>
<p>ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きしたい。</p>	<p>前記の「学芸研究員」や「ミュージアムサポーター」制度の充実には、それを指導・育成する人材が欠かせない。現在当館は専任学芸員が不在の状況であるが、これを整備し、学芸研究員とあわせて、ミュージアムサポーター（学部生）の育成環境を整えたい。</p> <p>サポート機会（プロジェクト）は、施設としての性格上、学内外を問わない社会的活動が中心となってくる。館内の活動のみならず、他の博物館等との連携にも眼を向けながら掘り起こしを進めたい。</p>
<p>ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考え。このことについて、考えや方策をお聞きしたい。</p>	<p>今後、ミュージアムサポーターとしての経験を、博物館のメディア（広報誌、Web サイトなど）などを通じてより多くの学生に発信するとともに、学生がよりアクセスしやすいような情報発信のあり方を検討していきたい。</p>

【その他意見】

- 年度末に効果検証を行うこととしているが、他の部署とも連携し、全学レベルにおけるアンケート調査等による効果検証の実施を検討いただくのが良いと思う。
- 登録方法（Form）、企画の多様性、選択のしやすさなど学生側の見地に立った仕組みが施されており今後も無理のない継続性が見込まれる。楽しみである。

【評価】

- 初年度から学生主体のプロジェクトを具体的に開始しており、課題認識も的確で今後の展開を期待したい。
- 学内だけでなく、市民参加型のワークショップや歴史散策ツアーなどを、今後とも学生が主体的に関わりながら企画運営していこうとすることが評価できる。
- 実施体制（計6名）、取り組み実施数（3件）、登録学生数（28名）と申し分ないスタート。学生からの定性的な声も聞いてみたい。
- ミュージアムサポーター制度の新設、また、実際、多くの学生が参加して、活発に活動が行われていること、効果検証のための体制作りに向かっていることは、高く評価できる。

④ ラーニング・コモンズ

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
学習サポートに関わる人的リソースの限界が課題となっているが、一般教員によるオフィスアワー等との連携はどのようなようになっているか。	一般教員によるオフィスアワーとの連携は、現在行っていない。ラーニング・コモンズでは、学生の汎用的能力や自律的な学習能力を育成することを目的としている。専門性の高い学習内容に関する相談については、授業担当教員に質問していただくことを想定している。
A S（アカデミックサポーター）＝ピアサポートとしているのか。A Sの雇用期間や就業条件とはどのような内容か。	A Sは、学生同士の学び合いを目的としたピアサポートとして位置づけているが、決められた勤務時間に勤務することが求められており、有償での活動となっている（土樋キャンパスのカウンター対応A Sは、16：45～20：15、五橋キャンパスの学習相談対応A Sは、13：00～16：30）。ただし、アカデミックサポーターに関する規程第7条により、授業期間中の通常勤務は週20時間以内にするという条件を設けている。雇用契約は年度ごとに結ばれ、年に3回程度開催される研修への参加が必要である。また、毎月のミーティングへの出席、活動報告や勤務記録などの提出が求められている。これらの条件を満たすことがA Sとしての活動の前提となっている。
安定的なA S確保に向けた方策について、具体的に検討しているか。現状、A Sは有償ボランティアということだが、無償のピアサポーターとのすみ分けについて、どのように考えているか。	安定的なA Sの確保に向けて、毎年12月に新たなA Sを採用し、翌年度4月から円滑に活動を開始できる体制を整えている。 A Sは、学生の学習に関わる支援を行う役割を担っており、一定の質を保証するとともに、決められた勤務時間に責任をもって活動してもらう必要がある。そのため、有償での活動とし、適切なサポートを提供できる体制を整えている。一方、11月から開始したスタディグループは、無償のピアサポートであり、学生が自ら主体的に勉強会を企画する取り組みである。活動時期や内容については学生の自主性を尊重しており、その点がA Sと大きく異なる点であると考えている。

<p>利用する学生が少ない理由をご教示いただきたい。</p>	<p>五橋キャンパス開学以前は、学部 3・4 年生が主な利用者であったため、利用者が多くはなかったが、五橋開学以降、利用者が増加している。学習支援は、学生が自ら希望して相談に来ることを前提としており、強制的に利用させることを目的としていないが、より多くの学生に支援の存在を知ってもらい、気軽に相談できる環境を整えることが今後の課題であると認識している。そのため、周知方法の工夫や相談しやすい雰囲気づくりを進めていく必要があると考えている。</p>
<p>アカデミックサポーターはどのような学生が手を挙げてくるのか。 サポートを利用するのはどんな学生なのか。</p>	<p>AS に応募する学生は、採用条件として修得単位数や成績（GPA）の基準を設けており優秀な学生が多い。さらに、他の学生の学習に貢献したいという意欲を持っていることが特徴である。また、AS の中には、学習支援の活動を通して大学職員の業務に関心を持ち、将来のキャリアを見据えた経験として位置づけている学生も見受けられる。</p> <p>サポートを利用する学生には、さまざまな背景や目的がある。学習意欲が高く、さらに良い成績を目指して積極的に利用する学生もいる一方で、課題への取り組み方がわからず不安を感じて相談に来る学生もおり、学習に対するモチベーションや学習スキルのレベルは様々である。また、大学院進学や編入を目指して相談に来る学生も毎年一定数いる。</p>
<p>①カウンター対応や学習相談の内容は具体的にどのような質問や傾向が見られるか。 ②教授・教員へのフィードバックはどのようなになっているか。</p>	<p>①カウンター対応では、主に施設の利用方法や手続きに関する相談を受け付けている。学習相談では、特にレポート作成に関する相談が多い。レポートの相談では、課題に取り組む前の段階で相談に来る場合もあれば、一度書き上げたレポートを持参して具体的な改善点を相談する場合もある。さらに、学習計画に関する相談などにも対応しており、学生の状況に合わせたサポートをしている。</p> <p>②年間の学習支援の実施状況については、各学部の教員が参加するラーニング・コモンズ会議で報告している。</p> <p>授業担当者に対して個々の相談内容に関する詳細なフィードバックや個別対応の報告は行っていないが、学習相談の内容を踏まえて、必要に応じて、適切な部署や担当教員に相談者をつなぐ対応を行うことがある。また、教員と連携した支援としては、演習科目やゼミ等で、授業の一環としてレポートの書き方やプレゼンテーションの仕方に関するセミナーを実施したり、ライティングガイドやミニガイド、ループリックなどを希望する教員に配付、提供している。</p>

<p>ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きたい。</p>	<p>学習相談対応やカウンター対応に関わるピアサポーターの育成については、今後も実際の対応内容を踏まえた情報共有を行い、実践的なトレーニングを継続して実施する予定である。</p> <p>学習相談の対応件数は年々増加傾向にあるが、サポート機会のさらなる拡大を目指し、初年次科目などの正課と連携することで、学生の利用を一層促進したいと考えている。また、学習相談においては、ピアサポーターの得意分野を活かした相談対応を充実させることで、提供できる支援内容の幅を広げていく予定である。</p>
<p>ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考え。このことについて、考えや方策をお聞きたい。</p>	<p>スタディグループの活動については、ラーニング・コモンズの公式 HP で活動報告を公開することを通して、ラーニング・コモンズの効果的な利用方法やグループ学習のノウハウを他の学生と共有し、次年度以降の参加を促進することを目指している。</p>

【その他意見】

- ピアサポートの学内中核的組織として、その機能を集約させるべきではないか。
- 「ラーニング・コモンズ規程」に基づいた「AS（アカデミックサポーター）」の設置は特にコロナ中後における活用性の高まりがあったものと推測される。

【評価】

- ピアサポートの活動がすでに定着し、ミーティングや研修を行うなどピアサポートの体制整備も充実しており、さらに学生の学びを活性化する取り組み（スタディグループ）にも着手していることは高く評価できる。
- 長年、ASの活動が活発に行われ、選抜、養成の仕組みが出来上がっていることは、高く評価できる。
- 学生同士の支え合いになっていてよい取り組みであると思われる。スタディグループも興味深い取り組みである。
- ASによる学生同士の学び合いを企画したイベントを充実させていく予定であるとあるが、以前の取り組みで参加者が集まらないなどの課題があったとも記されている。内容に課題があったのか、周知方法だったのか、そのほかに要因があるのか、良い取り組みを行っているのか、しっかり分析し改善を図ってほしい。
- サポート提供者（学生 10 名前後）・利用者（2023 年度 174 名）ともに一定程度、安定運営がなされている印象である。

⑤ 情報処理センター

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
授業科目として「情報リテラシー」を提供しておられるが、そうした正規の学習機会以外に、PC や IT に関する学生の学習ニーズはどのようなものがあるかと見ているか。	2023 年 7 月に本学の全学部生を対象として IT に関する講習会ニーズのアンケート調査を実施した。2100 件の回答があり、その結果、上位になったのは Windows 基本操作 (46.6%)、動画編集 (40.8%)、Excel (39.9%)、プログラミング (35.6%)、IT 系資格 (29.9%) であった。
金銭的報酬をなしとしている理由、学内業務支援（ワークスタディ）との区別はどうしているのか。	ピアサポーターの学生達が企画する自主的な取り組みについては金銭的な報酬は発生しないものと考えている。その一方で、当センターが企画した補習会や講習会等に対するお手伝いを学生に依頼する場合には報酬（アルバイト代）を支払う。
①取り組みが進んでいない最大の課題は何か。 ②昨今の学生が IT 関連で抱えていると思われる潜在的課題の仮説はあるか。	①情報処理センターとしては、元々 TGGV150 の一環としてピアサポートとは別に補修会・講習会を計画しており、そちらを優先的に進めている。一方で、ピアサポートについては今年の 10 月に「IT ピアサポーター」の募集を行い、11 月から始動している。現在メンバーは 10 名で、週 1 のペースで集まり活動している。 ②スマートフォンの高性能化によって PC を使用する必要性が少なくなり、大学入学前に PC に接する機会が減少している。高校から与えられた端末は Chromebook か iPad であることが多く、Windows に慣れていない。Windows の OneDrive がわかりにくく、ファイルの保存場所を意識していない学生は度々ファイルが行方不明になり、苦手意識につながっている。
ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きしたい。	ピアサポーターは年度区切りとしており、来年度以降は原則として毎年 4 月から学内 LMS を通して全学生に募集の告知を行っていく。また、ピアサポーターたちの企画の案内にメンバー募集の告知を載せたり、イベントへの参加者に告知をすることで、イベントをきっかけとした新たなサポーターの掘り起こしにつながる可能性がある。 ピアサポーター発足当初より、①ピアサポーターが集まった際には報告書を提出する、②ピアサポーターが企画を立てた際にはセンター長・副センター長にプレゼンテーションを行い許可を得る、といったルールを課しており、そういった教職員との交流をピアサポーターの育成の機会としていきたいと考えている。

<p>ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考え。このことについて、考えや方策をお聞きたい。</p>	<p>基本的に活動内容はピアサポーターの自主性に任せているが、ピアサポーター同士による内輪だけの勉強会にとどまらず、自分たちが企画しそれ以外の学生に参加してもらうようなイベント開催も考えているようなので、そこから知識・技術の共有や還元につながることを期待している。</p>
--	--

【その他意見】

- ピアサポートの可能性について検討が始まっているので、トライアル的な取り組みを含めて、体制確立に向けて取り組まれることを期待する。
- 相談会におけるSAの対応は、専門的知識の付与であり、授業等に直接関係する対応でもある。よって、ピアサポート活動として捉えていくこととは区別する必要があるのではないかな。
- 情報処理センターの役割と学生の接点について理解不足で申し訳ないが、「データ処理」は文系理系問わず探究・研究を深める上で必要不可欠だと考える。それ故、何らかのニーズがあると思うのだが。
- IT 関連の知識・技術について、そもそも学生側に相談すべきニーズ（期待や悩み）があるか否かを測った方が良いのではないかな。また活動場所はオンライン上でも良い気がする。

【評価】

- ピアサポートを取り入れようとしている方針は評価できる。
- 未着手ではあるが、今後取り組もうとしている活動が具体的で方向性も適切だと思われる。

⑥ 外国語教育センター

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
両プロジェクトとサークル活動との違いは何か。	サークル活動は学生部が管轄の「課外活動」である一方で、ピアサポートは、学長の考えとしては「正課」でも「課外活動」でもない「第3の領域」での活動とのことである。よって、当センターのような機関での活動がありうると理解している。また、サークルは特定の目的を持った学生の団体であるが、ピアサポートは学生の助け合いのことを指すと理解している。（サークルは、必ずしも学生同士の助け合いは必須ではないと思われる。）
金銭的報酬をなしとしている理由、学内業務支援（ワークスタディ）との区別はどうしているのか。	金銭的報酬をなしとしているのは、それがピアサポートの趣旨の一つだからである。また、学内業務支援との区別については、「検定試験対策自習会サポート」（以下、自習会サポート）のほうは、もともと当センターで実施していた「TOEIC 自習会」という自主学修支援プロジェクトに由来するものであり、座談会でのアドバイス提供など、学生同士の学び合いがある程度重視されている点異なる。「外国語でつながる、つながるお話し会2024『世界のクリスマスを知ろう』」（以下、お話し会）のほうは、学生同士の学び合いそのものであり、学内業務の支援とは明らかに区別できるとと思われる。
現在貴校における外国籍学生はいるか。把握されている場合、それぞれ人数・国別数をお教えいただきたい。	留学生数については、国際交流部より提供された別紙（〔資料1〕）をご参照いただきたい。なお、2023 年度の実績については、HP（トップサイト→「大学概要」→「情報公開」→「留学生数及び海外派遣学生数」）でも公開されている。
ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きしたい。	ピアサポートの育成については、両プロジェクトへの継続的参加者に対する働きかけで試みることができると思われる。また、例えば当センターで実施している「えいごりらうんじ」（自主学修支援）には継続的参加者がおり、そういった学生に声をかけることでサポーターを増やすことができると思われる。 サポート機会の創出については、お話し会の参加者にアンケートを実施したので、その結果を参考にすることができる。

<p>ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考えます。このことについて、考えや方策をお聞きたい。</p>	<p>自習会サポートについては、座談会の様子を YouTube で公開（学内限定）することを計画しているため、実現すれば、参加できなかった学生へもある程度還元できると思われる。お話し会については、参加者へのアンケートを実施しており、その概要の公開などを検討していきたいと考えています。</p>
--	--

【その他意見】

- 評価は時期尚早だが、国際交流部も含めた他部署との連携が企画されていることから、今後の成果に期待する。
- 今後の取り組み状況を注視したい。
- 新たな二つのプロジェクトの成果を期待したい。
- 取り組み内容に特段の要望はないが、「国際交流」と重なる部分がある（重なるには当然だと思う）ので、「外国語教育センター」としての役割や視点から取り組み内容を考えることだと思う。
- 座談会「外国語でつなぐ、つながるお話し会」や「世界の大学生活を聞いちゃおう」は大変有意義かと思う。留学経験者や日本人学生の参加のみならず、外国籍学生も積極的に参画を促してみてもどうか。

【評価】

- ピアサポートを取り入れようとしている方針は評価できる。
- ピアサポーターの募集等今後開始されるとのことであり、期待したい。

⑦ 就職キャリア支援部

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
いわゆるピアサポートの範疇を超えるが、卒業後数年の既卒生による、現役学生に対する就職支援に関する取り組みは実施されているか。実施している場合、その内容はどのようなものであるか。	「卒業後数年の既卒生」に限らないが、卒業後数年から数十年の既卒生による現役学生の就職支援として「キャリアサポーター」がある。現在、会社ベースで120社が登録しており、学生から窓口対応で申し込みがあればキャリアサポーターを紹介し、面談を実施している。
金銭的報酬をなしとしている理由、学内業務支援（ワークスタディ）との区別はどうしているのか。	金銭的報酬をなしとはしていない。就職キャリア支援部では、保護者のための就職懇談会における「就職体験談」ではクオカードで対応し、学内の講座で「先輩体験談」や「内定者インタビュー」ではクリアファイル、ボールペン、名刺入れなどの記念品等で対応している。
体験談発表以外のサポートとしてどのような取り組みが考えられているか。	体験談発表以外のサポートとして現在考えているのが、面接の練習対応としての面接官担当、ガイダンスの手伝い、保護者の就職懇談会開催時の誘導や受付、エントリーシートの書き方や就職キャリア支援部の学生向け行事の手伝いなどである。過去においては、就職キャリア支援部主催のアナウンサー講座を終えた学生に、学内行事の司会者として協力を依頼した実績もある。
①「就活体験談」は具体的にどのような点が好評なのか。 ②「先輩サポート」は具体的に就活の何をサポートするイメージであるか。	「保護者のための就職懇談会」開催時のアンケート実施結果では、就職体験談について多くが「良かった」との意見が多い。評価内容としては、「参考になった」「具体的なイメージが分かった」「内定者が自分の言葉で語っているのがよい」「内定者に質問できて良かった」「生の声が聞けて良かった」などである。「先輩サポート」は、内定を受けた先輩達の「就職試験報告書」や「先輩体験談のイベント」を指しており、後輩からは就職活動を進めるにあたって、どのような苦労や取り組みによって内定を得たのかを知ることができ、大変参考になると評価が高い状況になっている。

<p>ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きしたい。</p>	<p>「就職体験談」については、ピアサポートとして協力してもらえる学生に誰でもお願いすることは出来ず、実施において職業の分野や性別、進学など、偏った人選ではなく、幅広い分野等の人選が必要であり、現在は内定結果の内容等を見て依頼しているところがある。</p> <p>今後、ピアサポーターの掘り起こしを行う上で、「就職体験談」を依頼した学生に、ピアサポーターとして協力してもらえるのか、従来通りのクオカードで協力してもらえるのか、選択できる機会を設けて運用を行っていきたいと考えている。ピアサポーターの学生には、この経験を通してその後のキャリアプランの醸成に活かしてほしいと考える。また、前述③の回答にも記入したその他の取り組みについても、検討していきたいと考えている。</p>
<p>ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考えている。このことについて、考えや方策をお聞きしたい。</p>	<p>例えば、ピアサポートで得られた知識を初めてピアサポートに参加した学生に共有するのであれば、新旧のピアサポーターが情報交換できる機会を作ることで達成できるものと考えている。しかし、「就職体験談」を例に取ると、発表を行った学生は、翌年の就職体験談に参加が決まる頃には卒業しており、直接的に共有するのは難しいため、実施した際の反省点や気づきなどを記録として残して、次年度に対応することが適切かと考えている。また、ピアサポートの実施状況をホームページで公開していくことも考えられる。</p>

【その他意見】

- 就職活動は受験の時以上に辛く苦しいもの。4年生の経験談イベントだけでなく、学生同士による相談会の定期的開催や相談窓口の設置等学年問わず学生一人ひとりの悩みを拾い、適時対応する仕組みが必要ではないか。
- 今回企画されている新たなサポートに加え、既に実装されている「ディプロマ・サプリメント（就活時資料）」の利活用や「GPA」の認識なども重要な要素かと思う。

【評価】

- 就職活動終了後の4年生による先輩体験談報告会を発展させるだけでは、十分とは言えないのではないかと。
- 4年生の体験談発表は、3年生にとって心強いものと思われるので、評価できる。
- 既に行われている「保護者対象の就活体験談」は好評とのこと。保護者様からのご評価の声もお聞かせ願えれば幸いである。

⑧ 教職課程センター

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
いわゆるピアサポートの範疇を超えるが、既卒生で教職にある方々が、現役学生に教職の魅力を伝えるような機会は提供されているか。提供している場合、その内容はどのようなものであるか。	「先輩教員の話聞く会」として提供している。具体的には、小学校教員、数学科、社会科、英語科、工業科、商業科と本学で取得できる免許校種それぞれについて、現役教員として活躍する先輩から教員の魅力や仕事の内容を直接聞いたり、質問したりできる取り組みとなっている。
金銭的報酬をなしとしている理由、学内業務支援（ワークスタディ）との区別はどうしているのか。	現在、ピアサポートで取り組んでいるのは、教員採用試験講座を中心に教員を目指す学生たちのコミュニティを形成することを目的としている。学生間の相互扶助を通して、お互いに高め合っていくような組織である。そのため、金銭的報酬をなしとしている。学内業務支援として、例えば、教職課程センターの行事として、直接学生に講話等を依頼する形をとるものについては金銭的報酬が生じる場合がある。
教員採用試験対策に取り組む4年生が5名というのは少ないのではないか。 3年生の参加がなかった理由をどう分析しているか。	今回対象としている教員採用試験講座は、教職課程担当教員が個別に取り組んでいるものであり、またその対象を限定している。そのため、4年生が5名と少ない参加者数となっている。この他、教職課程センターが主催する行事として、英語、社会科、小学校等の比較的教員採用試験受験者が多い免許校種については、別途教員採用試験対策講座を開講している。
「ピアサポート（学生の相互扶助）」に資する絶対的な学生数が不足しているようにお見受けするが、その根本的な要因とは何か。	その理由は、本学の場合、取得免許状が多種にわたっていることもあり、これらすべてで取り組んでいくことは困難であると判断したためである。今回教職課程センターとして、初めてピアサポート事業に取り組んでおり、現在の取り組みをベースとして、今後はそれぞれの免許校種について、教職課程担当教員の協力を得ながら活動を広げていきたいと考えている。
ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きしたい。	教職ガイダンスなどの教職課程センター主催行事などを活用して積極的に呼びかけを行うことを通して、現在取り組んでいる小規模な形での教員採用試験対策講座を全学的な形に広げていきたいと考えている。そして、教職課程履修学生が自律的に教員採用試験対策に取り組んでいく組織を醸成できるよう、教職課程センターとしてサポートしていきたい。

<p>ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考え。このことについて、考えや方策をお聞きたい。</p>	<p>現状において、具体的な形で成果を共有・還元することはできていない。その方法として、今後ピアサポート活動の対象を広げることがこれまでの成果の共有・還元につながるものと考えられる。そこで、これまでのピアサポート活動実態の反省・省察を行い、これによって得られた成果を共有・還元して行きたいと考えている。</p>
--	---

【その他意見】

- 教員志望学生の減少という中でも、一定数の志望者に経験談を含めた有益情報の提供は大きな意義を持つのではないかと。まず、1、2年次から全教職課程履修学生への理解促進策（掘り起こし）を推進してほしい。
- 貴センターのスタンスが文面からは窺い知れず、コメントがし難い状況である。方向性、優先順位、その他課題などをご明示願えれば幸いである。
- 現時点では実施できていないようだが、今後、実施の方向で検討していることは、評価できる。

【評価】

- 多様な人材を輩出する上で、教員養成専門大学ではない貴学のような大学の存在は大きい。その上で、志を同じにする学生が定期的集まるミーティングを開催し、様々なテーマで議論することは有意義な取り組みであると考え。採用後も何らかの形で集まれるコミュニティになればなお幸いである。

⑨ 国際交流部

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
グローバルサポーターズを対象とした勉強会について、他大学との共同企画もあり得ると思うが、そうした他大学との連携可能性はあるか。	今後の課題としてぜひ検討していきたい。（2023 年 8 月、西南学院大学とオンラインミーティングにて、ピアサポートを含めた国際交流全般について協議をした経緯あり）
金銭的報酬をなしとしている理由、学内業務支援（ワークスタディ）との区別はどうしているのか。	ピアサポート制度自体が無償を前提としているが、2013 年度に「留学サポーター」制度が立ち上がった時から無償での活動としており、それを継承してきたという側面もある。一時は名称を国際交流ボランティアとし、150 名の登録者を抱えた時期もあったが、活動に協力的な学生に限られるため、現状に合わせ、2024 年度よりグローバルサポーターズとして人数を 15 名に限定し、活動を行っている。しかし、サポーターズに関する交換留学生へのアンケート結果から、在籍期間を通じて継続的に一定の支援を提供する留学生支援制度が必要であることがわかったため、今後は私費外国人留学生への支援を含めたチューター制度を新たに儲け、グローバルサポーターズと棲み分けた有償活動を行っていくことも検討したい。なお、派遣留学生ガイダンスサポート（年 2 回）については前年度の派遣留学経験学生に、また、私費外国人留学生オリエンテーションサポート（年 1 回）については私費外国人留学生 2 年生に同席していただき、必要に応じてアドバイスをもらうという単発的なボランティアに近い支援活動のため無償としている。
サポートする学生、利用する学生からどのような感想、意見が出ているか。	（当日配付の別紙資料にて回答）
現在海外からの留学生の総数は何人ぐらいであるか。どの地域から来ていて、その数は増加傾向にあるのか。	2024 年度在籍の留学生は、10 の国と地域（韓国、中国、タイ、台湾、独、仏、英、露、セルビア、ウクライナ）から 63 名（8 月帰国の交換留学生及び研究生を含む）である。2024 年度のみ受入れ数は、私費留学生が 13 名、交換留学生が 39 名である。
①対象の学生側から見た場合、各種サポートの窓口は一本化されているのか。 ②サポートの多様化に伴うリソースの分散は発生していないのか。	①ピアサポートに関する調整、指示及び指導は留学生受入れ担当の国際交流課職員 2 名が固定的に行っているため、現状として窓口は一本化されているといえる。 ②各種サポートの支援者及び支援対象者、支援内容に重複がないためリソースの分散は見られない。

<p>ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きしたい。</p>	<p>まずは留学生のニーズに沿った新たな支援体制（チューター制度）を整備し、グローバルサポーターズとの住み分けを実現したい。その後、より継続的なグローバルサポーターズの活動機会創出を検討していく。派遣交換留学生については、年2回の派遣留学生ガイダンス以外は帰国後に活躍する場面がほとんどないため、派遣交換留学生数の増加を目的とした新たなピアサポート制度を早急に確立する必要があると考えている。</p>
<p>ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考えている。このことについて、考えや方策をお聞きしたい。</p>	<p>これまでは活動参加者間でのノウハウの引継ぎは見られたものの、特に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生への共有・還元は行ってこなかった。今後は、ピアサポート活動報告書の作成及び報告書の大学HP や留学説明パンフレット等への掲載を検討していきたい。</p>

【その他意見】

- 既に部としての体制として構築されており、グローバルサポーターズ制度が実施体制の柱として機能し、今後更に充実した活動に繋がることが求められる。
- 以前の組織の10年を実績としていることは大きな強みであるので、今後の活動に活かしていただきたい。
- 多様な側面から「留学」に際するきめ細かなサポート体制が敷かれている反面、ややもすると過度な乱立化・細分化がされているようにも感じる。

【評価】

- すでにグローバルサポーターズやレジデント・アシスタント等のピアサポート制度を開始しており、今後の更なる展開が期待できる。
- グローバルサポーターズ制度において、サポート学生数に比して、利用学生数が少ない。他の項目においても、サポート学生と利用実績でバランスを欠いている。
- 2024年度からの組織替え、新たな取り組みを始めたことは評価できる。
- ピアサポートの取り組みが具体的でわかりやすい。
- ピアサポートを考えたとき、留学生や新入生に対するサポートが一番イメージしやすい。その上で、海外からの留学生と海外への留学を希望する学生へのサポートの両輪で取り組むことは、互いの興味関心に合致したものとなるだけでなく、語学力の向上や異文化理解につながると考える。期待する。
- サポート側・利用側ともに十分な登録者数があり、具体的な取り組みが実行されているものと見受けられる（新規サポート5種）。

⑩ 入試部

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
「ピアサポートを活性化するための諮問」への答申（2023.10.30）において提案されている新規事業について進捗状況をご教示いただきたい。	提案したものについては、ピアサポート（学生による学生のための活動）の範囲を超えているため、ピアサポートとしての活動はしていない。なお、一部は入試業務として実施している。
現状は学内業務支援として行っているとのこと、今後、ピアサポートとしていくことについて、どのように考えているのか。	「入試」という特性上、ピアサポートを実施することは難しいが、受験生を対象とした活動もピアサポートとなるのであれば、学生に対する謝金費用負担等が可能となれば、学生による学内支援業務を積極的に推進する。
今後「入試部」で必要になると思われるサポートの対象者や内容は何が想定されるか。	基本的に受験生を対象としたものになる。
ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きたい。	「入試」という特性上、ピアサポートを実施することは難しいが、受験生を対象とした活動もピアサポートとなるのであれば、学外での大学説明や入試説明会への学生の積極的な関与を可能とする事務制度の整備を推進する。
ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考え。このことについて、考えや方策をお聞きたい。	「入試」という特性上、ピアサポートを実施することは難しいが、受験生を対象とした活動もピアサポートとなるのであれば、学内学生及び教職員に向けた、様々な活動に関する報告・広報活動（読んでもらえる HP サイト）の充実化を図る。

【その他意見】

- 事業内容自体がピアサポート活動の推進にはそぐわないのではないかと。
- 有償で実施せざるを得ず、ピアサポートがなじまないとの判断のようだが、説明が不足していると思われる。
- 学生による母校訪問の際に、現在の学びや学生生活などについて報告するだけでなく、現在高校で取り組んでいる探究活動に関連して、高校が探究活動を進めていく上でどのような点で悩み、サポートを必要としているのか。どのような点で貴学や貴学の学生がサポートできるのかを相互理解することで、また、大学の先生方も忙しいので、学生が高校の探究をサポートすることで、高校と大学の連携が進み、さらに貴学で学びたいという意欲が増し、高校生の進路指導にもつながるのではないかと。

【評価】

- 高校生が大学選択をする上で、オープンキャンパスでの担当者からの説明や模擬授業の体験だけでなく、学生と直に接し、様々な話をする事で得る大学の印象によるものが大きい。その上で、学生のプレゼン能力とコミュニケーション力の向上に期待する。

⑪ 広報部

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
大学広報支援サークル GATE について、現在はどうなっている（どのような挺入れがされている）のか。	コロナ禍の影響で2年間オープンキャンパス業務が途絶え活動が弱体化したため、「GATE」を発展的に解消して、組織力を強化するために新しく「ENTER」という団体を立ち上げた。
金銭的報酬をなしとしている理由、学内業務支援（ワークスタディ）との区別はどうしているのか。	オープンキャンパス実施に関しては、クオカードを支給している。オープンキャンパス運営活動がピアサポートにそぐわないという指摘もあるが、現状ではピアサポート活動の趣旨に合わせている。
活動した部員からどのような感想、意見が出ているか。	大学の一員として活動できたことによって愛校心が高まったなどの感想、意見が出ている。
①「ENTER」が学生団体として設立された背景をお教えいただきたい。 ②設立から早期に100名を超える部員獲得ができた要因をお教えいただきたい。	①コロナ禍の影響で2年間オープンキャンパス業務が途絶え活動が弱体化したため、「GATE」を発展的に解消して、組織力を強化するために新しく「ENTER」という団体を立ち上げた。 ②実際は200名を超える応募があり、面接を行い、意識の高い100名に絞った。高校時代にオープンキャンパスに参加して身近な存在であったこと、コロナ禍で対面での活動が制限されていたこともあり、大学に入ったらいろいろな活動に参加して有意義な学生生活を送りたいという欲求の表れと思われる。
ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きしたい。	「ENTER」の活動は毎週1回ミーティングを行い、年4回実施されるオープンキャンパスの企画運営（学生オリジナル企画も計画）を行い、その中に職員も入りメンバーの教育・育成を図り、東北学院の顔として自走できる団体に育てていきたい。
ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考え。このことについて、考えや方策をお聞きしたい。	オープンキャンパスの企画・運営面におけるサポーターとして「大学の顔」として、受験生やその保護者に本学の魅力を伝えることによって、「東北学院ブランド」を高めることができた。その結果、東北学院の社会的評価の向上、志願者増、就職率アップに繋がっていくと考える。「ENTER」は現在、学内業務支援・ボランティア両面の活動を担っていることから、ピアサポートとしての立ち位置から外れる可能性を踏まえ今後検討していきたい。

【その他意見】

- 事業内容自体がピアサポート活動の推進にはそぐわないのではないかと。
- 今後、大学のあらゆる領域での広報活動に、学生の力を生かしていくことが、ますます必要になると思うので、学生広報サポーター制度に期待したい。

- 「部員獲得・来場記録」とともに非常に高成果を挙げられている好事例かと思う。ぜひ情報やノウハウの水平共有を！

【評価】

- オープンキャンパスの企画運営に特化した運営団体（ENTER）を設置し、一定の活動実績を上げていることは評価できる。
- オープンキャンパスの実施運営に、多くの学生が積極的にかかわっていることは、高く評価できる。
- 当初の 13 名から多くの学生（部員）に広がり活動できており評価できる。
- 「やらされ感」や「頼まれ仕事」ではなく、理念や目的・目標を共有し、そのための手立てを学生が主体的に考えることができるよう改善しようとしていることに共感する。

⑫ 学生部

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
<p>オリエンテーションリーダーによる評価（質問紙調査等）や振り返りを行なっていれば、そこからどのような課題が明らかになっているのかご教示いただきたい。</p>	<p>評価・振り返りについては、オリエンテーションリーダーへのアンケートという形で行っている。オリエンテーションリーダーの意見とともに、オリエンテーション期間に伺い知れた新入生の意見も吸い上げることができている。</p> <p>課題についてはその年ごとに異なるが、2024 年度は、実施内容の時間配分（多い少ない）の件、学内ネットワークへのアクセス集中・ログイン不具合が発生した件、新入生に配付する資料の準備作業について改善を求める意見・回答が多く寄せられた。</p> <p>学生課としては、教職員へのアンケート結果に加え、現場を担当するオリエンテーションリーダーからの意見を次年度のオリエンテーション業務（リーダー採用・プログラム作成等）に反映させている。</p>
<p>オリエンテーションリーダーに学内全体のピアサポート機能を集約させることはできないか。相談者の負担は心理的に軽減されるのではないか。但し、他の部署との連絡調整は大学職員が担うことで学生の負担感は軽減されると思われるが。</p>	<p>オリエンテーションリーダー（会）は、「新入生が大学生活を円滑にスタートできるよう支援する」組織であり、毎年公募形式で募集を行っている。その目的から、新入生に近い立場の2年生が半分以上を占めており、公募形式であるため特定の学科の学生が多くなるという傾向がある。そのため、4年間の継続サポートを主眼とする（と解釈している）ピアサポートを包含することは、現状難しいと考えられる。加えて、65 年の歴史を持つ組織であることから、本来の目的から逸脱した場合に、その伝統が失われる危険性も考慮する必要がある。また、オリエンテーションリーダーを経験した者で、時間的・金銭的に対応可能な者は、ピアサポートをはじめとする学内の種々の活動に既に参加しており、改めてオリエンテーションリーダー（会）の体制を変更する必要がないことも理由として挙げられる。</p>
<p>金銭的報酬をなしとしている理由、学内業務支援（ワークスタディ）との区別はどうしているのか。</p>	<p>オリエンテーションリーダー会は、65 年前の設立時から、金銭的報酬のないボランティアの団体（先輩学生が、新入生の大学生活の円滑なスタートをサポートすることが目的）として設立された。毎年その目的に沿って期間限定で結成される組織であるため、学内業務支援（ワークスタディ）とは一線を画している。</p>

<p>学生常任委員会と大学との関係をもう少し詳しく知りたい。予算措置や大学の介入の度合いなど。</p>	<p>学生会常任委員会と学生課の関係は、基本的に平等ではあるが、年齢・社会経験の差があるため、様々な内容で助言・指導を行っている。併せて、各種行事への参加依頼等も行っており、その関係性は良好である。</p> <p>学生会の予算については、学納金と同時徴収している学生会費（年間 6,000 円）がその原資となっている。</p> <p>毎年、常任委員会が中心となって各課外活動団体から提出された予算要求を精査し、示達する。</p> <p>予算執行後の監査については、毎年、常任委員会とは別に「会計監査委員会」を立ち上げて、その委員の学生が監査を行っている。その際は並行して学生課の職員も会計監査に対して助言・指導を行い、誤りのないよう導いている。</p>
<p>学生部の活動はオリエンテーションリーダー活動以外はあるか。</p>	<p>ピアサポート機能としての活動は、オリエンテーションリーダー以外はない。</p>
<p>リーダー（直近 121 名）と新入生（約 2800 名）の割合（平均約 23 名）の割合はサポート実施に際して概ね妥当であるか。</p>	<p>妥当と考えている。</p> <p>これまでの活動から、1つのグループ（クラス）に2～3名のリーダーが配置できれば、運営に問題ないことが証明されている。加えて、各グループ毎にグループ主任（高校までで言うクラス担任）と呼ばれる専任教員が配置されており、教員と先輩学生の双方が新入生に適切なアドバイスを行うという環境を整えているため、サポート体制としては申し分ないと考える。また、オリエンテーションリーダーの数が多すぎると、学生課の指導の目が行き届かなくなり、人数確保の面においても難易度が上がるため、現在の 110～120 名程度の人数が妥当であるとする。</p>

<p>ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きしたい。</p>	<p>育成においては、実際の活動時期である4月より前の3月中旬から3週間程度、学生課による研修を行っている。具体的には学生部長による活動意義の説明、大学宗教主任による大学礼拝に関する講話、就職キャリア支援課職員を招いての社会人基礎力の養成講座、学生健康支援課職員によるカウンセリングの観点から考える新入生との接し方など、模範的な学生としての知識・立ち振る舞いを学ぶ機会を設けている。また、例年実施している教職員・新入生のアンケート結果を踏まえて、次年度の研修・育成方針に反映している。</p> <p>サポート機会の掘り起こしについては、新入生オリエンテーションは毎年4月上旬で活動を終了するため該当しないと思われる。なお参考までに、オリエンテーション期間が終了しても、リーダーと新入生との個人的なつながりを生かして、大学生活を送る上での様々なアドバイスが継続するケースは多く見られる。また、サポートを受けた新入生が翌年のリーダーに応募するなど、活動が継承されるケースが多い。</p>
<p>ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考え。このことについて、考えや方策をお聞きしたい。</p>	<p>成果を共有・還元することについては賛成である。サポート内での相談内容・回答については、リーダー向けのアンケートにおいて収集しており、次年度のオリエンテーションにおいても想定されるケースとして、毎年引継ぎを行っている。また、期間中に欠席した新入生に対しても、可能な限り教職員でサポートし、該当の学生が悩み迷わないような体制を構築している。</p>

【その他意見】

- ピアサポートの学内中核的組織として、ピアサポート機能を集約させるべきではないか。
- 私も学生時代にオリエンテーションに参加したが、コミュニケーションツールとして友達作りに大変役に立った。
- 非常によく仕組みされた体制。事後アンケートと改善措置のPDCAも上手く回っており、流石65回、不断の歴史がなせる技という印象である。

【評価】

- オリエンテーションリーダー会を組織し、新入生オリエンテーションを実施しており、新入生支援が充実できていることは評価できる。
- 新入生オリエンテーションおよびオリエンテーションリーダーについては、ピアサポートとしての機能を果たしている。
- 新入生オリエンテーションで多くの学生たちが活躍していること、また、その研修体制が充実していることは高く評価できる。
- 以前から続けられている活動であり、今後に向けての視点も的確であると思われる。

⑬ 学生健康支援センター

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
<p>学生の健康支援についてピアサポートを行う活動とは、例えばどのようなものが想定されているのかご教示いただきたい。</p>	<p>本学学生健康支援センターは保健室と学生相談室、学生支援室（障害学生支援）で構成されている。その中で、現在は主に障害学生支援でのピアサポートとして活動している。想定している活動は以下のようなものである。</p> <p>実践活動：バリアフリーマップ作成、チルスポット（居心地のよい場所）マップ作成、交流イベント企画・運営等</p> <p>研修：手話やノートテイク等の障がい学生のサポートの勉強会、障害者や専門家による講演会への参加等</p> <p>※上記のうち、現在はチルスポット・マップの作成を行っている。</p>
<p>健康面に特化している中で、相談内容や解決策等について、広く一般学生にフィードバック（周知）しているか。</p>	<p>ご質問をいただいた相談内容や解決策のフィードバックにあたるのかわからないが、今年度は「身体と心の困りごと相談と修学上の支援窓口について」というテーマで、青年期の心の問題や合理的配慮の話をしながら学生健康支援センターの3室の説明を全学生を対象にオンラインで行っている（11月29日開催）。</p> <p>また、年に2回「学生健康支援センターニューズレター」を発刊し、心身の健康についてのコラムを大学ウェブサイトに掲載している。</p>
<p>障害学生支援について、一部有償としているようだが、学生たちの不満はないか</p>	<p>有償での障害学生支援は「学生健康支援センター学生スタッフ」としてピアサポートと区別している。学生健康支援センター学生スタッフの活動では、以下のようなある程度の支援スキルを必要とする個別支援を想定している。</p> <p>想定される活動：ノートテイク、音声認識ソフトの文章修正、資料のPDF化（拡大）、Zoom等によるオンライン受講の機器操作等</p> <p>ピアサポーターが個別支援を行う場合には、この学生スタッフを兼任することになる。</p>
<p>障害を持つなどサポートが必要な学生はどの程度いるとみているか。</p>	<p>現在、学生支援室で支援を行っている障害学生は大学全体の学生数の約0.6%（2023年度69名、例年60数名で推移）である。もちろん修学支援を必要としない障害学生もいるので、実際の障害学生数はもっと多いが、正確な人数は把握できていない。</p>
<p>日常的にどのような活動をされているのかお教えいただきたい</p>	<p>定期的な開催ではなく、登録者の中から活動ごとに希望者を募って活動をしている。現在はチルスポット・マップ作成に常時5、6名が参加している。</p>

他学でも類似の概念や組織が存在するの か。	障害学生のピアサポーターは国立大学を中心に近年多くの大学で組織されてきている。仙台では東北大学や宮城学院女子大学などで活動している。障害学生支援は個別性が高いため、今後ニーズは増えていくと思われる。なお、本学の学生健康ピアサポーターは、現在登録者が18名となっている。
ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きしたい。	手話やノートテイク等、障がい学生のサポートに関する講習会や障害者や専門家による講演会は、ピアサポーター以外の学生も参加できるようにし、障害学生支援に関心を持ってもらい、ピアサポーター増加につなげていきたいと考えている。
ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考え。このことについて、考えや方策をお聞きしたい。	現在行っているチルスポット（居心地のよい場所）マップは、学生から集めた情報をもとに作成し、成果物を公開することになる。その他、今後行うピアサポートによる活動は、SNS 等を通じて全学生に発信していけるとよいと考えている。 また、追加質問1で回答した講習会、講演会等の開催もピアサポート活動に参加できない学生への情報の共有・還元につながると考えている。

【その他意見】

- ピアサポートの学内中核的組織として、ピアサポート機能を集約させるべきではないか。
- 障害を持った学生の支援を、どの程度まで、学生が担うのか、様々な危険性も伴うことから、専門の職員を雇用する必要があるのか、難しい問題と思う。どの程度の障害まで、大学が、受け入れるのかという課題もあると思う。
- 大学内に「学生健康支援センター」という学生参加型の組織が存在する、ということ自体が素直に驚きであった。

【評価】

- サポーターを10月から募集するとのことであり、期待したい。

⑭ 地域連携センター

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
<p>学生による更なる主体的な運営を可能にするためにも、学外の自治体や NPO との連携が有効かと思われるが、現状どのようになっているのか、課題を含めてご教示いただきたい。</p>	<p>現在地域連携センターでは、仙台市社会福祉協議会とパートナーシップ協約を締結しており、この関係性からボランティアなどの活動をうまく進められていると考えている。2024 年夏には、能登半島地震に係る災害ボランティア活動を実施しており、この際にも仙台市社会福祉協議会から現地の被災状況などの事前の情報共有などももらいながら活動計画の立案に活かすなどのことができている。また、その後の酒田市の水害に係る災害ボランティア活動の際にアドバイスや現地状況などの貴重な支援を受けている。最後に、本学学生が参加する「てらいく」などボランティア活動での地域 NPO などと上手な関係が築けていると考えている。</p>
<p>総合ボラの「運営チーム」の活動指標、方針等が不明確であり、学生部のピアサポート活動との違いを明確にされたい。</p>	<p>本学では、教養教育センターの探究系科目群の中に「地域ボランティア活動の探究（１年）」「地域課題の探究（２年）」を配置している。探究系科目は全６科目中３科目を選択必修としているので、本学の多くの学生が、ボランティア活動に必要となる基礎知識から、地域に内在する課題を学修しており、これらの科目の内容等は地域連携センターが設計している。この科目を受講した学生が総合ボランティアに登録し、さらに仲間を見つけチーム等を組んでいくが、これらの個人に対する支援やチームの立ち上げや運営をサポートするのがボランティアチームの一つである「運営チーム」である。このように、地域連携センターでは、本学のボランティア活動を単なる課外活動の一つとせず、教育から実践までの教育活動の一環と捉えており、学生課が主幹する課外活動としてのボランティア活動という立て付けにはしていない。</p>
<p>金銭的報酬をなしとしている理由、学内業務支援（ワークスタディ）との区別はどうしているのか。</p>	<p>地域連携センターでは、ボランティア活動を統括しているため、その多くは金銭的報酬はなしとなっている。もちろん、学内業務支援（ワークスタディ）のうち報酬が出せない（交通費・昼食・一般的な謝金程度）のものは学内ボランティアという活動形態という認識になっており、有償のものは学内業務支援という枠組みにしている。</p>

<p>①ボランティア活動における印象的なエピソード等があればお教えいただきたい</p> <p>②他校や他団体との交流状況もお教えいただきたい</p>	<p>2024 年夏の能登半島地震に係る災害ボランティア活動に参加した学生が実際に被災状況を目の当たりにし、また、被災者の生の声を伺うことで、単なるネットや TV の画像を通した被災状況との違いを認識している。この効果を受け、災害ボランティア活動後の「能登半島地震及び 7 月豪雨災害に係る募金活動」の実施や、その後の酒田市での災害ボランティア活動の実施に繋がったことは、地域連携センターが意識する「教育から実践」につながるボランティア活動が具現化できているのではないかと感じている。なお、学生が被災地とつながることで抱えるストレスケアに関する講習などは、事前事後に実施していることを申し添える。加えて、能登半島地震に係るボランティア活動の際には、北陸学院大学の施設を使用させていただいたほか、同時期に青山学院大学や桜美林大学の災害ボランティア活動も実施されており、現地での意見交換などの交流が行われた。また、後日、北陸学院大学被災地支援センターより募金のお礼に関するご挨拶なども受け取っている。さらに、一般ボランティア活動においても、他大学の学生と連携した活動を実施していることを把握している。</p>
<p>ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きしたい。</p>	<p>現状では、「地域ボランティア活動の探究（1 年）」「地域課題の探究（2 年）」において、本学の総合ボランティアステーションや運営チーム（ピアサポート）だけではなく、学内の他課におけるピアサポート活動説明や勧誘を幅広く行っている。それぞれの課のピアサポートの育成に関しては、担当課が実施しているので、ここでは、ボランティア運営チームに関する説明となるが、現時点は、運営チームの先輩が後輩を育成する良い流れが構築できていると考えている。また、運営チーム全体が間違った方向に進まないように、適宜、教員がアドバイス等をする機会を設けているが、教員にとって負担も大きく、この部分にコーディネーターを配置したいと考えているが、予算の都合上、確固たる見込みはまだ立っていない。この点は、大きな課題であると捉えている。</p>

<p>ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考えます。このことについて、考えや方策をお聞きたい。</p>	<p>前項の質問と同様に、それぞれの課のピアサポートの育成に関しては担当課が実施しているので、ボランティア運営チームに関する説明とする。本学の探究系科目「地域ボランティア活動の探究（１年）」と「地域課題の探究（２年）」には、まだ「実際のボランティア活動の参加に踏み切れていない」受講生が多く在籍している。これらの学生は、「ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生」と捉えることができるが、総合ボランティアにおけるボランティア活動やボランティア運営チームが支援した内容等は、ホームページ等で広く学生に公開すると共に、当該科目の中でも適宜解説を実施しており、このような学生に対する実際の生の知識の還元につながっているのではないかと考えている。</p>
--	---

【その他意見】

- 普段から災害が発生したときに地域と連携してどう対応するのかを考えたり、その準備をするなどの「防災」の視点からのボランティア活動は含まれないのか。
- 自社でも現在「社会貢献ボランティア」との接点を図っている最中である。学生が主体的に、かつ自主的に SNS 発信している点（32 件）を見習うべきと感じた。
- 他地域で災害が発生した際に駆けつけ、地域を支援するボランティア活動以外の活動も行っているか

【評価】

- 総合ボランティアステーションを設置し、学生主体による運営チームがピアサポートを実施しており、今後さらに学生の主体性を活かした活動、特にボランティア活動の支援活動が展開されることが期待できる。
- 災害ボランティアステーションを発展させ、より幅広い総合ボランティアステーションを設置したこと、コーディネーター役の教員が活動を支援していることは、高く評価できる。
- 総合ボランティアを位置付け「運営チーム」を立ち上げて学生主体で動き出しており評価できる。

《大学全体》

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
ピアサポートが活性化することで、学生にどのような成長を促すことができるのか、全学レベルで調査し、活動の成果を把握していく必要があると思うが、どのような取り組みが予定されているか。	ピアサポート参加により、コミュニケーション能力、共感力といった社会的スキルを高められると考えられる。また、校内での居場所を作ることができキャンパスの活性化にもつながると考えている。本学におけるピアサポートの組織化は今年検討を始めたばかりであるため、実施状況の調査及び活動の成果の把握は地域連携部を中心にこれから進めることになる。
有償の学内業務においても学生の力を生かしていくことは重要と考えるが、無償のピアサポートとのすみ分けはどのように考えているか。 無償の活動の中で、特に優れた活動に対しての認定バッジ以外のインセンティブ、たとえば、顕彰制度などは考えているか。（一部活動については、検討されているようだが、より幅広い適応を考えているか。）	現在のところ、無償のものをピアサポート（学生が学生を支援する）、学内ボランティア、学外ボランティア、有償のものを学内業務支援として定義して区別していく予定である。顕彰制度については、今後の課題である。
「ピアサポート」担当部署間における情報やノウハウの水平共有は定期的になされているか。	副学長（総務担当）がピアサポート実施部署の代表者を招集して「ピアサポート全体打ち合わせ会」を開催し、現状報告、課題の洗い出しを行ってきた。当面、この会で情報共有を進める予定である。
ピアサポーターの育成やサポート機会の掘り起こしについて、今後の方針をお聞きしたい。	上記「ピアサポート全体打ち合わせ会」で議論していく予定である。
ピアサポート活動において得られた成果（例：サポート内での相談・回答内容、イベント実施上のノウハウ等）を、ピアサポート活動に参加もしくはサポートを利用しない／できない学生に対し共有、還元することも重要であると考え。このことについて、考えや方策をお聞きしたい。	上記「ピアサポート全体打ち合わせ会」で議論していく予定である。

【その他意見】

- ピアサポート制度を全組織に半ば強制的に導入することは、各組織の事業内容、人的体制等から見て、難しい面があるのではないかと。また、無償ということから学生の負担感が少ない形にならざるを得ず、導入するとしても体制や実績に対する評価をどうするかも十分な検討が必要ではないかと。
- 学長の諮問に対して、各部署が真摯に前向きに回答していることは、とても素晴らしいと思

う。

- ピアサポート活動が最近なり本格的に取り組み始めたテーマが数多いことを認識した。東北地域で最大規模の私立大学であり、今後は体制づくりも含めて継続的に活発に活動していくことを期待している
- 部署によって取り組みやすいところとそうでないところがあると思われ、また担当する教職員の数も限られるので、大規模な取り組みでなくてもその組織の特性を活かして多様な学生（正課のみでは居場所を見つけられないような学生も含め）の拠り所や交流の場となればよいと思われる。
- 正直、一番大きく印象に残ったのが「縦割り化と分散化」である。限られたリソースの集中、ムーブメントの醸成を図る上で施策の統合や既存部署との連携も視野に入れてはどうか。

【評価】

- 大学全体の多くの部署で、ピアサポートの体制づくりを積極的に取り入れようとしている姿勢は高く評価できる。ピアサポートにかかわる学生の養成、研修、また、その効果検証を積極的に行っている、もしくは行おうとしている姿勢も高く評価できる。
- 多くの部署にとって取り組み初年度であるが、まずは取り組みを始めている様子がかげえ、評価できる。具体的に動く中でピアサポートについての気付きや課題意識が教職員に浸透し、形だけでない効果的な取り組みにつながっていくのではないかと考える。
- 担当部署により温度差、優先順位、実行頻度、企画力の差にばらつきが垣間見られる。

2. 国際化・国際交流

① 国際交流部

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
<p>体制が変わったとの記述があるが、変わったことによりどのような変化や効果があったのか。</p>	<p>2024 年度は本学の国際交流組織体制が大きく変わった。今までは本学の国際交流関連事業は大学事務組織である国際交流部によって実施され、定常の国際交流業務は円滑に対応してきていたが、派遣および受け入れ留学生の語学教育や授業相談等など本来教員が担当すべき業務も職員が対応せざるを得ない状況であった。今年度から新たに「グローバル教育センター」を発足し、センター長・副センター長、派遣業務担当主任、受入れ業務担当主任を始め、17 人の教員をセンター所員として取り入れ、上記の留学生派遣および受入れに関わる学生教育業務に円滑に対応できるようになり、国際交流業務に関する審議も「国際交流委員会」（廃止）から「グローバル教育センター会議」に変更し、副学長（総務担当）が議長として本学の国際交流事業を統括する体制となっている。今年度は発足初年度のため実施・運営については試行錯誤で探りながら行っているが、明らかに教員の参加や活躍によって国際交流活動が活発になっており、その成果の一つとして、海外大学との協定締結は例年平均の 1、2 校程度から 7 校へと大きく伸びた。</p>
<p>日本人学生が留学したくとも、それが実現できない要因はどこにあるのか。奨学金等の金銭面なのか、それとも海外の治安（安全性）に不安を感じたためらっているのか。外に出たがらない風土なのか。</p>	<p>東北地方の私立大学生から海外留学へ行く人が比較的少ない要因としては、地方の風土文化と社会や家庭の影響、経済的・語学力の面での個人的な事情および情報不足などが挙げられる。（１）東北地方は自然豊かで地域社会の結びつきが強い傾向があり、地元での就職や生活を重視する学生が多い。さらに、周りの家族や地元の友人が留学の重要性や価値を十分に理解していない場合も多くあり、学生が支援を得にくい状況にある。（２）留学は学費や生活費、渡航費などがかかるため、全国的に平均所得が低い地域の多い東北地方出身の学生は家族の支援が難しい場合もある。（３）留学では英語や現地の言語のスキルが求められるため、本学の学生は留学に必要な語学力資格条件をクリアするにも大変苦労する場合がある。（４）先輩や同級生などに留学経験が少ないため、学生には海外留学に関する情報が少なく、留学の具体的な手続きやプログラムの情報に触れる機会が少ないことも留学に消極的な理由の一つと考える。</p>

<p>①近年「協定校外」への派遣留学が相対的に増えているがその要因とは何か。</p> <p>②一定数「マルタ国」への短期留学が見られるがその要因とは何か。</p>	<p>①協定校が提供する短期プログラムのスケジュールが本学の学事暦と合わないことが一番の要因ではあるが、比較的安価であること、研修期間が短いこと、提供するプログラム数が多いことなどもその理由として考えられる。しかし 2024 年度は協定校プログラム参加者の割合が、2023 年度の 13%（参加者総数は 100 名のうち 13 名）から 31%（同 91 名のうち 29 名）へと大幅に増える見込みである。その要因としては、今年度新たに協定校となったカナダ・レニソン大学の英語プログラムが日程的にも参加しやすく好評であることや、昨年度から開始したオーストラリア・サザンクロス大学のプログラム参加者が増加したことが挙げられる。</p> <p>②については、1 週間という短期間から選べるプログラムであったこと、他の英語圏に比べて安価だったこと（同時期 4 週間プログラムをカナダと比べると約 10 万円の差）、ヨーロッパ圏からの学習者が多く日本人が比較的少ないことなどが要因である。ただし 2024 年度は国際情勢への不安などから参加者が激減した。</p>
---	---

【その他意見】

- 受け入れ留学生は様々な目的で入学すると思われるが、やはり、卒業時の日本語習得レベルが大きなポイントである。就職支援体制との関連の中で、実効性のある習得システムの構築に期待したい。
- 日本語学習や日本文化に関する科目が多数あり、支援体制がある割には、留学生の絶対数が少なく、資源があるのに「もったいない」という印象を受ける。専門の教職員を配置することにより、さらに活発になるのではないかな。
- 2022 年度以降利用者が増加していることは良い傾向である。
- 貴校における学生たちの「海外意欲」の高さを非常に嬉しく、かつ心強く思った。ぜひ渡航前後に語学や生活要件のみならず「自国のアイデンティティ教育」もお願いしたい。

【評価】

- 2024 年度にグローバル教育センターの立ち上げ、グローバルサポーターズ制度の構築・運営など、国際交流を支援する諸制度を整備しており、今後の国際交流への効果が期待される。
- 組織体制や各種プログラムについては、様々な視点を踏まえ、的確に整備されている。
- 2024 年度からの改組とのこと、その活動の評価は今後のこととなるが、協定校 39 校、交換留学生が増加してきていること、様々な国際交流イベントが活発に行われていることは、評価できる。
- 様々な取り組みを行ってきた中で課題が分析され、今後推進すべき取り組みも多岐にわたっているが、優先順位を付けて計画的に実施していくことが必要だと思われる。
- これまで以上に、留学生の受け入れ体制を整備し、授業・研究室、キャンパスに外国人学生が多くいて、それが当たり前となるような雰囲気をつくってほしい。また、プログラムやフェアの開催、情報の積極的な発信により、日本人学生の海外留学の経験を増やしてほしいと思う。

Ⅱ．2024 年度東北学院大学外部評価委員会 委員による所見

- 貴校の「強み（東北最大のブランド私学）」がよく整理され、実績・取り組みともに申し分ないと思う。

② 宗教センター

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
<p>①「73 ランチ」の 73 とは何か。</p> <p>②各種活動に対して今後「社会人や一般人」の受け入れは視野に入っているか。</p>	<p>①「73」とは会場となる土樋キャンパスの宗教センター別室が「7 号館 3 階」にあることが由来である。学生や諸外国出身の宣教師の方々に土樋キャンパスの宗教センターの活動場所を覚えていただけるようシンプルに命名した。なお、宗教センターでは基本的に「ナナ（7）・サン（3）」と呼んでいるが、例えば外国人ゲスト宣教師が「セブン・スリー」や「セブンティースリー」と呼んでも何ら問題ない。</p> <p>②TGCF の活動は東北学院幼稚園の園児から東北学院大学大学院の大学院生をはじめ、教職員など主に現役の「TG（東北学院）」在籍者同士の交流（フェロシップ）を第一義的な目標としているため、現段階では「社会人や一般人」といった TG の外部の方々の受け入れは視野には入っていない。</p>
<p>English Café、73 ランチとも参加する学生の人数や傾向はどうか。</p> <p>メンバーは固定されているか。</p>	<p>参加する学生は固定の学生もいれば、新規で参加する学生も毎回数名いる。土樋キャンパスが会場となるため、五橋がメインとなる主に新学部の子の参加率は少ない傾向があるものの、manaba 等で学生に広報することで、五橋からの参加率も上がる傾向は見られる。学年で見れば、1 年生の参加率が多く、3 年生では、後期になると演習・就活などの関係で出席できない学生が増えるようである。後期は就活が終わった 4 年生の参加率が上がるなど、イベントの開催の時期によって、参加する学生の傾向や人数も変わるようである。また 1 年次から参加していた学生が、2 年次以降も継続して参加してくれる傾向が見られる。</p>

【その他意見】

- キリスト者数が減少し、また、高齢化が進んでいる中で、キリスト者学生の確保は、キリスト教学校全体の課題であると思う。
- 「TGCF（クリスチャンフェロシップ）」理念のもと定期的かつ継続的、しかも異国間（9 カ国）・文化領域（音楽）に至るまで網羅されている点が素晴らしい試みだと思う。

【評価】

- English Café や 73 ランチ、Music Service 等により、国際化の機会を幅広く積極的に提供しており、成果を上げていることは評価できる。
- 多彩な宣教師を講師に迎えて、イベントを実施していることは評価できる。

《大学全体》

【質問と回答】

外部評価委員からの質問	大学からの回答
-------------	---------

<p>国際交流事業をさらに強化するためには専門性を有するスタッフが配置され、一定のリソースが配分される必要があると思うが、大学としてどのように対応していく方針なのかご教示いただきたい。また、学生の留学を促進・支援する方策（特に、経済的サポートや奨学金制度の拡充等）についてもお考えをお聞かせいただきたい。</p>	<p>ご指摘の通り、大学の国際交流事業を更に強化するために専門性を有するスタッフの配置などのリソース配分が必要不可欠と考える。これに対応するために、国際交流担当の教員やスタッフを国内外の国際交流・留学生教育に関連する専門会議やイベントに参加させ、本学の PR と同時に国際交流の専門知識および経験を蓄積していくという措置に取り組む。また、留学のための各種語学検定試験対策用 e ラーニング教材の低価格提供や、検定試験受験料の補助、語学ラウンジ等の語学イベントの定期開催により在學生と外国人留學生の共修する機会の提供、留学する学生に対する本学による長期・短期留学奨学金・補助金の給付、また学生が各種の国公立組織・民間団体から提供される留学奨学金へ申請を推奨し、アシストする。</p>
<p>昨年度の諮問答申の内容と今回のヒアリングシートとのつながりがわからないが、諮問答申にある計画策定と体制強化はどう進められているのか。</p>	<p>昨年度の学長からの「国際交流を促進するための諮問」の答申において、様々な計画や体制強化方策を提案した。本年度は、提案した項目の中の以下の内容を実現し、また残りの項目も着実に進めて行く予定である。</p> <p>（１）国際交流事業の教育組織としての「グローバル教育センター」の発足。（２）私費外国人留學生の受入れ増を図るために、外国人留學生特別選抜の改善策として、①出願資格の日本留学試験の日本語点数の明確化、②年１回から２回実施へ増加、③渡日前入学許可制度の採用。（３）派遣学生を増やすため、短期留学の派遣に重点を置き、短期留学を主とした新たな協定の締結を進め、例年平均１校程度から７校の協定締結を実現。</p> <p>（４）短期留学への参加を奨励するために短期留学奨学金制度を新設。（５）全学生を対象として、英語検定試験対策用 e-learning 教材を低価格で提供。</p>

【その他意見】

- より活発な活動、参加学生の増加などを期待したい。
- ピアサポート活動が最近になり本格的に取り組み始めたテーマが数多いことを認識した。東北地域で最大規模の私立大学であり、今後は体制づくりも含めて継続的に活発に活動していくことを期待している。

【評価】

- グローバル教育センターを立ち上げ、ピアサポートも含め更なる充実を図ろうとする組織改革は評価できる。
- 多くの取り組みをしていること、豊富な資源があることは評価できる。

Ⅱ. 2024 年度東北学院大学外部評価委員会 委員による所見

テーマ：教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況

＜大学における正課外での学生支援の取り組み＞

1. ピアサポート

<p>評価者 1（大学等の教育機関の教員）</p>	<p>東北学院大学におけるピアサポートについて、都合 14 に及ぶ関連センターや部署がそれぞれの文脈に応じた制度を構築し、取り組みを進めていることが確認できた。ラーニング・コモンズにおける「アカデミックサポーター」や新入生オリエンテーションにおける「オリエンテーションリーダー」等、すでに一定の実績を蓄積しているものがある一方、ここ数年内に取り組みを開始したばかりで試行錯誤が続いているものも少なくない。また、業務内容の性格上、「ピアサポート」に位置づけることが難しい事例も見られた。しかしながら、全体として見れば、学長によるリーダーシップの下、全学を挙げてピアサポートに力を入れようとしている確かな姿勢を感じ取ることができた。</p> <p>ピアサポートは、学生同士の学び合いの機会であり、大学教育という観点から見れば「正課外教育」として位置づけることが可能である。すなわち、学び合いという観点からは大学の「学習コミュニティ」としての方向性を強化し、また、授業等の正課内教育に加え、学生に貴重な経験と成長を提供できる更なる機会として捉えることができる。結果として、学生を主体としたピアサポートの充実は大学教育全体の質向上につながり得ると言える。</p> <p>そうした意味から、今後も大学として自己点検・評価の枠組みの中で各部署の取り組み状況をモニタリングし、各部署から上がってきた知見に基づいて制度の設計・改善を進めるとともに、大学から財政的支援を含む必要な支援を行っていくことを期待したい。</p>
<p>評価者 2（大学に関して広くかつ高い見識を有する者）</p>	<p>① 意思決定及び評価の状況</p> <p>人間関係が希薄化し、孤独を感じる人々が増えている社会状況の中で、自分の窮状を発信できない人々への支援は大きな社会的課題でもある。このような中で学内とはいえ、貴学が「学生にしかできない」「学生だからこそできる」「自ら手を差し伸べる」「安心して支えてもらう」等々のピアサポート活動自体の意義を全学的に浸透させる方針を掲げ、態勢整備の強化に取り組むことは時宜にかなうものである。但し、ピアサポートという特性から、業務内容に差異がある部署毎にその取り組みに関する評価（効果検証）を行うことに妥当性があるのか、多少疑義を抱いている。</p> <p>② 実施状況</p> <p>これから本格的に全学的活動に入る段階であることから、適切な PDCA サイクルの実施により、諸課題の解決と共に個々学生にとって有意義な学生生活の実現に繋がることを期待する。</p> <p>③ 課題と今後の取り組み</p> <p>主に以下の点が挙げられる。</p> <p>A. ピアサポート活動の学内での浸透</p>

	<p>B. ピアサポートのできる学生の育成</p> <p>C. ピアサポートの意義（有効性）の共有化とピアサポートを受ける学生の増加</p> <p>今後は、小中学校の段階からピアサポート活動の実施、活性化という流れが出てくるのではないかと考えている。貴学が他の組織のモデルケースになられることを期待する。</p>
評価者 3（大学等の教育機関の教員）	
	<p>① 意思決定及び評価の状況</p> <p>ピアサポートについては、以前から実施されていた部署と、今回改めてその実施の方針を立てた部署が混在しているため、その体制整備状況等が部署ごとにばらつきがあるのは当然のことと思われる。ピアサポートがなじみやすい部署と、なかなかなじみにくい部署があることは確かだと思うが、今回のピアサポート推進施策においては、学内のほとんどの部署でこの施策を実施、充実させる方向性で、検討され、今までなじみが薄いとされていた部署においても、今後の計画が策定されているもしくは、積極的に取り組んでいく方向性についての確認がなされていることについては、高く評価できる。今後その体制整備や効果検証のための体制・実施状況等については、追跡確認が必要である。</p> <p>② 実施状況</p> <p>実施状況については、これから実施する部署もあり、全体としての評価は難しいが、以前から実施されていた部署においては、実施体制の充実や、取り組み、学生数などの増加がみられており、今後のさらなる充実が期待できる。</p> <p>③ 課題と今後の取り組み</p> <p>それぞれの部署ごとの課題と今後の取り組みについて明らかにされており、その確実な実施と検証が必要である。東北学院大学には、多くの資源があり、また、学生数も多く、建学の精神という面からも、ピアサポートをさらに推進していく素地が大きいと思われるので、一つの部署にとどまらず、部署間の連絡を密にとって、この施策を進めていくことが望ましい。ピアサポーターが、自らの成長を実感できるような活動にするためには、教職員をはじめとして大学全体としての評価とサポートが今以上に望まれる。現場の教職員に過剰な負担をかけずに、継続してことが重要であり、ピアサポーターが、その自覚を持ち、当たり前のように、次の世代に引き継げるような良い循環ができるまでは、現場任せではなく、相応の大学側の努力が必要であると思う。</p>
評価者 4（本学の学部を卒業した者又は大学院を修了した者）	
	<p>① 意思決定及び評価の状況</p> <p>方針等の策定状況については大前提としてそれぞれの分野に目標をしっかりと設定しているが細部までには事細かく明記されていないのが今後の実施に向けての問題点と感じた。</p> <p>体制整備、評価体制はピアサポート実施が始まった分野とまだ、実施していない分野があるので評価ができない。万全な体制を整えるのには多くの時間を要すると思う。</p> <p>② 実施状況</p> <p>ピアサポート実施が始まった分野とまだ、実施していない分野があるので取り組み実</p>

	<p>施数・内容・学生数は事例が少なすぎて評価が出来ない。まだまだ、手探り状態。</p> <p>③ 課題と今後の取り組み</p> <p>今後学生に対してピアサポートに参加することの意義、メリット、デメリットをしっかりと説明しピアサポートに参加するのが当たり前のことだと理解させて学生が自ら積極的に参加させる啓蒙活動が必要。</p>
	<p>評価者 5（本学の所在する地域の関係者）</p> <p>学生同士の交流の中で一人一人の成長を促すためピアサポートの活動に全学的に取り組んでいこうという方向性が示され、これを受けて多くの学内組織が各々検討し取り組みを始めたことは、「だれ一人取り残さない」という SDG s の視点からも高く評価されると考える。</p> <p>その際、活動の目的をよく意識することが重要であり、ともすればボランティアを募るなど形を作ることにのみとどまってしまう懸念はあるものの、まずは具体的に動く中でピアサポートについての気付きや課題意識が教職員や学生に浸透し効果的な取り組みにつながっていくことに期待したい。</p> <p>個々のピアサポート活動は小規模でもいいので、その組織の特性を活かして多様な学生（正課のみでは居場所を見つけられないような学生も含め）の拠り所や交流の場がいくつもできあがっていくことにより、それぞれがどこかで誰かとつながりながら力を付け社会に出ていくことができるのではないかと。</p> <p>本格的な評価にはもう少し進捗を見る必要があるが、今後は、ピアサポート全体打ち合わせ会で議論を進めるとのことであり、効果的な取り組みを内外に発信しながら継続して行っていただきたい。</p>
	<p>評価者 6（本学の所在する地域の関係者）</p> <p>ピアサポート活動を行うには、サポーターの養成と継続的な研修やサポーターのモチベーション維持など、非常に多くの課題に取り組む必要がある。また、ピアサポート活動を行っても、それを利用する学生が少ない中で、いかに学内に広報周知していくかという問題もあるだろう。そうした中になって、ほとんどの部署で学生の意見を取り入れながら、様々な活動を企画・実施していることに感銘を受けた。</p> <p>ピアサポートを日本学生支援機構の定義である「学生生活上で支援（援助）を必要としている学生に対し、仲間である学生同士で気軽に相談に応じ、手助けを行う制度」として捉えれば、学内での活動がほとんどであると考えられるが、学生が大学において、ただ学業を修めるだけではなく、学生が他者と交流し、人間関係・コミュニケーション能力を獲得していくなどの人格的な成長や自らのキャリアアップを遂げることなど、人格形成や自己の成長に寄与するという教育的意義を望んでいること、また、教育的な意義や効果が卒業後の社会生活にも好影響を与えているであろうことを思えば、学外と連携した活動も考えられる。</p> <p>そうした意味において、学生による母校訪問の際に、現在の学びや学生生活などについて報告するだけでなく、現在高校で取り組んでいる探究活動に関連して、高校が探究活動を進めていく上でどのような点で悩み、サポートを必要としているのか。どのような点で学生がサポートできるのかを相互で理解し、例えば、学生が高校の探究テーマの設定や研究の進め方をサポートするなど、高校と大学が連携することも可能ではないかと思う。</p>

ところで、ヒアリングシートの中のラーニング・コモンズの回答に、「五橋キャンパス開学以前は、学部３・４年生が主な利用者であったため、利用者が多くはなかったが、五橋開学以降、利用者が増加している。」とあった。利用者データを確認したわけではないので、はっきりとしたことは言えないが、これは、新入生の利用が増えたからではないかと考えられる。新入生に対するピアサポート活動のように、初期適応を支援することができれば、その後にはそれほどの支援を必要としない学生もいるだろう。今後は、学生支援が有効なタイミングなど、学生支援としてのピアサポート活動が有効に機能するのはどのような条件なのかを検討する必要があるだろう。

評価者 7（経済界の関係者）

① 意思決定及び評価の状況

概ね多くのセクションでは PDCA がよく練られ、学生側も勉学のみならず活き活きと有意義な学生生活を謳歌している風景も感じ取られた。今後はある一定範囲で企画立案や運営などの要素を学生にも委譲し、トップダウン&ボトムアップ両面で相乗効果が高まることを期待する。

ピアサポートに対する各セクションの取り組みに関しては方針策定、体制整備、そして実施状況においてその温度差、優先順位、実行頻度、企画力の差において個別状況に応じたバラつきが垣間見られる。他方、副学長主催による「ピアサポート全体打合せ会」も予定されており、現状報告や課題抽出などの情報共有が図られる点において今後その温度差が解消されてゆくことを期待する。

② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）

実施体制、取り組み実施数と内容、そして学生数の項目において実施されている各セクションの状況は特筆して以下の通りである：

- 博物館：体制（6 名）、実施数（3 件）、登録数（28 名）
- ラーニング・コモンズ：サポート提供者（10 名）、利用者数（2023 年度 174 名）
- 広報部：応募数（約 200 名）→内 部員数（100 名）
- 学生部：学生リーダー数 121 名：新入生 約 2,800 人（平均約 23 名/人）
- 地域連携センター：学生数（22 名）、企画実施（3 件）

③ 課題と今後の取り組み

まず前提として学業や部活、そしてサークル活動などの豊富な学内活動（加えてアルバイトなどの学外活動）がそもそも取り揃えられている中、新たな選択肢として「ピアサポート」へと取り組んでいる意識高い昨今の学生たち、そして多忙を極める中においてもなお学生達に有意義な学生生活を提供するがため、本活動に熱心に取り組む教職員の方々に対し敬意を表したい。

ピアサポートの更なる進展においては兼ねてより無償（バッジ供与）もしくは有償のインセンティブ（報酬など）が議論されている模様であり結果が注視される。個人的な提案として、ひいては今後学生たちに対する新たなサポート還元策として「ポイント制度（サポート数や貢献度に応じたポイントの付与）」などを導入し、生協や売店などでの購買で利用が出来ればピアサポートの更なる制度活性・経済的循環の両面から効果が期待できるのではないかと。

貴学におけるピアサポートの脆弱点を挙げるとすれば各セクションで個別に展開されているが故の「窓口の分散化」にあると推察する。学生側の観点からすればセクション

毎に制度の内容や募集要項などにそれぞれアプローチしなければならず、学校・学生双方にとって活動機会が逸失されてしまう可能性が懸念される。もし上記のような状況にあるのであれば今後、ぜひ一本化された窓口でメニューを選べるようにした方が間違いなく利便性と適任性がマッチすると思う。

2. 国際化・国際交流

<p>評価者 1（大学等の教育機関の教員）</p>	<p>東北学院大学における国際化・国際交流については、2024 年度に「グローバル教育センター」を設置して、大学事務組織である国際交流部（国際交流委員会）を中心とする従来の体制から転換し、更なる取り組み強化が図られていることが確認できた。海外留学の受け入れ・送り出し数については大学規模に比して必ずしも多くはないものの、新型コロナ禍を経て通常の取り組みが戻ってきていることに加え、国際交流に関する学生ボランティア（2024 年度より「グローバルサポーターズ」）が機能しており、今後の展開が期待されるところである。</p> <p>近年、急速に地域社会における外国人の受け入れやその教育保障（例えば「おおさき日本語学校」の設立等）が進められていることに鑑みれば、地域貢献の観点からも国際交流のハブとして大学を位置づけていくことが必要である。今後は五橋キャンパス設置を契機とした国際性豊かなキャンパスの整備と、そのために必要な全学挙げての取り組みに期待したいが、そのためには越えなければならないハードルが少なくない。生成系 AI が急速に台頭しつつあるものの、まずは学生がしっかりと自らの語学力を高めることが国際交流の経験を獲得することにつながると考えられ、そのためには正課内外の取り組みを充実していく必要がある。宗教センターが取り組む English Café のような、学生が日常的に英語や外国語に触れる機会の提供も有意義である。また、東北地方においては大学の国際化・国際交流に関してやや消極的な姿勢やサポート不足が指摘されており、大学としての支援（奨学金制度等の整備を含む）が一層重要性を増している。大学の「国際化の基本方針」等に基づいて明確な方向性を共有するとともに、更なる支援充実を期待したい。</p>
<p>評価者 2（大学に関して広くかつ高い見識を有する者）</p>	<p>① 意思決定及び評価の状況</p> <p>地元自治体も国際都市化に向けて交流人口の拡大やインバウンドの取り込み等様々な施策を打ち出しており、地域最大の私学として、豊富なりソースをベースに国際交流事業拡大に向けて動き出していることは大いに評価できる。</p> <p>② 実施状況</p> <p>長年に亘る国際化に向けた取り組み実績が豊富であり、体制面も充実している。但し、経済面での課題から海外留学に送り出す学生数を増やすことには限界があると考えられる。大学としての強みを活かしながら、受け入れ留学生数の増加や交流機会の充実に比重を置くべきではないか。</p> <p>③ 課題と今後の取り組み</p> <p>外国人留学生の受入増加と共に、更なる就職支援体制の強化を図り、少子化による国内の労働力不足改善への取り組みを大学としても取り組んでいくことが求められる。組織への定着化を意図した就職支援としては、やはり日本語能力の向上等が大きなカギを握っているように感じている。併せて日本文化の理解に繋がるシステム作りも図りたい。県内の国際活動支援団体との連携協力活動も視野に入れられたい。</p>
<p>評価者 3（大学等の教育機関の教員）</p>	

	<p>① 意思決定及び評価の状況</p> <p>「東北学院大学の基本方針 2024」において、国際化・国際交流に関する基本方針を定め、また、その一部については、第Ⅱ期中期計画の実行計画の施策として、具体的な取り組みまで落とし込んでいることについては高く評価できる。また、その意思決定機関として、2024 年度において、機能強化を目的に新たな組織を立ち上げ、取り組みについての検証を行っていることも評価できる。</p> <p>② 実施状況</p> <p>交換留学生数等については、2019 年からの数年間、新型コロナウイルスの蔓延状況を踏まれば停滞するのは当然であり、その後 2022 年度からは受け入れ、送り出しとも回復していることは、コロナ後の積極的な取り組みを反映していると思われる。その他の国際交流関係の実施状況についても、コロナ後、急速にその実施が増加しており、高く評価できる。</p> <p>③ 課題と今後の取り組み</p> <p>東北学院大学には、さらに国際化・国際交流を推進できるだけの資源とポテンシャルがあることは、十分自覚されているとおりであると思う。「弱み」に記載されているような課題について、特に、専門の教職員の配置は重要であると思う。今後推進すべき取り組みについては、その内容を着実に実行していくことが望ましい。そのための大学側の理解と、実施のために必要な資源の配分が望まれる。</p>
評価者 4（本学の学部を卒業した者又は大学院を修了した者）	
	<p>① 意思決定及び評価の状況</p> <p>方針等の策定状況については大前提としてそれぞれの分野に目標をしっかりと設定しているが細部までには事細かく明記されてはいないのが今後の実施に向けての問題点と感じた。</p> <p>体制整備、取り組み評価体制はピアサポート実施が始まった分野とまだ、実施していない分野があるので評価ができない。万全な体制を整えるのには多くの時間を要すると思います。</p> <p>② 実施状況</p> <p>国際化・国際交流は今後最も重要なテーマである。事例が少なすぎて評価が出来ない。まだまだ、手探り状態。</p> <p>③ 課題と今後の取り組み</p> <p>今後学生に対して国際交流に参加することの意義、メリット、デメリットをしっかりと説明し国際化に参加するのが当たり前のことだと理解させて学生が自ら積極的に参加する啓蒙活動が必要。</p>
評価者 5（本学の所在する地域の関係者）	
	<p>貴大学においてはこれまでも国際交流に関する方針を定め様々に取り組まれてきたところであるが、改めて課題がしっかり分析され、今後推進すべき取り組みが多岐にわたって明らかにされており評価できる。</p>

	<p>一方で多岐にわたるがゆえにどの部署がどう取り組みを進めていくのかが細分化され（既に実行計画も策定されているようだが）、多くの関係者を巻き込んだ重点的な取り組みにしづらいことも想定される。</p> <p>新たに強化された体制の下で、取り組みに優先順位を付けつつ、国際交流部でまとめた今後推進すべき取り組みの筆頭に掲げられているように、全学的な気運の盛り上げと情報発信に力を入れ効果が広がりを持つように実施していくことが必要であると思われる。貴大学の強みを生かし、色々な壁を越えた魅力ある交流の機会の創出等を通して、グローバルな視点を持った人の育成に寄与されるとともに、東北地方全体に刺激を与えていただくことに期待する。</p>
評価者 6（本学の所在する地域の関係者）	
	<p>「出会い」には書籍との出会いもあり、人との出会いだけを指しているのではないが、偶然の出会いや意図的な交流を含め、新たな出会いは、新しい視点や機会をもたらすだけでなく、自己理解や自己肯定感を高めるきっかけともなり、私たちの成長や幸せに大きな影響を与える重要な要素ではないかと思う。また、出会いは個人の社会的ネットワークを広げる重要な手段でもある。多様なバックグラウンドを持つ人々との交流は、新たな知識や情報の獲得に繋がる。これにより、ビジネスやキャリアの機会が増えるだけでなく、個人の視野が広がり、柔軟な考え方を養うことができ、イノベーション人材の育成にもつながると思う。</p> <p>新たな出会いをもたらしてくれる最も良い方法のひとつは、短期間でも海外の全く新しい環境の中で実際に日常生活をしてみるのではないかな。または、自分とは生まれ育った環境が異なり、価値観や考え方が違うであろう外国人と一緒に生活することだろう。</p> <p>今年度から、留学生派遣および受入れに関わる学生教育業務に円滑に対応できるよう、新たに「グローバル教育センター」を発足するとともに、大学の国際交流事業を更に強化するために専門性を有するスタッフの配置などにも取り組む考えを持っていると伺い、とても期待している。</p> <p>一方、受け入れている留学生の数はキャンパス内の学生総数に比べて著しく少なく、また送り出している留学生の数も、様々な事情により増えていない。在 student と外国人留学生の共修する機会の提供など、外国人留学生と一緒に学修することが特別ではない環境づくりや、円安等による高騰する渡航費用の経済的支援などの学生サポートの充実を望む。</p>
評価者 7（経済界の関係者）	
	<p>① 意思決定及び評価の状況</p> <p>コロナ禍も明けた昨今、海外意欲の高い学生たちの多くがこの東北から海を渡ることは何事にも変え難い貴重な経験だと感じる。特に近年「カナダ・レニソン大学」の英語プログラムや「オーストラリア・サザンクロス大学」などの新たなプログラム協定校が増え、全体としての参加者割合が底上げされた点は大きな功績かと思う。渡航国別で特に目を引いたのが「マルタ国」への短期留学者数で、その増加理由として「短期（1 週間）で安価（10 万円ほど割安）、かつ日本人が少ない」などの要因を伺い、経済的・時間的に余裕が少ない学生でも何とかしてその海外意欲を満たそうとする高い意識が感じられた。</p>

② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）

協定校プログラムへの参加者割合：

- 2023 年度：13%（100 名中 13 名）
- 2024 年度：31%（91 名中 29 名）

③ 課題と今後の取り組み

国際交流の観点から見られる貴校の強みとしては「東北最大のブランド私学」と「クリスチャンフェローシップ（TGCF）の理念」にあると考える。また近年では市街地のシンボリックなロケーションに広範かつオープンな新キャンパスも設立され、渡航支援と留学受入、そして異国間学生との国際交流（73 ランチ、English Café、Music Service など）という 3 つの交流観点において大きなアドバンテージがあると考ええる。

Ⅲ. 2024 年度東北学院大学外部評価委員会 総評

外部評価委員会委員長 杉本 和弘

第5期外部評価委員会（2022-2024 年度）では、第4期外部評価委員会（2019-2021 年度）からの引き継ぎを踏まえ、全学及び学部・研究科における教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況を評価対象に設定した。その上で、第5期初年度にあたる 2022 年度は、全学及び学部・研究科における「事務職員の育成・資質向上の取組」や「教職員の能力開発（FD 及び SD）に係る実施状況」について検証し、その到達点と課題を指摘した。さらに 2023 年度には、近年の大学教育における内部質保証の重点課題である「学修成果の検証及び可視化」、「e ポートフォリオの活用」、それらに基づく「学修支援・研究指導に関する取組」について書面調査を行った上で、特に学修成果検証への学生参画の観点から学生インタビュー調査を行って検証した。

上記2か年の評価を踏まえ、第5期最終年度にあたる 2024 年度は、正課外での学生支援に焦点を当て、「ピアサポート」と「国際化・国際交流」をテーマとし、書面調査及び大学関係者への質疑応答を通して検証を行った。

以下では、2024 年8月の第1回外部評価委員会（メール審議）を踏まえ、各関係部署で取りまとめたヒアリングシートとそれに対する外部評価委員からの質問事項の送付、さらに質問事項への回答を踏まえて行った第2回外部評価委員会（同年12月16日開催）における意見交換を経て外部評価委員諸氏から提出された評価所見に依拠して評価結果を取りまとめ、最後に総評を行う。

1. テーマ選定の背景

2024 年度のテーマである「ピアサポート」及び「国際化・国際交流」は、第5期を通貫した評価対象である「教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況」を踏まえて設定したものであるが、それと同時に、2023 年度に学長からなされた「ピアサポートを活性化するための諮問」（2023 年9月25日）及び同諮問への答申（同年11月6日）、「国際交流を促進するための諮問」（2023 年6月26日）及び同諮問への答申（同年10月23日）を受けて設定したものである。学長からの諮問とそれへの答申が行われたことは、当然そこで扱われたテーマが大学として戦略上重要な課題であることを示しており、外部評価委員会としては、そうした学内における一連の取組を外部的視点から改めて検証し意見を述べることで、取組の推進・改善を後押しすることを企図した。

実際、教学マネジメントの対象には、ピアサポートや国際交流といった正課外の教育学習活動も包摂されることから、学内各部署において学生の学び合いや国際交流がどのように設計され機能しているのかを外部評価で検証できたことは大変有意義であった。

2. 「ピアサポート」及び「国際化・国際交流」について

(1) ピアサポートの取組状況

まず、東北学院大学におけるピアサポートについては、学長から一定のリーダーシップが発揮されたことで、急速に制度化が進んでいることを確認することができた。今回、学内の14に及ぶセンターや部署がそれぞれの文脈・活動に応じた制度を構築し、取組を進めていることが明らかになり、大学として全学を挙げてピアサポートに力を入れていることが外部評価委員から高く評価された。

ピアサポートとしては、先行的取組としてラーニング・コモンズにおける「アカデミック・サポーター」や新入生オリエンテーションにおける「オリエンテーションリーダー」等があり、すでに一定の実績を蓄積している。他方、ここ数年内に取組を開始したばかりで試行錯誤が続いているものも少なくない。また、業務内容の特性上「ピアサポート」に位置づけにくい事例や、部署間で温度差・企画力にバラつきも見られたことから、部署ごとに効果検証することの是非を問う声が上がった。

一方、窓口の一本化や現状・課題の情報共有を進めることの必要性も指摘された。

ピアサポートは、学生同士の学び合いの機会であり、大学教育という観点から見れば「正課外教育」として位置づけることが可能である。すなわち、学び合いという観点からは大学の「学習コミュニティ」としての方向性を強化し、また、授業等の正課内教育に加え、学生が自らの人格的成長やキャリアアップにつなげる貴重な機会として位置づけることができる。政策的に「学修者本位の教育」が求められる昨今、学生を活動主体とするピアサポートの充実が大学教育全体の質向上につながり得ると言える。

そうした意味からも、複数の外部評価委員から今後の展開に期待する声が聞かれた。具体的には、学内での広報周知を通してピアサポートの意義を浸透させること、学生や教職員にピアサポートに参加することのメリットやデメリットをしっかりと説明していくこと、学生へのインセンティブとしてバッジ付与やポイント制を導入すること等が指摘された。また、ピアサポートの推進に際し、教職員に過剰な負担をかけずに制度としての持続可能性を担保することの重要性が指摘されたことも記しておきたい。

先述の通り、東北学院大学におけるピアサポートの多くはまだ緒に就いたばかりであり、今後の更なる発展が期待できる分野である。今後は、大学として自己点検・評価の枠組みの中で各部署の取組状況をモニタリングしつつ、各部署から上がってきた知見に基づいて制度の設計・改善を進めること、ピアサポートの一体的・整合的な取組につなげること、大学から財政的支援を含む必要な支援を行っていくことを期待したい。

（２）国際化・国際交流の取組状況

次に、国際化・国際交流については、「国際化の基本方針」や「第Ⅱ期中期計画の実行計画」等に基づいて明確な方向性や活動内容を示した上で、2024 年度には、従来の国際交流部（国際交流委員会）を中心とした体制を転換し、「グローバル教育センター」を新設する等、更なる機能強化が図られていることが外部評価委員から評価された。また、海外留学の受け入れ・送り出し数については、キャンパス内の学生総数に比して必ずしも多くはないものの、新型コロナ禍を経て交換留学生数等が通常レベルに回復してきていること、新たなプログラム協定校が増加していること、国際交流に関する学生ボランティア（2024 年度より「グローバルサポーターズ」）が機能していることを踏まえ、国際交流活動の更なる展開に期待する声も聞かれた。

事実、近年は地元自治体も国際都市化に向けた交流人口の拡大やインバウンドの取り込み等の施策を打ち出す一方、外国人材に対する教育保障の取組（例えば「おおさき日本語学校」の設立等）を進めている。外部評価委員からは、地域最大の私学としての東北学院大学の資源とポテンシャルを活かすためにも、好立地条件を有する五橋キャンパスや土樋キャンパスを国際交流のハブとして位置づけ直し、地域と協力しながら国際交流活動を強化していくことの必要性が指摘されている。

今後、国際交流に必要な全学挙げての取組の活性化に期待したいが、そのためには越えなければならないハードルも少なくない。生成系 AI が急速に台頭しつつあるものの、まずは学生がしっかりと自らの語学力を身につけ高めることが国際交流の拡大につながると考えられ、そのためには正課内外で各種の取組を充実していく必要がある。宗教センターが取り組む English Café のような、学生が日常的に英語や外国語に触れる機会の提供も有意義であろう。また、外部評価委員からは、受け入れ留学生を増やし、少子化による国内の労働力不足改善に貢献することを期して、日本語教育や就職支援の体制強化を求める声も上がった。さらに、東北地方においては大学の国際化・国際交流に対する消極的な姿勢やサポート不足が指摘されてもおり、大学としての支援（奨学金制度等の整備を含む）が一層重要性を増している点も指摘された。大学による更なる支援充実を期待したい。

3. 総評

このように、第5期外部評価最終年度は、「ピアサポート」及び「国際化・国際交流」に焦点を当てて検証・評価を行った。評価プロセスでは、書面調査を通して関係する部署等から説明を受け、それを踏まえた質問を外部評価委員各位から投げかけるとともに、対面での質疑も実施した。外部評価委員からの質問に対し、書面及び対面で丁寧にご回答いただいた部署の関係者には心より御礼申し上げます。

2024 年度の外部評価を通して明らかになったピアサポートや国際交流の取組状況や課題にも共通することだが、第5期全体の外部評価プロセスを通して強く感じられたのは、東北学院大学が明らかに新たなフェーズに入ったということである。日本社会における少子高齢化が急速に進行し、地域社会自体の力が弱体化あるいは空洞化するなか、そこから生じてくる種々の課題に対して大学がどのように貢献し得るのか。この問いこそ、東北学院大学が直面する喫緊の課題である。より具体的には、新型コロナ禍を経て 2023 年度に実現した五橋キャンパス開設や新学部創設をどう次なる発展につなげるのか、東北地方を中心に学生をいかに獲得し、かれらの成長を促すのかが問われている。物理的要件（場）が充実されたことが高く評価できる一方、その「場」でいかなるコンテンツを充実させるかという問いこそ本質的であり、第5期で具に検証してきた「教職員の能力開発」「学修成果の可視化」「ピアサポート」「国際交流」といった取組はひとえに、このコンテンツを充実し、学生の学びや経験を高めるためにある。東北学院大学において、すでに多様な制度の整備・充実が図られていることを高く評価するとともに、学生が学び、経験し、成長できる魅力的なコンテンツ構築への挑戦を今後も続けていただきたいと切に願う次第である。

以上

IV. 第5期外部評価（2022～2024年度）の所見

評価者1（大学等の教育機関の教員）

第5期外部評価では、3ヵ年を通して「教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況」をテーマに各年度異なる側面に焦点化しながら評価を進めた。今期の外部評価委員会においても多様な背景・経験・専門性を有するステークホルダーを委員に据え、それぞれの外部的視座から諸課題について調査（書面・ヒアリング）や議論を行い、その結果を大学関係者に伝えることができたと感じる。こうした外部評価を毎年しっかり機能させている貴学に敬意を表したい。

今期は、教学マネジメント体制を基底に、「教職員」や「学生」といった大学の重要なステークホルダーがそこにどのように位置づき、それぞれの活動がどう機能しているのかを検証してきた。2022年度は、教職員の能力開発について評価を行い、「学長研究助成金」（ただし近年はやや不調）や「職員相互派遣」が整備されて職員の能力開発が推進されてきた反面、教員評価が必ずしも十分に機能していないことが明らかになった。教学マネジメントが効果を発揮するためには教職員の能力開発や人事評価が機能させる必要があり、大学としての対応が求められる。

2023年度は、内部質保証における重点課題である「学修成果の検証及び可視化」や「eポートフォリオの活用」を中心に評価を行った。学修成果の検証や可視化は、機関別認証評価を中心とした社会的要請を背景に取り組まれているが、唯一絶対の手法・形態が確立しているわけではなく、各大学レベルで模索が続いている。東北学院大学では、学修成果検証の取り組みが全学レベル及び部局レベルで多面的に整備されてきたことが確認できた一方、授業アンケートや成績評価についてさらなる改善・工夫が必要なことが明らかになり、特に学生インタビューにおいてもそのことが確認された。また、教育学習のプロセス管理や出口管理という点でeポートフォリオ（TG-folio）の導入・整備が進められていることは高く評価できるが、その実質化が今後の課題である。

2024年度は、「ピアサポート」や「国際交流」等の正課外活動の状況について検証し、東北学院大学では学長リーダーシップの下で急速に制度化が進んでいる状況を確認することができた。教学マネジメントには、こうした正課外の教育学習活動も包摂されることから、学内各部署において学生の学び合いや国際交流がどのように設計され機能しているのかを外部評価で検証できたことは有意義であった。評価プロセスの中で強く感じたのは、2023年度の五橋キャンパス開設や新学部創設によって物理的要件（場）が充実されたことが高く評価できる一方、その「場」でいかなるコンテンツを充実させるかという問いこそ本質的であり、その解の一つが「ピアサポート」や「国際交流」にあるのではないかという思いである。多様な制度の整備・充実が図られていることを評価しつつ、学生が学び、経験し、成長できる仕組み作りへの挑戦は続けていただきたいと切に願う。

総じて、第5期外部評価からは、他の大学で教学マネジメントに携わる者として多くの学びや気づきを得られた機会であったことに感謝を述べ、今後の東北学院大学の更なる発展を期したい。

評価者2（大学に関して広くかつ高い見識を有する者）

第5期外部評価委員会委員として携わった3年間を通じて、所感を申し述べる。

まずは、「外部評価委員会の運営」についてであるが、大学の運営を第三者が評価する「認証評価制度」を念頭に置きつつ、大学としての長所や課題を的確に把握しながら、その内容を外部評価委員会のテーマとして具に掘り下げ、外部の意見を吸収し、大学組織としての実質的な価値向上に繋げている。それは大学運営に携わる教職員の経営意識の高さと組織自体の健全性によるものと捉えている。何よりも都度緊張感漂う外部評価委員会の実施状況に強く感じた。また、外部評価委員だけによる論点整理を事前に行い、実質的審議に臨む対応も適切なものであった。

但し、2022年度に取り組んだ教職員の人事評価の実施状況において、制度そのものが社会一般のそれに比べ大きく遅れており、大学運営の特殊性や労働組合との交渉等の課題があることは理解できるものの、長期間に亘り改善しなかった運営側の不作為は強く指摘されるべきものと考えている。時宜を得ない人事評価制度はそこに勤務する職員のモチベーション等に甚大な影響を及ぼす。「ヒト」が重要且つ最大の経営資源である大学運営においては、なおさらその感は強い。

貴学に対する地域の期待は大きい。今後も更なる発展に向けた取り組みを期待する。

評価者3（大学等の教育機関の教員）

第5期の3年間の外部評価を通じて、東北学院大学の素晴らしい点を多く見つけることができた。少子化の影響が本格化する時期を十分考慮に入れた大学全体の改組や、新校舎の建設など、大学の経営と教学の両面において、計画的に実施されていることはもちろんであるが、より細部にわたって、大学の運営について、学長のリーダーシップのもと、学内関係者が団結して、その課題に取り組んでいる姿勢を確認することができた。

2022年度の「教職員の能力開発（FD及びSD）及び評価の取り組み」においては、大学運営の根幹である教職員の能力開発について、積極的に取り組んでいる様子を理解することができた。2023年度の「内部質保証及び学習成果検証の学生参画」については、現在大学に求められている内部質保証の体制をしっかりと構築され、さらに、学習成果の可視化が求められている現在において、学生たちの参画を促進している姿勢についても確認することができた。2024年度の「ピアサポート」については、従来ピアサポートのなじみが薄い部署も含めた全学体制で、その推進に取り組んでいる姿勢が明らかになった。「国際化・国際交流」についても、積極的に取り組み、特に、コロナ以後の取り組みが活発に行われていることが明らかにされた。いずれの取り組みも、現在の大学に求められているものであり、積極的かつ組織的に取り組まれていることに敬意を表したい。

東北学院大学に限らずいずれの大学でも共通する課題であるが、「こうあるべき」体制の構築は、学長のリーダーシップにより一定程度可能であるが、その実質化には時間がかかる。今回扱ったテーマのいずれにおいても、すべての構成員に理解され、定着するまでには、相応の努力と時間が必要と思われる。特に、働き方改革が浸透する中で、教職員に過度な負担をかけることはできない状況を勘案して、人員配置（人数だけではなく専門性も）には細心の注意を払い、時間をかけるべきところはかけていく必要があると思われる。人材育成（現教職員の能力開発）についても、より注力していく必要があると思われる。

評価者4（本学の学部を卒業した者又は大学院を修了した者）

長 所

- ・ 東北地区の私立大学で唯一の総合大学である。多くの学部学科がある。
- ・ 仙台市の中心部にあり立地条件が整っている。公共交通機関での通学が便利である。
- ・ 新しいキャンパスが出来て学習環境が整っている。
- ・ 東北での就職率が高い。
- ・ 教職員の能力開発に重点を置いている。

改善点

- ・ 首都圏の就職率を高めるべきである。
- ・ 評価者と評価される教職員とのフィードバック時間を充分に取るべきである。
- ・ 学生からの意見、要望を聞く機会を多くするべきである。
- ・ 「ピアサポート」「国際化・国際交流」を最重要課題として継続的に推進すべきである。

その他

大学が地方公共団体や企業などと連携して様々な取り組みを展開し、地域のニーズを踏まえた教育研究を行っていくことにより、地域の発展に貢献していくことが、大学の果たす社会的貢献の一つとして重要になってきます。既に東北学院大学は実行計画（2021年度～2025年度）で取り組みを推進していることはとても素晴らしいことです。今後も継続的に進め東北一の私立大学としての地位を高めていただきたいと期待しています。

評価者5（本学の所在する地域の関係者）

「教学マネジメント体制の個別具体的な運営状況」をテーマに3年間、毎年度違った角度からその取り組みについて状況をお聞きしながら意見や所感を述べてきたが、総じて貴大学は急激に変化する社会から求められるものや新たな課題にしっかりと向き合って積極的に制度を導入しそれを全学に広げようとされていることが確認でき印象的であった。多くの学生、教職員を抱えマネジメントにはかなり困難さがあるのではと思われたが、確かに（特に制度導入当初）各学部や組織によって取り組みに温度差はあったものの、本部において横断的な組織を設置し情報共有を図るなどの努力が続けられている。

一方で、今後は、導入された制度や仕組みを、教職員や学生がその目的や趣旨をよく理解して運用、活用していくことが重要であると考えます。学生一人一人の成長を見える化し、共有できる場を設けて、ともに意思疎通を図る中で、やらされているのではなく自ら制度等を使いこなす（必要に応じて変更したり簡略化したりもしながら）、更なる成長につながる実感を積み重ねていければと思う。学生が、教職員の支援を受け、また学生同士が交流しながら主体的に学んでいくことができるよう、今後も積極的なチャレンジを続けていただきたい。

評価者6（本学の所在する地域の関係者）

東北学院大学第5期外部評価委員として、この3年間共に大学の運営を考える貴重な機会を得たことに感謝申し上げる。

さて、大学進学率の上昇、その一方で18歳人口の減少により、いわゆる大学全入時代となった現在、我々親世代が受けてきた選択した科目の単位を積み上げて卒業するといった大学教育モデルはもはや維持できない状況にある。また、予測困難な時代にあって、大学卒業後も含めて学生自身が目標を明確に意識しつつ主体的に学修に取り組むこと、その成果を自ら適切に評価し、さらに必要な学びに踏み出していく自律的な学修者となることが求められている。さらに、学修成果を積極的に活用するなどの採用活動の変化も見受けられる。こうしたことから、大学における学修がますます重要視され、目指すべき方向として「学修者本位の教育の実現」、すなわち、大学のミッションに基づいて、学生が「何を学び、何を身につけることができるのか」を明確にし、学修の成果を実感できる教育の実現が求められている。

この教育の質の保証のための仕組みが、第5期の主要テーマである「教学マネジメント」であり、その個別具体的な運用状況を評価することで、大学の教育理念や活動方針、さらには課題を理解することができた。

大学を運営する教員や職員に対して、FDやSDを活用して組織的に教職員の育成推進に係る施策を進めているが、工夫改善の余地はまだある印象を受けた。先を見据え、現在よりもさらに厳しい環境で大学の舵取りを行わねばならなくなるであろう教職員の能力やスキルを早期に伸ばしていく必要があると思う。

また、アンケートによる調査の他に学生の意見を直接聴取して、授業改善や学修成果の検証及び可視化を図ったり、学生が学びや成長の気づきや振り返りに活用する目的でTG-folioを用いたり、ラーニング・コモンズの活用やピアサポートなどを通じて多様な学修支援・学生支援を行ったりするなど、教育の質の保証を図ろうと尽力していると感じる一方で、それらの認知や活用方法、教育の質の保証において最も重要と考える授業の改善には工夫が必要だと感じた。特に、学生が学修の成果を「実感」するためには、何よりも学生自身が目標を明確に意識しつつ学修に取り組み、その成果を自ら適切に評価し、さらに必要な学びに踏み出すなど、受け身の姿勢ではなく、学生の自主的・主体的な態度に依存する部分も少なくない。

大学のポリシーや各学部の教育目標等に照らして、学生の「主体性」をどのように育むのか、どのような教育課程を編成し、プログラム等を準備するのか、学生の変容をどのようにみとり、評価するのか、PDCAサイクルを回して不断の改善をしていく他ないのではないかと思う。

課題のない組織はない。学内だけでなく、学外と連携し、前向きに課題の解決に取り組もうと尽力している限り、成長し続けるものと信じている。東北学院大学が、社会の期待に応えるべくなお一層発展することを期待している。

評価者7（経済界の関係者）

「第5期（2022年度～2023年度）」外部評価においては3つの年度に渡り、それぞれのテーマに基づいて活動を進めた。年度それぞれの見解および全体を通じての所感は以下の通りである：

➤ **2022年度：「教職員の能力開発（FD及びSD）及び評価の取り組み状況」**

総じて、貴校創立150年となる2036年度に向けたグランドデザイン「TGGV150」に基づいてFD及びSDに対する「基本方針」や「7つの資質」が制定され、広く横断的に全職員の底上げを図る取り組みがなされているものと感じた（全学研修など）。特筆的にFDにおいて2022年度はアフターコロナにおける時勢に合わせた抜本的なDX化の取り組みが多く見られた（セキュリティやカンニング防止策など）。反面、当該年度時は教職員に対する評価制度が皆無という点に経済界からの評価者として一種驚きを覚えたが（表彰制度のみ）、導入を視野に入れて検討中という自主的な改善の動きも見られ、貴学における課題間の高まりも窺えた。SDにおいては特に「大学間における職員相互派遣制度（1ヶ月間）」が長く取られており、民間企業としても是非見習うべき制度だと感じた。

➤ **2023年度：「内部質保証及び学修成果検証への学生参画」**

全体所感からすると、入学時の川上から卒業・就職へ向けた川下の支援に至るまでほぼ網羅的かつ隙の無い全学的なシステムが整っていると感じた（約10項目にわたる学習支援システムの配備）。特に新設・導入直後である「e-ポートフォリオ」に関しては個別レベルで学生を入学から卒業後までサポートするシステムであり、大学・学生・企業の三方位においてより良い成果が期待できる機能であると実感した。反面、システムやサポートが乱立しており、一元的な可視形態及び管理体制が整わない限りあまり学生に活用されず、埋没してしまう懸念も見てとれた。なお年度内に行われた「学生インタビュー」では学生の生の声を聞くことが出来、画期的であった。4年生学部に対する手厚いサポートの反面、マイノリティである院生は周囲に相談できる仲間や情報も少なく、孤立感を抱えている現状が抽出された点も一つの成果だったように思う。

➤ **2024年度：「ピアサポート」「国際化・国際交流」**

ピアサポート・国際交流ともにセクション毎個別の活動がなされており、かつ概ね多くのプログラムにおいて良くPDCAが練られ、今後も期を増すごとに学校・学生双方のトップダウンとボトムアップによって高い相乗効果と相互活性が期待される。上述の通りセクション毎の活動であるが故、その取り組みや優先順位、運営状況などにバラつきは見られるものの、副学長主催による「ピアサポート全体打合せ会」も予定されており、課題の抽出や情報共有によって今後その温度差も解消されてゆくことと拝察する。国際交流においても近年取り交わされたカナダやオーストラリアなど新たな協定校が増えたことにより全体の渡航者割合も押し上げられ（13%→31%）、アフターコロナの時勢に乗じて今後もますますこの東北の地から海を渡る若者たちが増えてゆくことを切に願う。また貴学の強みである「東北最大のブランド私学」というバリューや「クリスチャンフェローシップ（TGCF）」という理念に基づき、広範かつオープンな新キャンパスで異国間学生の交流がますます発展してゆく景色が大変楽しみなところである。

➤ 全体を通じて

3カ年に渡る多年度の外部評価委員を務めた上で感じた貴校の強みは「①長期グランドデザインで設計されたビジョンと方針 ②豊富なリソースの活用とその推進力 ③東北最大のブランド私学というバリューとクリスチャンフェローシップの理念」という点に集約されるように思う。特に①に関しては創立 150 年となる 2036 年に向けた「TGGV150」という力強いトップによるメッセージが学内にも落とし込まれており、そのビジョンに基づいた各種施策が②の豊富な財的・人的リソースによって各所で展開されている印象である（③に関しては自他ともに周知されている貴学特有のバリューであり、既に十分過ぎるほど活用されているので割愛する）。加えて、2023 年度から開かれた新キャンパスは市街地に位置する絶好のロケーションにあり、上記全ての強みをさらに増幅させる機能を有している点は説明するまでも無い。

反面、任期を通じて感じた今後、貴学運営上の懸念点として挙げられるの一言「組織の縦割りに伴う分散と乱立」という言葉に集約されるものと感じる。無論、業務の推進上「縦の推進力」は必須の機能であり（弊社のような民間企業も同様です）、その縦割り意識払拭のために「TGGV150」という長期ビジョンが据えられ、各部のベクトルを統合し、かつ全体会議などで極力平準化が図られているものと拝察するが、そのネガティブな余波はデジタル上に乱立されたシステムや分散化された学生サービスの随所に垣間見られる（詳しくは以下に後述）：

＜貴学における学修システム概要と定義＞

1. ディプロマ・ポリシー: 学位授与方針
2. アセスメント・プラン: 評価計画(全学/学位/授業) → グラフによる可視化
3. アセスメント・テスト: 知識・行動測定 → 学生へのフィードバック利用
4. アカデミック・サポート・デスク: 学習相談対応(論文/PC/勉強方法)
5. eポートフォリオ(TG-folio): 目標設定と進捗管理 *今年度より新設
6. manaba: 授業評価アンケート(評点 3.0 未満で教員へ「授業改善勧告」)
7. GPA: 成績表価値
8. ディプロマ・サブリメント: 学位付属資料 → 就活時提出資料
9. 就職キャリア支援: キャリア、進路相談
10. ルーブリック: アクティブ・ラーニング(議論/体験/伝達) *学部/教員による部分導入

というように一見すると豊富で充実した学生へのサポートにみえる反面、ややもすると各所にアクセスの窓口が分散・乱立しているようにも見てとられ、利用する学生側にも混乱を生じさせる、もしくはサービスそのものが埋没する可能性が否めない（加えて横文字も多く、初見ではそのサービスの意味を汲み取るのは不可能に近い...）。もし現状で一元的に集約もしくは管理される措置が未だ取られていないようであれば、利用者である学生、そして管理者側のマネジメント負荷から考えてもシステムやサービスの一元化という措置は早急に取り組まれるべき課題だと感じる（ピアサポート管理窓口の多さや会議資料ページ数量の多さなどからも同様に縦割り組織に生じがちな業務負荷の因果関係が感じられる）。

以上、未習熟でありながら甚だ失礼な表現になってしまったが、もし上記仮説が正し

	ければこの一点のみ改善されることで今後、利用者である学生の利便性向上や運営者負荷の軽減が図られるものとする。3年間に渡り、若輩である私にかくも貴重な経験をさせて戴き、有難うございました。
--	---

V. 第6期外部評価（2025～2027年度）への引き継ぎ

<p>評価者1（大学等の教育機関の教員）</p>	<p>東北学院大学は、2023年度の五橋キャンパス開設と新学部設置を機に新しいフェーズに入ったと言え、奇しくも2020年から始まった新型コロナ禍を経た時期に重なったこともあり、社会に対して大学（教育）の新たな形を示すことが強く期待されている。外部評価のテーマは、基本的に大学が自己点検・評価を通して自ら見出す課題や改善事項を取り上げ、外部的視座から評価や助言を行うことが望ましいが、今後の発展可能性・持続可能性を念頭にしつつ、東北学院大学にとって重要なステークホルダーである学生・保護者や地域・自治体等の声に耳を傾けて議論しながら、その結果をかれらに還元していけるような評価となることを期待したい。</p> <p>一般的に「外部評価」は、当該大学に関わる多様な外部ステークホルダーがそれぞれの立場から大学の諸活動について意見を述べ、大学内部からは得にくい新たな発見や気づきをもたらすことで、大学運営を適正化したり改革・改善をエンカレッジしたりすることにある。しかし、得てして外部評価委員会による指摘や意見が、学内のいかなる改善に活かされたのかが必ずしも明瞭ではない事例も散見される。そうした意味から、今後第6期においては、外部評価委員が自己点検・評価（内部質保証）に関わる学内メンバー（ただし、参加人数を限って）と双方向的に議論し合い、課題を共有する機会を設けることで、学外の意見を学内の改善へと有機的且つ効果的につなげる工夫がなされることを期待したい。</p>
<p>評価者2（大学に関して広くかつ高い見識を有する者）</p>	<p>今後は少子化を見据えた高等教育のあり方について、様々な視点から活発な議論がなされ、具体的な制度設計が試みられるものと思われる。その中で認証評価制度についても、その評価方法の抜本的な見直しが見られるものと推測されるが、やはり先取りした動きの中で自ら「時代に即した考え方の吸収、施策への取り込み」が必要になるのではないかな。</p> <p>また、如何なる組織においても経営上の2大リスクは、「コンプライアンス」と「大規模災害」と言われる。この点は大学組織においても同様と思われ、近年複数の大学において、その経営を巡る由々しき事件が発覚し、社会的にも厳しく糾弾されている。今後、少子化の中で選ばれる大学、生き残れる大学を考えるに、大学が社会的存在としてどのようにあるべきか、外部からどのような視点が注がれているのか、外部の期待にどのように応えていくのか、法令順守体制や災害発生後のPCBに向けた態勢整備等と併せて検討の必要性があると考えている。</p>
<p>評価者3（大学等の教育機関の教員）</p>	<p>外部評価委員会の運営について、あえて課題を挙げるとすれば、会議で取り上げる内容に比べて、会議時間が短い点である。会議時間については妥当な時間設定と思われるので、その内容について、もう少し絞ってもいいのではないかなと思う。例えば、事前質問で回答していただいている内容について、会議で改めて説明していただくのではなく、事前回答の中で、特に確認したい部分だけ改めて質問して取り上げるなどの工夫ができるのではないかなと思う。</p> <p>今期から取り入れていただいたという「委員と事務局だけの協議時間」については、とてもいい取り組みだと感じたので、今後も継続していただきたい。</p>

	<p>次期の外部評価テーマについて、具体的な提案はないが、ある程度、3年間を見越したテーマ設定があると、見通しが立てやすいのではないかと思います。</p> <p>運営にあたっての事務局の対応については、パーフェクトであったと感じている。</p> <p>関係された皆様に心から感謝したい。</p>
評価者4（本学の学部を卒業した者又は大学院を修了した者）	<p>ピアサポート実施の継続的な検証をお願いしたい。</p> <p>今回の外部評価委員会で学生の生の声が聞けたのが一番良かったので次期の外部評価委員会でも実施してほしい。</p> <p>運営上の課題</p> <p>時間が限られる中での質疑応答には限界があると感じた。</p> <p>特にピアサポートでの各部門の説明が途中で終了したのは残念であった。</p> <p>外部評価テーマの提案</p> <p>東北での知名度は高いが全国区での知名度を上げる政策をテーマとして考えるべきである。</p>
評価者5（本学の所在する地域の関係者）	<p>今期、学生たちに集まってもらって直接話を聞く機会を設けていただいたが、日ごろ大学生活の中で取り組んでいることや考えていることなどを知ることができ、なるほどと思うことも多くてとても有意義であったので、第6期においてもぜひ取り入れてはどうか。</p> <p>テーマとしては、今期取り上げることができなかった地域連携や公立高校との連携など、また、五橋キャンパスの新設や学部学科の改編があり（まだしっかり評価できる時期ではないかもしれないが）その後の現状について確認し改善すべき点があれば早めに対応するために取り上げることもいいのではないかと考える。</p>
評価者6（本学の所在する地域の関係者）	<p>具体的なテーマに関する引き継ぎ事項はない。一方で、評価するテーマにもよるが、今期も行った学生に対するインタビューや、卒業生、採用先の企業へのアンケート（対面による調査を含め）等の機会を設け、大学として育もうとしている学生を育成できているのかどうか、地域の期待に応えているのかどうかしっかり評価することがいいと考える。</p>
評価者7（経済界の関係者）	<p>第5期の任期中は叶わなかったが是非、利用者である学生への最終プロダクトである対面授業を各委員一コマでも受講し、その印象や感想をもとに課題の抽出や改善事項の着手などに取り組んで貰いたい（私の場合、特別措置として第5期任期前にコロナ制限下における授業のオンデマンド視聴を設けて頂いた）。</p> <p>3ヵ年の取り組みにおいては各年度毎に独立したテーマを断続的に取り組むことも大変意義があることと思うが、3ヵ年を通じてPDCAを連続的に継続して取り組むことも委員会として一考すべき一つの選択肢だと思う（課題の根本改善や新たな発見など）。</p>

【別紙】

2024 年度東北学院大学外部評価委員会
ヒアリングシート

ヒアリングシート目次

はじめに	2
1. ピアサポート	3
(1) 「東北学院史資料センター」におけるピアサポートの取り組み.....	3
(2) 「図書館」におけるピアサポートの取り組み.....	6
(3) 「博物館」におけるピアサポートの取り組み.....	8
(4) 「ラーニング・コモンズ」におけるピアサポートの取り組み	10
(5) 「情報処理センター」におけるピアサポートの取り組み.....	12
(6) 「外国語教育センター」におけるピアサポートの取り組み.....	14
(7) 「就職キャリア支援部」におけるピアサポートの取り組み.....	17
(8) 「教職課程センター」におけるピアサポートの取り組み.....	18
(9) 「国際交流部」におけるピアサポートの取り組み	20
(10) 「入試部」におけるピアサポートの取り組み.....	23
(11) 「広報部」におけるピアサポートの取り組み.....	24
(12) 「学生部」におけるピアサポートの取り組み.....	26
(13) 「学生健康支援センター」におけるピアサポートの取り組み	29
(14) 「地域連携センター」におけるピアサポートの取り組み.....	31
2. 国際化・国際交流	34
(1) 「国際交流部」における国際化・国際交流の取り組み	34
(2) 「宗教センター」における国際化・国際交流の取り組み.....	41

はじめに

ヒアリングシートについて

2024 年度の東北学院大学外部評価委員会の評価テーマは、第 1 回委員会において、「ピアサポート」及び「国際化・国際交流」のそれぞれの取組状況について評価を行うことが承認されました。

「ピアサポート」、「国際化・国際交流」について各担当部署において次の項目をヒアリングシートとして作成しました。

- ① 意思決定及び評価の状況
- ② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）
- ③ 課題と今後の取組

なお、ヒアリングシートの作成を依頼した部署は、次のとおりです。

- ピアサポート：資料 A の学長諮問の諮問先。
※ このうち、宗教センター及び理数基礎教育センターについては、現時点でピアサポートの実績はないため対象外としました。
- 国際化・国際交流：国際交流部および宗教センター

<参考資料>

- ・ 資料 A：「ピアサポートを活性化するための諮問」（2023 年 9 月 25 日）および同諮問への答申（2023 年 11 月 6 日）
- ・ 資料 B：「国際交流を促進するための諮問」（2023 年 6 月 26 日）および同諮問への答申（2023 年 10 月 23 日）

1. ピアサポート

(1) 「東北学院史資料センター」におけるピアサポートの取り組み

① 意思決定及び評価の状況
<p>ピアサポートに関する関連する方針等の策定状況</p> <p>2023 年度末に河西史資料センター所長と永田博物館長の間で、博物館のミュージアムサポーター制度と連携して名簿を共有し活動を進めていくことが決定した。</p> <p>2024 年 6 月 19 日に開催された史資料センター総会でこの方針が承認され、その後具体的な活動内容などが検討され始めたが、史資料センターの事務が庶務部庶務課から史資料センター事務室へ組織変更となったことや、ピアサポート制度の方針（特にバッジ付与の問題）がまだ不透明であること、ピアサポート活動の一環として博物館との連携事業と考えていた SMMA（仙台・宮城ミュージアムアライアンス）の活動との兼ね合いなどが原因で、9 月末現在まだ具体的な活動を始められていない。</p> <p>しかし、河西センター所長の指示により事務室主導で作成を進めていた企画書（添付資料）が 9 月 6 日付けで河西所長に提出され、これが了承されてこの内容に沿って実施計画書の作成に取り掛かるように指示があり、現在事務室主導で具体的な実施計画書の作成が始まっている。</p> <p>実施計画書が完成したら、10～11 月開催予定の史資料センター運営委員会で審議し、承認を受けた後に本格的に活動を開始する予定である。現在の予定では 11 月後半に学生募集、12 月後半から活動開始のスケジュールで進めている。</p>
<p>意思決定・実施のための体制整備状況</p> <p>意思決定は史資料センターの従来の意思決定方法で行われており、それで特に問題はないと考えている。</p> <p>①組織決定が必要なものは年に一回（4～5 月）開催される「史資料センター総会」で審議・承認される。（必要に応じて臨時開催の場合あり）</p> <p>②史資料センター総会で決定した方針に基づき、運営委員会が付託された事項について検討・運営する。</p> <p>③軽微なもの・緊急の案件などは、センター所長の責任において判断する。必要に応じてセンター所長の判断で運営委員会・総会で審議・承認を得ることがある。</p> <p>実施のための体制については、センター所長の指示に基づき史資料センター事務室が実務を担当する。必要に応じて調査研究員に協力を要請する。</p>
<p>取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況</p> <p>現在の予定では、効果の検証や自己評価については、史資料センター運営委員会、または史資料センター総会で行うことを考えている。年に一回開催される総会、年に数回開催される運営委員会で、ピアサポート活動の内容や進捗状況、今後の方針などを報告・審議</p>

<p>しながら、検証・評価していくことになる。</p> <p>また、バッジ付与に関して、地域連携課に活動内容等を報告して評価を受ける必要があるという話も出ているので、その場合は地域連携課の評価を受けることになる。</p>
② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）
<p>ピアサポート実施体制（関連のセンター、教職員数）</p> <p>2024 年 9 月現在</p> <p>史資料センター所長 1 名 史資料センター調査研究員 10 名</p> <p>史資料センター事務室 6 名</p> <p>※過去実績なし</p>
<p>ピアサポートの取組実施数・内容</p> <p>※まだ活動していない</p>
<p>ピアサポート学生数（サポートを提供または利用した学生数）</p> <p>※まだ活動していない</p>
③ 課題と今後の取組
<p>課題（強みと弱み）</p> <p>強みは東北学院内で唯一無二の活動を行うことが可能な環境を有していることである。つまり、東北学院の歴史に関する史資料を利用して、東北学院の歴史に直接的に触れることができるのは史資料センターのみである。これは興味のある学生にとっては得難い経験になるはずである。特に、将来的に学芸員や司書、アーキビストなどを目指す学生にとっては、学生のうちから実際に史資料に触れ、業務の一端を垣間見ることができる経験は貴重なものとなるだろう。</p> <p>弱みはこの活動を「ピアサポート」という枠組みで考えたとき、「学生が学生を」サポート・支援することがその第一義となると思われるが、史資料センターの従来の活動はどちらかと言えば対学生というよりも、対同窓生・対一般市民・対研究者を相手にしたものであった。この問題をどうクリアしていくかが大きな課題である。</p>
<p>今後推進すべき取組</p> <p>基本的には学生自身に活動内容を考えてもらうことを前提としているが、活動が軌道に乗るまで、または学生たちが迷わないよう活動の指針となるように、ある程度の活動案は考えている。それら活動案は創造的なもの、作業的なもの、魅力的なもの、単調なもの、など様々である。学生にしてみれば作業的なもの、単調なものはやりたくないだろうが、重要な知識や経験はそういった業務の中にも多く含まれているため、ただ単に学生が面白おかしく活動することだけを提供するの少し違うと考えている。</p> <p>2023 年 9 月の学長諮問では、このピアサポート活動の目的として「学生生活を充実させ、満足度を上げる」とあった。楽しいことは大前提ではあるが、単純に楽しいだけの活動よりも、多少の苦労を味わいながらも、それを乗り越えたところに大きな充実感・満足感・達成感は生まれると考えているので、ただの遊びのような活動にはしない。</p>

ただし、このピアサポート活動は金銭的な報酬がないボランティア活動であるため、学生にとって金銭に代わる魅力を提供できなければ活動は続かないとも考えている。学生にとって魅力的な活動と空間を提供し続けていけるような取り組みを推進していく所存である。

<添付資料>

- ・ 資料 1-1：史資料センターピアサポート企画書（2024. 9. 6）

(2) 「図書館」におけるピアサポートの取り組み

① 意思決定及び評価の状況
<p>ピアサポートに関する関連する方針等の策定状況</p> <p>2023 年 10 月 13 日付け「学長諮問『ピアサポートを活性化するための諮問』」への答申（別添ファイル）にて、図書館における①ピアサポート活動の目的、②活動の進め方、③具体的な企画案、④準備と予算、⑤ゴール（ピアサポート活動を通して数年後に到達したい図書館の姿）を決め、2024 年からこれらの方針に沿って活動をしている。</p> <p>2024 年度は初めての年度であるので、この 1 年間の活動内容を振り返りながら、来年度にむけて、ピアサポート活動に関するより具体的な方針を作成する予定である。</p>
<p>意思決定・実施のための体制整備状況</p> <p>上記の学長諮問への答申内容に沿って、学生自身が図書館のイベントや学生同士の勉強会などを企画・運営できるように、館長がメンバーをサポートをしてきた。最近になって（館長だけでなく）組織として持続的な活動としていくために、職員 1 名、図書館委員（教員）1 名が企画や事務の手続きをサポートする体制を作りつつある。</p> <p>また基本的にはピアサポート活動については、図書館委員会で適宜報告・了承を得ながら進めるとともに、学外での活動については願書を提出して大学の了承を得ている。</p>
<p>取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況</p> <p>今年度に入ってから活動をはじめたばかりのため、体系的な効果検証の体制はできていないが、各イベントの参加人数、参加者のアンケートなどから、個々のイベントに対する評価を館長が学生とともにやっている。</p> <p>今年度の活動内容を踏まえて、今後は図書館として効果検証ができる体制を作るとともに、学長諮問への答申で掲げた 3 つのゴール（①学生と図書館の関係が変わっている、②学生の成長により多く貢献できている、③ピアサポート学生自身も成長を実感している）の達成度合いを測定する方法を検討していく必要がある。</p>
② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）
<p>ピアサポート実施体制（関連のセンター、教職員数）</p> <p>2020～2023 年度：なし（2024 年度から新規で活動開始）</p> <p>2024 年度：教員 2 名、図書館職員 1 名</p>
<p>ピアサポートの取組実施数・内容</p> <p>（2024 年 4 月～9 月まで）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生との打合せ（活動計画）：4 回 ・学生との打合せ（学生選書ツアー）：5 回 ・学生との打合せ（図書館クイズラリー）：9 回 ・学生との打合せ（本の福袋）：2 回 ・入会希望者との面談：2 回

<ul style="list-style-type: none"> ・ FM 仙台取材対応：2 回 ・ イベント実施：4 回 (学生選書ツアー、図書館クイズラリー、ビブリオバトルミニワークショップ、学生選書 POP 展示 →各イベントは図書館ホームページの記事で報告済) ・ 懇親会：1 回 <p>※その他に 3 つのプロジェクト・グループごとに、学生が自主的な活動を行ってきた。</p>
<p>ピアサポート学生数（サポートを提供または利用した学生数）</p> <p>(ピアサポート活動のメンバー) 17 名</p> <p>(イベントへの参加人数) 2024 年 4～9 月まで</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学生選書ツアー：10 名 ・ 学生選書 POP 展示：9 名 ・ 図書館クイズラリー：46 名 ・ ビブリオバトルミニワークショップ：3 名
<p>③ 課題と今後の取組</p>
<p>課題（強みと弱み）</p> <p>(強み)</p> <p>図書館のピアサポート活動は、学生が図書館の企画を担うという公的な側面だけでなく、図書好きの学生同士が楽しく交流するサークルとしての側面を持っている。このため学生の自主的な活動を促しやすいという強みを持っている。</p> <p>(弱み)</p> <p>今年度活動を始めたばかりのため、まだ試行錯誤の状態が続いていることと、まだ組織的な意思決定と活動に対する評価の体制が脆弱であること。これらの点については、今年度の振り返りを通して改善をしていきたい。</p>
<p>今後推進すべき取組</p> <p>2025 年度以降は、年間を通した計画を立てて、それに沿った形で活動できるように準備をする。</p> <p>組織的な意思決定と活動に対する評価体制を構築できるようにしていく。</p> <p>イベントへの一般学生の参加が少ないので、告知活動の在り方を再検討するとともに、一層魅力のあるイベントを企画できるよう、ピアサポート活動学生の企画立案力の向上を図る。</p>

<添付資料>

- ・ 資料 02-1：【図書館】「ピアサポートを活性化するための諮問」への答申

(3) 「博物館」におけるピアサポートの取り組み

① 意思決定及び評価の状況
ピアサポートに関する関連する方針等の策定状況 1) 博物館及び史資料センターによる「東北学院ミュージアムサポーター制度の運用に関する申し合わせ」を策定している（2024.3.22）。
意思決定・実施のための体制整備状況 1) 2024 年 4 月から 5 月初旬にかけて、博物館・史資料センター共同で学生に「ミュージアムサポーター」に関する周知をおこない、多数の学生が、個別プロジェクトの案内用の登録をおこなった。 2) 1) にあわせて、博物館・史資料センターにそれぞれ事務担当者を設置し、相互の連絡調整を図っている。 3) 上記名簿に登録した学生を対象に、博物館・史資料センターがそれぞれ企画した個別のプロジェクトの実施に合わせてその都度参加を要請している。
取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況 1) 毎年年度末に一年間の実施状況・成果を整理しあわせて効果を検証する予定である。 2) 実施状況の及び検証結果については、博物館年報に掲載し、また博物館運営委員会（6 月及び 11 月頃開催）において報告をおこなう予定である。
② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）
ピアサポート実施体制（関連のセンター、教職員数） 1) 博物館においてこの事業に携わっている職員は以下の通りである。 2024 年度 教員 4(館長 1, 兼務学芸員 3)、職員 2(非常勤学芸員 1、派遣職員 1) なお本事業は 2024 年度から開始されたものである。
ピアサポートの取組実施数・内容 2024 年度（9 月 30 日現在）合計 3 つのプロジェクト（総日数）を実施済みないし実施中である。このほかに年度内にプロジェクトを実施する 1) 博物館企画展の展示制作（4 月） 2) 浪江町津島の田植踊伝承サポート（4 月～継続中） 3) ワークショップ「郷土玩具で遊ぼう」の企画・実施（8 月～12 月 継続中／（本学大学祭、および、仙台宮城ミュージアムアライアンス（SMMA）主催「ミュージアム・ユニバース」 於せんだいメディアテーク）での実施を予定） ※今後年度内にさらに数件のプロジェクトを予定している。
ピアサポート学生数（サポートを提供または利用した学生数） 9 月 30 日現在 合計 28 名の学生の参加を得ている。 博物館企画展の展示制作（完了） 17 名 浪江町津島の田植踊伝承サポート（継続中） 8 名

ワークショップ「郷土玩具で遊ぼう」の企画・実施（継続中） 3名
③ 課題と今後の取組
課題（強みと弱み） 1) 博物館では、自身が実施する事業（企画展・ワークショップ）のみならず、学外の関係機関と連携して事業をおこなう機会も少なくなく、学内向けのサポートのみならず、学生の社会活動機会の提供という面でも重要な役割を果たしうる。 2) サポーターとして活動を希望する学生が利用できる空間を現在の博物館内に確保することが難しく、大きな課題である。 3) 1, 2日程度の単発型のプロジェクトに多くの参加がある一方、数ヶ月かけて一つの形を作り上げていく継続型のプロジェクトに参加する学生はやや限定される傾向があり、こうしたプロジェクトへの学生の参加意欲を喚起するための工夫が必要である。
今後推進すべき取組 1) 参加学生が文学部（特に歴史学科）の学生にほぼ限られている状況であり、他学部の学生が参加しやすい環境を整える必要がある。 2) 上記1)に関連して、サポーター活動を、博物館の広報誌やホームページ等様々な媒体を通して周知していく必要がある。 3) 以上のような活動を十分に実施するために、博物館の職員体制や施設状況の改善を図る必要がある。

<添付資料>

- ・ 資料 03-1：東北学院ミュージアムサポーター制度の運用について

(4) 「ラーニング・コモンズ」におけるピアサポートの取り組み

① 意思決定及び評価の状況	
<u>ピアサポートに関する関連する方針等の策定状況</u>	
<p>アカデミックサポーター（以下 AS）は 2024 年度現在、カウンターでの利用者対応と、学習相談対応に取り組んでいる。</p> <p>「東北学院大学ラーニング・コモンズ規程」において、AS を置くことが規定されており、「東北学院大学ラーニング・コモンズアカデミックサポーターに関する規程」において、活動目的、内容、選考基準、採用手続き、雇用期間や就業条件が定められている。</p>	
<u>意思決定・実施のための体制整備状況</u>	
<p>AS の採用は、応募者に対して書類審査及び面接を実施し、ラーニング・コモンズ運営委員会の議を経て学長が決定する流れになっている。また、AS は月 1 回開催される定期ミーティングや、半年に 1 度程度実施される研修に参加することが求められている。</p>	
<u>取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況</u>	
<p>毎回の活動に関して、各 AS は活動報告を作成し提出している。また、半期に 1 度の研修において、活動の振り返りを行い、そこで明らかになった課題への対応を検討するワークに取り組むなど、活動の自己評価と改善の機会を設けている。さらに、学習支援担当教員が年度末に AS の活用状況に関する報告書を作成し、所長に提出している。</p> <p>加えて、学習相談対応 AS に関しては、アンケートを実施し、相談者の満足度などを確認する仕組みを取り入れている。なお、本取り組みは TG Grand Vision 150 の重点項目に位置付けられており、毎年成果や根拠書類を提出している。</p>	
② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）	
<u>ピアサポート実施体制（関連のセンター、教職員数）</u>	
<p>AS 活動の実施に際しては、学修支援課ラーニング・コモンズ系の職員 3 名、ラーニング・コモンズ特任助教 1 名、教養教育センター教員 1 名、派遣職員 3 名が実質の運営（勤務管理・研修・活動の支援など）に関わっている。</p>	
<u>ピアサポートの取組実施数・内容</u>	
<p>AS は現在、主に下記の活動に取り組んでいる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 土樋キャンパス コラトリエにおけるカウンターでの利用者対応（2017 年度から） 2) 五橋キャンパス コラトリエ・ライブラリーでの学習相談対応（2023 年度から） 3) 後援会総会やオープンキャンパスなどにおける施設紹介・案内 	
<u>ピアサポート学生数（サポートを提供または利用した学生数）</u>	
サポートを提供した学生	
2020 年	カウンター対応：7 名
2021 年	カウンター対応：8 名
2022 年	カウンター対応：12 名

2023 年 カウンター対応：9 名、学習相談対応：5 名、両方：2 名
2024 年 9 月時点 カウンター対応：4 名、学習相談対応：3 名、両方：4 名

サポートを利用した学生数（学習相談対応件数）

2023 年度：174 件、2024 年度（8 月 31 日まで）：79 件

※学習相談対応については、教員の対応と合わせて対応数をカウントしている

※カウンター対応については利用した学生数のカウントはしていない

③ 課題と今後の取組

課題（強みと弱み）

- 1) 強み：AS からの意見を定期ミーティングや研修などで聞く機会を設け、学生の視点を生かした学生への支援を行っているという点が強みであると考える。
- 2) 弱み：学生の学業を優先した活動になるため、活動に関わる学生数には変動がある。また、支援に関わる教員の人数が限られている。現状、調整の上、対応できている状況ではあるが、2つの施設を運営する組織としては、AS、教員それぞれに関して、安定的にシフトを組める体制作りが課題となっている。

今後推進すべき取組

学生同士の正課外における学びあいの機会をさらに増やすため、2024 年度後期にスタディグループの募集を行う予定である。具体的には、学生グループが企画する活動を募集し、適切だと判断したグループに対して支援を行うというものである。単に支援を行うだけでなく、活動の成果をラーニング・コモンズ（以下 LC）の HP で報告してもらうなどすることで、他の学生に LC でできる活動について周知する機会となると考えている。

(5) 「情報処理センター」におけるピアサポートの取り組み

① 意思決定及び評価の状況
<p><u>ピアサポートに関する関連する方針等の策定状況</u></p> <p>2024 年度内実施に向け取り組みを始めている。情報処理センターとしては活動場所を設定し、そこに集まったサポーターが PC や IT 関連について学生から相談を受ける。また、サポーターは学生が IT 関連の興味や知識・技術を身につけられる勉強会や講習会等のイベントを企画・実施することを目指している。</p> <p><u>意思決定・実施のための体制整備状況</u></p> <p>正式な体制は整備していない。</p> <p>情報処理センターにおける意思決定と同じように、情報処理センター長・副センター長、情報システム部長・課長をメンバーとする運営会議にて議論を行い、内容によっては（情報処理センターの運用変更が必要な場合など）情報処理センター委員会に諮ることとなる。</p> <p><u>取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況</u></p> <p>現段階で未実施のためないが、前項と同様の体制となる。必要と考えれば制定する。</p>
② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）
<p><u>ピアサポート実施体制（関連のセンター、教職員数）</u></p> <p>2020 年度 未実施 2021 年度 未実施 2022 年度 未実施 2023 年度 未実施 2024 年度 実施に向け取り組み中</p> <p><u>ピアサポートの取組実施数・内容</u></p> <p>2024 年 9 月時点において未実施のため 0 となるが、2024 年度内に実施できるよう検討中の段階である。</p> <p>内容は①に記載のように活動場所を設定し、サポーターが PC や IT 関連について学生からの相談を受けることや、サポーターが IT 資格関連の勉強会や PC 関連の講習会等のイベントを企画・実施することを目指している。</p> <p><u>ピアサポート学生数（サポートを提供または利用した学生数）</u></p> <p>未実施のため 0</p>
③ 課題と今後の取組
<p><u>課題（強みと弱み）</u></p> <p>2024 年度に TGGV150 の計画の一環で情報処理センターが開催した「相談会」は授業「情報リテラシー」の SA（スチューデントアシスタント）が授業の課題や授業内容のわからないことの相談を受けるという形で実施したが、アルバイト料を支払っておりピア</p>

サポートには該当しない。しかし取り組み自体はピアサポートとして実施されてもよい内容と思うので、どのような方法で実現させるかが問題となる。アルバイト料に関係なく、サポートすることの意義をとらえ自己成長のためにサポーターとなってくれる人材の確保が課題だと思われる。

BYOD (Bring Your Own Device) が導入され全学生が PC を所持するようになった今、情報処理センターが提供する講習会や勉強会などのイベントの話題としては、PC の活用や AI、セキュリティ、IT 資格取得対策など、豊富にあることが強みであると考ええる。

一方これまで、ピアサポートやそれに準ずるイベントについて情報処理センターとして取り組みが消極的だったため、実施のためのノウハウがないことが弱みかもしれない。

今後推進すべき取組

推進する取り組みとしては、前項で述べた弱みについての克服と、サポーターによって企画されたイベント等の実施サポートや実施までの流れ（ワークフロー）の確立に取り組みたい。

また、サポーターが詰めるための活動場所の選定や環境についても早急に取り組むこととする。

(6) 「外国語教育センター」におけるピアサポートの取り組み

① 意思決定及び評価の状況
ピアサポートに関連する方針等の策定状況 <p>ピアサポートに関連する方針等については、2023 年 10 月 19 日の外国語教育センター英語セッション会議ならびに外国語教育センター会議において策定し、大西晴樹学長による諮問に対する答申（資料 6-1）の形でまとめた。</p> <p>なお、その後、選択外国語セッションによる「外国語でつながり、つながるお話し会」と類似のイベントが学内で開催されていることがわかり、より効果的かつ合理的な運用のため、同種のイベントによる留学支援を企画している国際交流部との共催イベントとすることを計画している。</p>
意思決定・実施のための体制整備状況 <p>意思決定のための体制として、外国語教育センター英語セッション会議ならびに外国語教育センター選択外国語セッション会議、外国語教育センター会議による体制（資料 2）を整備している。</p> <p>実施にあたっては、外国語教育センターに設置されている英語セッションならびに選択外国語セッションの構成員が、それぞれのプロジェクト（資料 6-1）（英語セッション「検定試験対策自習会サポート」；選択外国語セッション「外国語でつながり、つながるお話し会」）の遂行のため、協同的に運営・実施にあたる。</p>
取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況 <p>取組に関する評価（効果検証）のため、上記と同様、外国語教育センター英語セッション会議ならびに外国語教育センター選択外国語セッション会議、外国語教育センター会議による体制（資料 6-2）を整備している。</p> <p>取組に関する評価（効果検証）については、上記の両プロジェクトが 2024 年度より新規に行うもののため、2024 年度末から 2025 年度初頭の間実施する予定である。</p>
② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）
ピアサポート実施体制（関連のセンター、教職員数） <p>上述の通り、当センターのプロジェクトは、2024 年度より新規に行うものである。したがって、以下の 2 か年度のための記載とする。</p> <p><u>2023 年度</u></p> <p>大西晴樹学長による諮問を受け、ピアサポートプロジェクトの方針を策定した。実施のための予算申請を行い、執行にあたっては財務部の許可が必要ではあるものの、承認された（資料 6-3）。</p> <p><u>2024 年度</u></p>

<p>英語セクションの「検定試験対策自習会サポート」については、11月7日に実施予定の TOEIC 自習会でのピアサポーター募集を 10 月初旬に開始する予定である。選択外国語セクションによる「外国語でつなぐ、つながるお話し会」は、国際交流部との共催に向けて現在準備中であるが、実現すれば、12 月 5 日に「世界の大学生活を聞いちゃおう」として開催できる見通しにある。</p>
<p>ピアサポートの取組実施数・内容</p> <p>英語セクション「検定試験対策自習会サポート」の取り組み実施数は最低 1 回を予定している。内容は、①現在、外国語教育センターで実施している「TOEIC 自習会」における、教員サポートと、参加学生への個別アドバイス提供、②サポーターによる、検定試験やその他語学に関わる座談会の企画と、その様子の YouTube 等での学内公開、③サポーターによる検定試験勉強や言語学習のアドバイスを動画をまとめ、YouTube 等で学内公開すること、の 3 点（資料 6-1）であるが、実施初年度であることを考慮し、最低限 ①は実施することを予定している。</p> <p>選択外国語セクションの「外国語でつなぐ、つながるお話し会」については、国際交流部との共催が実現すれば、両部局による「世界の大学生活を聞いちゃおう」として最低 1 回は開催できる見込みである。内容は、大学紹介を兼ねた座談会である。</p> <p>上記は、いずれも 2024 年開始のプロジェクトのため、現段階での予測に基づくものとなっている。</p>
<p>ピアサポート学生数（サポートを提供または利用した学生数）</p> <p>いずれも 2024 年開始のプロジェクトのため、学生数についてはプロジェクト終了後に報告可能となる。</p>
<p>③ 課題と今後の取組</p>
<p>課題（強みと弱み）</p> <p>いずれも 2024 年開始のプロジェクトのため、課題については、取組に関する評価（効果検証）を実施する段階で明らかにすることができるが、強みとしては、学生の語学力ならびに自律的・計画的指導能力、勉学意識向上、留学生と本学学生の交流を促す契機を提供できる点があげられる。</p>
<p>今後推進すべき取組</p> <p>今後推進すべき取り組みについても、上記の両プロジェクトがいずれも 2024 年開始のプロジェクトのため、取組に関する評価（効果検証）を実施する段階で明らかにすることができるが、学内部署間の連携による大学としての組織的強化が期待できるため、今後もプロジェクトの内容によっては国際交流部も含めた他部署との連携を検討しても良いものと思われる。</p>

<添付資料>

- ・ 資料 6-1：【外国語教育センター】「ピアサポートを活性化するための諮問」への答申
- ・ 資料 6-2：東北学院大学外国語教育センター規程 20230322
- ・ 資料 6-3：2024 年度予算示達書（査定書）

(7) 「就職キャリア支援部」におけるピアサポートの取り組み

1 意思決定及び評価の状況
<p><u>ピアサポートに関する関連する方針等の策定状況</u></p> <p>3年生の就職活動へのサポートの一つとして、就職活動が終了した4年生から就職活動の経験談を話してもらう「先輩体験談」のイベントを実施しており、保護者対象の就職懇談会でも同じように就職活動体験を話してもらうプログラムを実施しており好評を得ている。体験談発表以外でもその4年生に在学中に3年生のサポートを依頼することを検討しているが、実施には至っていない。</p>
<p><u>意思決定・実施のための体制整備状況</u></p> <p>実施のための意思決定機関として、就職キャリア支援委員会で協議が必要。</p>
<p><u>取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況</u></p> <p>実施事項について進捗していない。</p>
2 実施状況（過去5年間の経年変化）
<p><u>ピアサポート実施体制（関連のセンター、教職員数）</u></p> <p>実施していない。</p>
<p><u>ピアサポートの取組実施数・内容</u></p> <p>実施していない。</p>
<p><u>ピアサポート学生数（サポートを提供または利用した学生数）</u></p> <p>実施していない。</p>
3 課題と今後の取組
<p><u>課題（強みと弱み）</u></p> <p>原案の4年生内定者によるサポートは、現在実施している内定者体験談報告を発展させた内容として考えている。就職活動を終えた先輩学生のサポートは後輩たちにとっては強力な支援であり、我々としても在学生のニーズに応えられるサポートが期待出来る。サポート実施時期は4年生の就職活動終了後（内定企業への決定）であることから、いつ開始で来るか不明瞭な点が弱みである。近年の就職活動の早期化により、早期に就職活動が終了する学生は多くなると予想され、4年生の在学中のモチベーション維持のためにもピアサポートは有効であると考えられる。</p>
<p><u>今後推進すべき取組</u></p> <p>近年は3年生からのインターンシップが就職活動に繋がり始めており、その時点からの活動ができないか検討していきたい。</p>

(8) 「教職課程センター」におけるピアサポートの取り組み

① 意思決定及び評価の状況
<p>ピアサポートに関する関連する方針等の策定状況</p> <p>教職課程センターとして、具体的な形でピアサポートに関連する方針等を策定することはしていない。しかしながら、本取り組みは、当該センターでも重要なものと考えており、教職課程センター内に置かれた委員会等では情報共有を図り、センターとして積極的にピアサポートに取り組んでいくことについての了解は得ている。</p>
<p>意思決定・実施のための体制整備状況</p> <p>上記「ピアサポートに関する関連する方針等の策定状況」で記したこととも関係するが、意思決定・実施のための体制を別途の形で整備することは未だできていない。現在のところ、ピアサポートへの取り組みに関しては、教職課程センター・運営委員会ならびに所員会議を活用して報告・検討を実施している。今後、運営委員会にワーキング・グループを設置することなども検討していきたい。</p>
<p>取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況</p> <p>取組に関する評価の体制・実施状況について、教職課程センターとしてピアサポートに十分に取り組めていないこともあり、未だ評価をする段階に至っていないのが、現状である。今後、評価の体制・実施のあり方についても教職課程センター・運営会議を中心に話し合いを進めていきたいと考えている。</p>
② 実施状況（過去5年間の経年変化）
<p>ピアサポート実施体制（関連のセンター、教職員数）</p> <p>教職課程センター、運営委員を中心とした教職員（人数は未定）</p>
<p>ピアサポートの取組実施数・内容</p> <p>教員採用試験に向けた学生間のピアサポートに取り組んでいる。今年度、教職課程を履修する4年生および3年生に声がけ等を実施したが、3年生の参加がなかったこともあり、十分に取り組むことができなかったのが現状である。</p>
<p>ピアサポート学生数（サポートを提供または利用した学生数）</p> <p>上記のような状況であるので、ピアサポートとして十分にその機能を活用できるような形でのサポートはできていない。なお、教員採用試験対策に取り組む4年生は5名であった。</p>
③ 課題と今後の取組
<p>課題（強みと弱み）</p> <p>課題としては、まず教員採用試験対策を活動の核として、いかに異学年間のグループを作り上げるかという点がある。また、教職課程センターを利用する頻度の高い学生だけでなく、その対象を広く教職課程履修学生に広げていきたいと考えているが、教職課程履修学生は多くの学部・学科にわたっているため、こうした場をどのようにして設けるかが課</p>

題である。

今後推進すべき取組

今後推進すべき取組として、教職課程履修学生に広く声がけ等をするとともに、学生のピアサポートに対する理解を深めていかななくてはならない。1、2年次に実施される教職課程ガイダンス等を活用して、こうした活動に積極的に取り組んでいくこととしたい。このため、教職課程センターの行事として、ピアサポートに関する説明会等を開催することも一つの方法と考えている。

(9) 「国際交流部」におけるピアサポートの取り組み

① 意思決定及び評価の状況
<p>ピアサポートに関する関連する方針等の策定状況</p> <p>2024 年度については、2023 年 9 月 25 日付の大西晴樹学長からの諮問に対する国際交流部からの答申を方針としている。</p> <p>※資料 9-1 参照</p>
<p>意思決定・実施のための体制整備状況</p> <p>2023 年度までは意思決定機関として国際交流部に置かれた「国際交流委員会」がその役割を担っていたが、2024 年度には教育的機能の強化を目的に、別組織として新たに「グローバル教育センター」を立ち上げ、従来の「国際交流委員会」に相当する「グローバル教育センター会議」と国際交流の拡大および留学生教育に関わる事項を検討する「グローバル教育センター所員会議」の 2 つの会議体を持つ体制へと改組を行っている。</p> <p>※資料 9-2～9-4 参照</p>
<p>取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況</p> <p>2023 年度までは国際交流委員会において実施報告を行うのみであったが、2024 年度からはグローバルサポーターズにアンケート調査を行い、今後の取組の指標とすることを検討している。また、集計結果をグローバル教育センター会議またはセンター所員会議に報告し、活躍機会の創出へと繋げたいと考えている。</p>
② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）
<p>ピアサポート実施体制（関連のセンター、教職員数）</p> <p>グローバルサポーターズ：グローバル教育センター、国際交流課 レジデント・アシスタント：グローバル教育センター、国際交流課 私費留学生オリエンテーションサポート：国際交流課 派遣留学生ガイダンスサポート：グローバル教育センター、国際交流課 語学ラウンジサポート：国際交流課</p>
<p>ピアサポートの取組実施数・内容</p> <p><u>グローバルサポーターズ</u></p> <p>2024 年度より、留学生が本学で充実した留学生活を送れるようサポートするため、グローバルサポーターズ制度を始めた。メンバーは 15 名で、半年または 1 年間、活動に参加する。前期は、来日前の ONLINE MEETUP、交換留学生オリエンテーションサポート、歓送迎会の企画・運営、国際交流イベント（CONVO CAFÉ）の企画・運営を行っている。後期も同様の内容で活動する予定。</p> <p><u>レジデント・アシスタント</u></p> <p>2023 年度より、レジデント・アシスタント（RA）の募集を開始した。2024 年後期に第 1 号の RA 1 名が決まり、留学生宿舎で留学生と一緒に生活をしながら留学生のサポー</p>

トをしている。2024年9月は入寮サポートとオリエンテーションサポートをグローバルサポーターズと一緒にいった。

私費留学生オリエンテーションサポート

毎年、本学に私費留学生として入学した留学生向けのオリエンテーションを国際交流課で行っている。その際に、先輩留学生が加わり、生活や授業についてアドバイスをしている。

派遣留学生ガイダンスサポート

派遣交換留学へ出発する学生向けのガイダンスに、交換留学から帰国した学生と留学先大学から来ている交換留学生が参加し、留学先での生活や勉強についてアドバイスをしている。

語学ラウンジサポート

毎月実施している語学ラウンジに留学生がネイティブスピーカーとして参加し、日本人の学生が外国語を使う機会に貢献するほか、発音やフレーズをサポートしている。

ピアサポート学生数（サポートを提供または利用した学生数、2024年度実績）

（名）

	サポート学生数	利用学生数
グローバルサポーターズ	30	39
レジデント・アシスタント	1	32
私費留学生オリエンテーション	4	2
派遣留学生ガイダンス	8	25
語学ラウンジサポート	10	52

③ 課題と今後の取組

課題（強みと弱み）

強み：

- ✓ グローバルサポーターズは、2014年度に発足した「留学生サポーター」（交換留学生を支援するピアサポート制度）が再編されたものであり約10年の実績があるため、比較的安定した活動を行っている。
- ✓ 学生同士の支援であるため、より学生生活に沿ったアドバイジングが可能。
- ✓ 学生の自発性・積極性を促し、進んで異文化と交流する姿勢を養うことができる。

弱み：

- ✧ 留学生支援（サポート）ではなく、留学生とのレクリエーション的な交流を求めて参加する学生が早期に離脱する点。

今後推進すべき取組

- ① 行政、NPO、NGO などに協力を要請し、留学生支援への理解を深めるためのグローバルサポーターズを対象とした勉強会を実施する。
- ② グローバルサポーターズや留学生にアンケート調査を行い、支援体制及び支援内容の適切性を検証する。
- ③ 学外での活動時における危機管理体制の整備。

<添付資料>

- ・ 資料 9-1：【国際交流部】「ピアサポートを活性化するための諮問」への答申
- ・ 資料 9-2：東北学院大学グローバル教育センター規程
- ・ 資料 9-3：2024 年度グローバル教育センター会議名簿
- ・ 資料 9-4：TG グローバル教育センター所員メンバー名簿_202408

(10) 「入試部」におけるピアサポートの取り組み

① 意思決定及び評価の状況
<u>ピアサポートに関する関連する方針等の策定状況</u>
なし
<u>意思決定・実施のための体制整備状況</u>
なし
<u>取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況</u>
なし
② 実施状況（過去5年間の経年変化）
<u>ピアサポート実施体制（関連のセンター、教職員数）</u>
なし
<u>ピアサポートの取組実施数・内容</u>
なし
<u>ピアサポート学生数（サポートを提供または利用した学生数）</u>
なし
③ 課題と今後の取組
<u>課題（強みと弱み）</u>
「ピアサポート実施に関する全体打合せ会」で確認した定義では、現在アドミッションズ・オフィスで検討している活動はアルバイトのため学内業務支援になる。今後、有償で行われる学生支援の位置づけをどのようにしていくのかにより取り組む内容が変化する。
<u>今後推進すべき取組</u>

(11) 「広報部」におけるピアサポートの取り組み

① 意思決定及び評価の状況
<p><u>ピアサポートに関する関連する方針等の策定状況</u></p> <p>学校法人東北学院広報部広報課が主催するオープンキャンパスの企画・運営面におけるサポートを通じて、本学への進学を検討する受験生やその保護者に本学の魅力を伝え、志願者・受験者の増加につなげるために設立。2023 年初頭からピアサポートという観点からではなく、効果的なオープンキャンパスの実施運営を目指し設立の準備を進めていた。</p> <p><u>意思決定・実施のための体制整備状況</u></p> <p>学生団体として 2024 年 2 月下旬に学生課へ設立届を提出。同 3 月 1 日設立許可。オープンキャンパス実施委員会に報告。</p> <p><u>取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況</u></p> <p>オープンキャンパス実施委員会において報告予定。</p>
② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）
<p><u>ピアサポート実施体制（関連のセンター、教職員数）</u></p> <p>2024 年 3 月 1 日から 13 名の学生（部員）で活動開始。</p> <p>部長（指導教員）：経済学部教授 千葉昭彦</p> <p>副部長：広報部長 栗林 野一</p> <p><u>ピアサポートの取組実施数・内容</u></p> <p>新歓活動 103 名の部員獲得 9/30 現在（98 名の部員）</p> <p>2024 年 6 月 22 日（土）初夏オープンキャンパス 2308 名の来場</p> <p>2024 年 7 月 27 日（土）夏のオープンキャンパス 5274 名の来場</p> <p>2024 年 12 月 7 日（土）冬のオープンキャンパス</p> <p>2025 年 3 月下旬 春のオープンキャンパス</p> <p><u>ピアサポート学生数（サポートを提供または利用した学生数）</u></p> <p>上記内容を確認</p>
③ 課題と今後の取組
<p><u>課題（強みと弱み）</u></p> <p>メンバー（部員）個々が高い当事者意識と自発的に行動できる高いポテンシャルを身に付け、大学の顔として「東北学院ブランド」を発信することによって社会的評価が大きく向上する。将来的にはオリエンテーションリーダーのような組織を目指している。</p> <p><u>今後推進すべき取組</u></p> <p>学生主体のオープンキャンパス企画運営の実施。</p>

<添付資料>

- 資料 11-1 : ENTER 活動規約_240206

(12) 「学生部」におけるピアサポートの取り組み

① 意思決定及び評価の状況
ピアサポートに関する関連する方針等の策定状況 <p>本学における「新入生オリエンテーション」は、百数十名の在学生在が新入生の学びや学生生活を始めるにあたっての基本的な事項を支援し、よって新入生が円滑かつ充実した学生生活を送ることで「一人も迷うことのない」大学を目指すことを目的としている。</p> <p>また、「オリエンテーションリーダー」は、ピアサポートの観点から新入生同士の交流を促進し、学生生活のアドバイスを提供することで、オリエンテーション全体をサポートする役割を果たしている。</p> <p>以上の目的・方針の下、部長会や教授会からの意見（アンケート結果を含む）を参考にし、学生課が主管となって新入生オリエンテーションプログラム案を取りまとめ、作成・策定を行っている。</p>
意思決定・実施のための体制整備状況 <p>「新入生オリエンテーションプログラム」は、学生課で原案をまとめ、学生委員会（全学科から学生委員を選出）で審議する。承認後は各学科に対し「学科プログラム」の作成を付託する。各学科は「学科プログラム」を含めた新入生オリエンテーションプログラム案を作成し、学科会議で承認後、学部の教授会において最終承認される。この段階でプログラムは確定する。学生課が作成する部分は、全学科共通の項目であり、新入生用資料の配付・回収、学内システム登録作業、履修登録の説明、学生生活ガイダンス、礼拝、学生会ガイダンス、新入生交流会等である。各学科が独自に作成する部分は、「学科プログラム」の時間（2024年度は5時間で設定）、教員紹介、学科カリキュラム説明、就職・資格ガイダンス、履修登録作業等である。</p> <p>「オリエンテーションリーダー」は、上記プログラムの運営補助を様々な形で担う。例えば、本学は2021年よりBYODを導入しており、新入生は各自のPCに学内システムの登録作業を行う必要があるが、その設定作業についても新入生一人ひとりの進捗に合わせた細やかなサポートを行っている。</p> <p>以上により、各学科へ入学した新入生が円滑に学生生活を開始できるよう、大学全体で必要な施策を講じている。</p>
取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況 <p>毎年、新入生オリエンテーション終了後に、教員、新入生及びオリエンテーションリーダーを対象にアンケートを実施している。翌年度のプログラム作成にあたっては、アンケートの結果を踏まえ、必要な改善策を講じている。なお、アンケートの結果は、部長会及び課長会においても公表している。</p> <p>オリエンテーションリーダーについても、学生課内でアンケート結果を精査し、次年度の研修内容に反映している。</p>

② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）

ピアサポート実施体制（関連のセンター、教職員数）

オリエンテーションリーダー会を毎年組織し、毎年の新入生オリエンテーションに対応している。2020 年度は完全リモート（学科ごと半日）、2021 年度と 2022 年度は対面とリモートの併用（工学部のみ対面で実施）、2023 年度以降は対面に戻している。

2023 年度は五橋キャンパスのみで半日入れ替え型のプログラムを、2024 年度は五橋キャンパスと土樋キャンパスで終日型のプログラムを実施した。

ピアサポートの取組実施数・内容

オリエンテーションリーダーは、例年 10 月から選考を開始し、翌年 1 月に採用者を発表、3 月に学生課による約 3 週間の研修を経てオリエンテーションの運営に臨んでいる。

新入生オリエンテーションは、例年 4 月 1 日から前期授業開始日前までの約 1 週間の日程で実施している。

ピアサポート学生数（サポートを提供又は利用した学生数）

【提供側 オリエンテーションリーダー委嘱者数（学長名での委嘱）】

2024 年度 121 名

2023 年度 131 名

2022 年度 121 名

2021 年度 115 名

2020 年度 119 名

【利用側 新入生】

毎年、新入生約 2,800 名全員がオリエンテーションを受講している。

③ 課題と今後の取組

課題（強みと弱み）

毎年、ピアサポートを担う適任のオリエンテーションリーダーを確保することが課題である。応募者数に年度ごとの差があり、多数の応募があった年には採用基準を満たしていても各学科への配置の都合上不採用となる場合がある。一方、定員不足の年には通常であれば不採用となる学生を採用することもある。

1 年生から 3 年生の約 8,500 名の中から 120 名前後の学生を委嘱するため、特にリーダーの核となる新 2 年生（応募時は 1 年生）の確保が、オリエンテーションリーダー活動の成否の鍵を握るところである。

具体的には、自身が 1 年生の時に受けたオリエンテーション又はオリエンテーションリーダーの評価によって、翌年以降のオリエンテーションリーダーに応募するきっかけとなるケースが多いため、現役リーダーには、「来年のリーダーをスカウトするつもりで新入生に対応するように」と指導している。実際、「担当してくれたリーダーに憧れて」という志望理由が多く、これまでオリエンテーションの運営に必要な人数も確保できて

いることから、所期の目標は達成しているものと評価できる。

今後推進すべき取組

東北学院大学が求める新入生像を具現化するため、大学として維持すべきプログラムと、時代に即した柔軟なプログラムの両立が不可欠である。

また、新入生オリエンテーションは、65回を数える歴史と伝統のある行事である。65回の歴史の中で、オイルショック、東日本大震災、コロナ禍等、オリエンテーションの実施の障害となる出来事が発生したこともあったが、当時の教職員の知恵と努力で、一度も休止することなく実施してきた。

オリエンテーションの運営に欠かすことのできないオリエンテーションリーダーも、ピアサポートの観点から、新入生により近い年齢の2年生を中心に採用することで、新入生の不安や悩みに深く寄り添い、実体験に基づいたアドバイス等を提供することができる。

今後も、新入生が本学での学びや学生生活を円滑に開始することにより、「一人も迷うことのない」大学を目指し、新入生オリエンテーションを充実したものとしていく。

(13) 「学生健康支援センター」におけるピアサポートの取り組み

① 意思決定及び評価の状況
<p><u>ピアサポートに関する関連する方針等の策定状況</u></p> <p>TG 学生健康サポーターの方針の目安として、「東北学院大学学生健康支援センターピアサポーター運用要領（案）」を作成した（「別紙資料」参照）。</p> <p><u>意思決定・実施のための体制整備状況</u></p> <p>【意思決定】</p> <p>学生健康支援課で企画・検討、学生健康支援センター長の承認。</p> <p>【体制】</p> <p>学生健康支援センターに所属する登録制のボランティアで、活動毎に参加者を募る。活動は学生健康支援センターの監督のもと行われる。</p> <p>【実施】</p> <p>募集、各種連絡、事務は学生健康支援センター（学生支援室）職員が行う。</p> <p><u>取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況</u></p> <p>各活動の参加者にアンケートを実施する他、サポーターで振り返りを行う。</p>
② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）
<p><u>ピアサポート実施体制（関連のセンター、教職員数）</u></p> <p>【2023 年度】</p> <p>学生健康支援センター（学生支援室）、教職員数 6 名 新規事業として計画</p> <p>【2024 年度】</p> <p>学生健康支援センター（学生支援室）、教職員数 6 名 ピアサポーターを 10 月に募集、11 月以降活動開始予定</p> <p><u>ピアサポートの取組実施数・内容</u></p> <p>2024 年 10 月に募集、11 月以降活動開始予定</p> <p><u>ピアサポート学生数（サポートを提供または利用した学生数）</u></p> <p>0 名（2024 年 10 月に募集、11 月以降活動開始予定）</p>
③ 課題と今後の取組
<p><u>課題（強みと弱み）</u></p> <p>（ア）登録制のボランティアで各活動への参加は任意とするため、サポーターへの負担が大きくなり、学生は無理せずに参加することができる。一方、気軽さゆえに責任感が希薄になることが懸念される。</p> <p>（イ）無償のボランティアは善意で成り立ち、参加者との協力、自主的な活動の企画など、学生の成長に繋がるが、継続する者が負担を感じると不満もやすい。</p>

(ウ) サポーターはさまざまな障がい支援の知識や技術を学ぶことができるが、機器が必要なものもあるため予算措置が必要となる。

今後推進すべき取組

- ① サポーターたちによる自主的な活動の企画・運営のサポート
- ② サポーターの活動に対する達成感ややりがい、モチベーションが上がるような仕組みと教育（活動に必要な備品、消耗品、飲み物などの予算措置、勉強会での活動の意義の再確認等）
- ③ 今後活動が広がることも考慮し、全学生が加入している学研災（学生教育研究災害傷害保険制度）でカバーできない賠償責任に備えたボランティア保険、あるいは学研賠（学研災付帯賠償責任保険）の加入のための予算措置

(14) 「地域連携センター」におけるピアサポートの取り組み

① 意思決定及び評価の状況
<p>ピアサポートに関する関連する方針等の策定状況</p> <p>本学では、2021年5月10日発出の学長諮問『「総合ボランティアステーション」(仮)の設置とその役割の検討について』に基づき、2023年10月18日付で従来の「災害ボランティアステーション」を発展させた「総合ボランティアステーション」(以下、「総合ボラ」という。)を設置した。この学長諮問に対する答申に関する調査の中で、学生を支援する活動に関わりたいという意向を有する学生が一定数以上存在していることを把握し、総合ボラにおいてはボランティア活動を支援する学生主体による「運営チーム」の必要性をその答申の中で回答した。</p> <p>総合ボラは、その目的を「学校法人東北学院の建学の精神に基づき、地域社会への貢献に資するボランティア活動を通じて東北学院大学に在籍する学生の学びと成長を促すこと」と位置付けている。主な事業としては、「ボランティア活動に関する情報収集」、「ボランティア活動に関する公平な教育、情報、参加機会、相談機会等の提供」「ボランティア活動促進に資する各種取組の実施」などである。総合ボラにおけるピアサポートは、この学生の有志が集まって組織した「運営チーム」によって実施されているが、大学が何かしらの意思決定の基に設置された組織ではないため、方針等は策定していない。但し、「運営チーム」による適切な活動を支援するため、コーディネーター役の教員が活動の支援を行なっている。</p>
<p>意思決定・実施のための体制整備状況</p> <p>上述のとおり、総合ボラのピアサポートである「運営チーム」は、学生の自発性、自主性に基づいて組織していることから、活動内容等は大学の意思決定で全て決められるものではなく、大学からの要請や地域からのニーズなどを運営チーム内で検討し決定されることになっている。なお現在は、これらの要請などに関しては、第一次フィルターとして「地域連携センター長」「総合ボランティアステーション部門長」「コーディネーター役を担っている教員」「地域連携課長」による協議の結果を「運営チーム」に伝達している。</p>
<p>取組に関する評価(効果検証)の体制・実施状況</p> <p>「運営チーム」の活動に対する評価に関しては、組織化が2023年10月以降であることに鑑み、2024年度から評価を行うことになる。取り組みの評価に関しては、「運営チーム」の自己評価を受け、その内容を総合ボランティアステーション部門会議及び地域連携センター事業委員会において、点検・評価し、「運営チーム」の活動の改善及び総合ボランティアステーションにおける事業の改善を行うこととしている。</p>
② 実施状況(過去5年間の経年変化)
<p>ピアサポート実施体制(関連のセンター、教職員数)</p>
<p>※上述のように当センターにおける「ピアサポート」に関連する活動の実施は2023年10</p>

月以降となる※

総合ボランティアステーションにおけるピアサポート「運営チーム」の活動は、2023年10月からとなる。

- ・ 学生への相談窓口の設置

ボランティア活動に興味関心のある学生の相談に対応するため、その窓口を設置している。当初は一定期間ブースを設置して、相談にのる体制としていたが、随時対応できるよう、現在は、Google フォームで相談を受け付けている。

- ・ OneDay ボランティア活動の実施

ボランティア活動参加者を増やすため、学生が学生を対象としたボランティア活動を企画・実施している。これまでに、「キャンパス近隣公園の清掃」、「海岸清掃」、「募金活動」の3件を企画している。

- ・ ボランティア活動の広報の実施

本学学生が参加したボランティア活動を「運営チーム」が取材し、Instagram 等で活動の様子を広報する取り組みを行っている。また、この Instagram では、上記「学生への相談窓口」となる Google フォームのリンク等も掲載するなど情報発信の一元化も担っている（これまでに Instagram では、2023 年度に 18 件、2024 年度に 14 件のボランティア活動の様子を取り上げている）。

ピアサポートの取組実施数・内容

- ・ 学生への相談受付：3 件

※2023 年度：2 件

2024 年度：1 件

- ・ OneDay ボランティアの企画・実施：3 件

※2024 年度：3 件

- ・ ボランティア活動の広報活動（Instagram での投稿のみ）：32 件

※2023 年度：18 件

※2024 年度：14 件（2024 年 9 月 30 日時点）

ピアサポート学生数（サポートを提供または利用した学生数）

- ・ 運営チームの構成員：22 名（2024 年 9 月 27 日（金）15 時時点）

- ・ 運営チームの支援件数：38 件

（内訳）

※2023 年度

1）相談窓口での対応件数：2 件

2）OneDay ボランティア活動件数：0 件

3）ボランティア活動広報件数：18 件

※2024 年度

1）相談窓口での対応件数：1 件

<p>2) OneDay ボランティア活動件数：3 件</p> <p>3) ボランティア活動広報件数：14 件</p>
<p>③ 課題と今後の取組</p>
<p>課題（強みと弱み）</p> <p><強み></p> <p>ボランティア活動を支援する活動という本学にとって、新しいボランティア活動の領域を創出し、他の学生のボランティア参加意識の醸成を図る体制が整備された。また、意識の醸成を図るために独自のボランティア企画（OneDay ボランティア活動）を計画、実施したり、他の学生のボランティア活動取材し、広報したりしている点は評価できる。</p> <p><弱み></p> <p>「運営チーム」は学生の自主性等に基づく活動であることから、年度単位での温度差（活動人数及び活動内容など）が生じる可能性があることが現時点での弱みとして挙げられる（事業継続性の担保）。</p>
<p>今後推進すべき取組</p> <p>総合ボランティアステーションにおける「運営チーム」は、組織化されてからおおよそ1 年となるため、今後、洗い出される課題、必要と感じている活動等に随時対応していく必要があると考えている。そのために、「運営チーム」との日々のコミュニケーションを十分に図り、学生が抱える課題への解決支援を行っていく。</p> <p>また、「運営チーム」が抱える課題に対しては、総合ボランティアステーション全体の課題として認識し、その伸長と改善に向けた取り組みを積極的に進める。</p>

2. 国際化・国際交流

(1) 「国際交流部」における国際化・国際交流の取り組み

① 意思決定及び評価の状況					
国際化・国際交流に関する方針等の策定状況					
<p>2024 年度の国際化・国際交流に関する基本方針は添付のとおり（『東北学院大学の基本方針 2024』 8. 国際化 ○国際化の基本方針 p.18 より抜粋）。特に、(1)、(5)、(6)については、TG Grand Vision 150 第Ⅱ期中期計画（2021 年度～2025 年度）実行計画の施策として具体的な取り組みにまで落とし込み、5 年計画でその実現を目指している。</p> <p>※資料 1-1 参照</p>					
意思決定・実施のための体制整備状況					
<p>2023 年度までは意思決定機関として国際交流部に置かれた「国際交流委員会」がその役割を担っていたが、2024 年度には教育的機能の強化を目的に、別組織として新たに「グローバル教育センター」を立ち上げ、従来の「国際交流委員会」に相当する「グローバル教育センター会議」と国際交流の拡大および留学生教育に関わる事項を検討する「グローバル教育センター所員会議」の 2 つの会議体を持つ体制へと改組を行っている。 ※資料 1-2～1-4 参照</p>					
取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況					
<p>イベント開催時にアンケート調査を行い（参加者が少数の場合はその限りではない）、その結果をセンター会議（2023 年度までは国際交流委員会）に報告し検証している。また案件によってはセンター所員会議に報告し、学生を対象とした国際交流の新たな機会創出へのヒントとする予定である。</p>					
② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）					
国際交流協定校数（大学名、国・地域等）					
<p>2024 年 9 月 30 日現在の協定校数は 39 校。</p> <p>※資料 1-5 国際交流協定校一覧（20240930）参照</p>					
受け入れ・送り出し留学生数					
<交換留学生数> (名)					
年度	2020	2021	2022	2023	2024
受け入れ	0	0	25	39	39
送り出し	0	3	9	18	13
<私費留学生在籍者数> (名)					

年度	2020	2021	2022	2023	2024
学部	12	10	6	7	5
大学院	2	4	4	3	4
研究生	3	0	1	3	4
合計	17	14	11	13	13

受け入れ・送り出し留学生に対する修学・生活の支援状況

受け入れ留学生に対する支援

<交換留学生>

受け入れ時オリエンテーション（履修ガイダンス、生活ガイダンス、住民登録サポート）

2024 年度～グローバル教育センターによる学修支援

グローバルサポーターズ（学生ボランティア）のオリエンテーションサポート

<私費留学生・研究生>

受け入れ時オリエンテーション（新入生オリエンテーションでの不明点の確認、奨学金手続き案内、在留資格更新手続き案内など）

先輩留学生の紹介、交流促進、生活相談受付

送り出し留学生に対する支援

（出発前）

ガイダンス 1（全般について：協定校出願、渡航手続、学内手続等）

ガイダンス 2（学習面・生活面について：留学国に詳しい教員による）

ガイダンス 3（危機管理について）

先輩留学経験者との情報交換会

受入れ交換留学生との交流

（出発後）

メール及び Zoom による相談対応

（帰国後）

国際交流イベント参加及びピアサポート促進

単位認定に関する相談対応

留学プログラムの設置・実施状況

<派遣留学> 設置プログラムと参加学生数

① 交換留学プログラム：留学生数は上記「受け入れ・送り出し留学生数」とおり

② 認定留学：実績なし

③ 短期留学（協定校）・短期留学（協定校以外）：下表のとおり

（名）

年度	2020	2021	2022	2023	2024
----	------	------	------	------	------

出発時期	夏	春	夏	春	夏	春	夏	春	夏	春
協定校	1	0	7	2	3	1	8	5	14	
協定校以外	0	0	0	0	0	34	45	42	33	
合計	1	0	7	2	3	35	53	47	47	

【内訳】短期留学プログラム実施状況と参加学生数

<協定校> *はオンラインプログラム (名)

年度	2020		2021		2022		2023		2024	
出発時期	夏	春	夏	春	夏	春	夏	春	夏	春
泰日工業大学	1*						1		1	
韓国外国語大学校			2*	1*						
啓明大学校			5*				7		7	
慶北大学校					3*	1*				
全南大学校									1	
世新大学				1*						
サザンクロス大学								5	3	
レニソン大学									2	
合計	1	0	7	2	3	1	8	5	14	

<協定校以外> (名)

年度	2020		2021		2022		2023		2024	
出発時期	夏	春	夏	春	夏	春	夏	春	夏	春
アメリカ								2	1	
カナダ							10		9	
オーストラリア						14	22	24	18	
ニュージーランド						2				
マルタ						18	13	16	2	
韓国									3	
合計	0	0	0	0	0	34	45	42	33	

<受入留学> 設置プログラムと参加学生数

- ①交換留学プログラム：留学生数は上記「受け入れ・送り出し留学生数」のとおり
 ②短期留学：なし

国際交流・留学フェア等への参加数

国際交流課主催の留学説明会参加者数

短期留学説明会：①4月と②9月下旬～10月初旬に開催

交換留学説明会：①5月と②11月に開催

「海外研究A」参加説明会：12月に開催(2020年度以降未開催)

*はオンライン開催

(名)

年度	2020		2021		2022		2023		2024	
	①	②	①	②	①	②	①	②	①	②
短期留学	-	-	35*	28*	33	24	173	146	34	
交換留学	-	-	-	-	29	28	57	44	53	

国際関連科目や正課外活動（イベント等）の実施数・内容

国際関連科目

交換留学生用日本語科目（14科目）

海外研究A（4単位）：前期15コマの授業を受講後、夏季休業期間中に国際交流協定校でのサマープログラム（3週間2,700分以上）に参加し、帰国後に論文を作成する。

海外研究B（2単位）：国際交流協定校のプログラム（2,700分以上）に参加し、大学が認めた場合。

海外研究C（1単位）：国際交流協定校のプログラム（1,350分以上～2,700分未満）に参加し、大学が認めた場合。

正課外活動（イベント等）

<定期開催>

留学生歓迎会（4月、9月）：グローバルサポーターズの学生が企画・運営する、外国人留学生の歓迎会

CONVO CAFÉ（5月、10月）：受入れ留学生、派遣交換留学生及びグローバルサポーターズの学生が企画・運営する留学生の国について学ぶイベント

留学生歓送会（7月、1月）：グローバルサポーターズの学生が企画・運営する、外国人留学生の歓送会

CONVO LOUNGE（授業期間中毎月）：英語、韓国語、中国語のネイティブスピーカーによる語学ラウンジの開催

国際交流課主幹のイベント以外では、TGCF主催企画（宗教センター主幹）、HANDSやGUYSなどの学生サークルが活動を行っている。

<不定期開催>

JENESYS 訪日団の学生との交流会（2023年度）

<p>国際ボランティア活動参加学生数</p> <p><u>2020 年度～2023 年度 国際交流ボランティア</u></p> <p>登録者数：2020 年度 40 名、2021 年度 62 名、2022 年度 142 名、2023 年度 69 名年間を通じて登録を受け付け。イベントごとに参加者を募集し、活動。</p> <p><u>2024 年度～ グローバルサポーターズ</u></p> <p>登録者数：2024 年度 15 名</p> <p>1 年に 1 回募集をし、登録。前期終了のタイミングで継続意志を確認し、欠員分はキャンセル待ち登録している学生を登録し、15 名となるようにする。学期初めに各行事やイベントの担当者を決めている。イベントは学生主体で企画・運営をし、オリエンテーションサポートは、事前にサポートをお願いしたい内容を学生に共有して活動している。</p>
<p>教職員に対する海外派遣・国際交流活動の支援体制・実施状況</p> <p>アメリカ研究夏期留学：ディレクターとして教員 1 名、アシスタントディレクターとして職員 1 名が引率。COVID-19 の影響により、2020 年度以降実施なし。2025 年度の開講に向け、カナダの協定校と企画検討中である。また、2023 年度より、DMM オンライン英会話大学特別プランを教職員にも提供している。</p>
<p>③ 課題と今後の取組</p>
<p>課題（強みと弱み）</p> <p>強み：</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 東北地域で最大規模の私立大学であり、国際交流事業を本格的に展開するための十分な人的・経済的リソースを有している。 ✓ 研究重視の国公立大学に比べ、学生教育を重要視しており、そのための教育体制や充実した設備も整えている。特に日本語学習と日本文化の理解を目指す外国人留学生にとっては、関連科目が豊富であることが本学の魅力である。 ✓ 本学はキリスト教の学校として国際性に富んだ背景を持ち、建学の理念である「3L」が国内外の提携大学や国際組織から認められ、信頼を得ている。 ✓ 地域に根ざした地方ブランドの大学であり、長年にわたって地域連携・協力を積極的に行ってきた。そのため、今後の国際交流事業の展開においても、地域からの強力な協力と支援が期待できる。 ✓ 法人と大学管理層では、現在の本学の国際性評価を十分に認識しており、様々なリソースを活用して国際交流事業を強化する意向を持っている。 <p>弱み：</p> <ul style="list-style-type: none"> ✧ 学生の海外留学への意欲と保護者からの経済的・心理的なサポートは、関東・関西・九州圏地域に比べ、東北地域では若干弱いため、海外留学志願者数が少ない状況にある。 ✧ 外国語の能力不足により、外国の大学への留学に必要な語学条件を満たせず、留学を断念するケースが多くみられる。

- ☆ グローバル思考に基づいたインクルーシブな国際的雰囲気の大学キャンパスを形成するための、全学的な共識や協力体制が不足している。
- ☆ 国際交流事業の展開を支えるための専門の教職員が配置されていない。

今後推進すべき取組

- (1) 教職員向けFDおよびSDの実施：

大学キャンパスの国際化および国際交流事業の拡大の重要性を教職員に浸透させるため、FDやSDを実施する。
- (2) 大学情報の発信とPR活動：

本学の情報を国内外に積極的に発信し、認知度を向上させるための対策を導入。国際交流関連のウェブサイトの充実、多言語サポートの提供、教職員を国際交流イベントに派遣し、現地で展示や説明会を行うなどのPR活動を展開する。
- (3) 受け入れ留学生増加のための対策：
 - ✓ 受け入れ留学プログラムの充実
 - ✓ 留学関連科目の外国語シラバスの提供
 - ✓ 受け入れ留学生の入試手続の簡素化・高効率化（渡日前オンライン入試の実施等）
 - ✓ 入試前の日本語教育の実施（留学研究生制度、有料日本語コースの提供）
 - ✓ 留学生の語学力レベルに適合した日本語教育コースの整備と充実
 - ✓ 英語科目、課題探究などの実践的科目を留学生が履修できる環境の整備
 - ✓ 受け入れ留学生チューター制度の導入
 - ✓ 優秀な外国人留学生に対する奨学金制度の整備
- (4) 海外派遣留学生増加のための対策：
 - ✓ 海外留学への意識啓発および情報発信：新入生オリエンテーション、オープンキャンパス、保護者説明会等における海外留学説明会の実施
 - ✓ 在籍学生の外国語能力向上：各種語学検定試験対策用eラーニング教材の低価格提供、検定試験受験料の補助、語学ラウンジ等の語学イベントの定期的開催により在籍学生と外国人留学生の共修する機会の提供
 - ✓ 留学しやすい環境の整備：長短期留学プログラムの充実、海外留学奨学金制度の拡大、海外留学ガイダンス指導体制の整備（グローバル教育センター所員による個別指導）、カリキュラムにおける留学関連科目の明確化、柔軟な履修計画の実施（オンライン授業、学年歴の変更、留学年度前後のキャップ制および必修科目履修要件の緩和措置など）
- (5) 留学生寄宿舍および生活支援サービスの充実：

留学生寄宿舍や国際寮（留学生と在籍学生志願者の共同居住）の整備、生活支援サービスの向上。
- (6) 外国人留学生の就職支援体制の整備：

インターンを含めた就職支援やキャリアサポートの充実。

(7) 外国人留学生の学生会・同窓会設立と国際交流スペースの整備：
留学生の学生会や同窓会の設立、国際交流を促進するフロアやスペースの整備。

<添付資料>

- ・ 資料 1-1：2024 東北学院の基本方針（抜粋）
- ・ 資料 1-2：東北学院大学グローバル教育センター規程
- ・ 資料 1-3：2024 年度グローバル教育センター会議名簿
- ・ 資料 1-4：TG グローバル教育センター所員メンバー名簿_20240801
- ・ 資料 1-5：国際交流協定校一覧（20240930）

(2) 「宗教センター」における国際化・国際交流の取り組み

① 意思決定及び評価の状況
<p>国際化・国際交流に関する方針等の策定状況</p> <p>東北学院クリスチャンフェローシップ (TGCF) の活動においては、より豊かな学部間・他学年交流を推進すると同時に、国や文化を超えた積極的なコミュニケーションを推奨するため、2023 年度より、毎月 1 回、English Café を開催している。</p> <p>また小規模・短時間でも定期的な交流がより豊かな国際化へとつながることを鑑み、2024 年度は、毎週木曜日の昼休みに 73 ランチを開催し、自由なコミュニケーションの場、または英会話への練習の場として宗教センターを開室している。</p>
<p>意思決定・実施のための体制整備状況</p> <p>English Café の講師は、仙台で活動をしている宣教師の方々とし、宗教部教員よりの推薦または宗教センター委員会で承認された方々を迎えることとした。</p> <p>73 ランチは、上記講師および上記宣教団体に携わる短期宣教師または短期滞在の研修生や学生も随時、機会があれば迎えることとした。</p>
<p>取組に関する評価（効果検証）の体制・実施状況</p> <p>これまでにアメリカ、イギリス、フィリピン、シンガポール、マカオ、台湾、香港、スコットランド、韓国などの宣教師や学生の方々を講師またはゲストとしてお迎えした。</p> <p>様々な国の方々とのコミュニケーションは英語がメインであった。英語が苦手な学生に対しては、日本語が話せる宣教師がフォローにあたるなど、それぞれのレベルにあった交流が続けられている。</p> <p>2023 年度に参加した学生が 2024 年度も参加したり、また English Café に参加した学生が 73 ランチで交流を深めたりと、それぞれの取り組みが良き形で作用している。</p> <p>それぞれの取り組みを通して、英語で自己紹介等ができなかった学生が自己紹介をできるようになったり、話しかけられるのを待っていた学生が、積極的に話かけるようになった姿も見受けられ、継続することでの学生の成長がみられている。</p> <p>また 2024 年度は短期で来日したフロリダの大学生チームと Music Service の中で、共演することもでき、音楽を通しての国際交流が実現した。</p>
② 実施状況（過去 5 年間の経年変化）
<p>2023 年度:English Café, Music Service</p> <p>2024 年度: English Café, Music Service, 73Lunch</p>

<u>受け入れ・送り出し留学生数</u>
なし
<u>受け入れ・送り出し留学生に対する修学・生活の支援状況</u>
なし
<u>留学プログラムの設置・実施状況</u>
なし
<u>国際交流・留学フェア等への参加数</u>
なし
<u>国際関連科目や正課外活動（イベント等）の実施数・内容</u>
2023 年度：国際交流課との共催クリスマスイベント 2024 年度：国際交流課との共催ハワイアンイベント
<u>国際ボランティア活動参加学生数</u>
なし
<u>教職員に対する海外派遣・国際交流活動の支援体制・実施状況</u>
なし
③ 課題と今後の取組
<u>課題（強みと弱み）</u>
国際色豊かな宣教師の方々（約 10 名）を講師として毎月迎えているが、学生への周知活動に苦戦をしている状況である。
<u>今後推進すべき取組</u>
English Café と 7 3 Lunch を融合したような企画を定期（毎週）取り組めることが望ましい。また土樋キャンパスのみならず、五橋キャンパスでの開催を取り組みたいと思うが、宗教センターの現体制では難しいと考える。 今後、学生主体の活動へとなるように準備を進めている。

<添付資料>

- ・ 資料 2-1：@いのちひかりあい第 8 号（1 ページ目）
- ・ 資料 2-2：2024 年度外部評価委員会ヒアリングシート（TGCF ポスター）

【参考資料】

① 2024 年度東北学院大学外部評価委員会 名簿

任期：2022 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日

No.	所属	氏名	根拠規程
1 委員長	東北大学高度教養教育・学生支援 機構教育評価分析センター長	杉本 和弘	第 5 条第 1 項第 1 号 (大学等の教育機関の教員)
2 副委員長	東北工業大学地域連携センター 事務長	阿部 智	第 5 条第 1 項第 6 号 (大学に関して広くかつ高い見識 を有する者)
3	尚絅学院大学 学長	鈴木 道子	第 5 条第 1 項第 1 号 (大学等の教育機関の教員)
4	株式会社ミヤギテレビサービス 非常勤相談役	高野 昌明	第 5 条第 1 項第 5 号 (本学の学部を卒業した者又は大 学院を修了した者)
5	宮城県美術館 館長	伊東 昭代	第 5 条第 1 項第 3 号 (本学の所在する地域の関係者)
6	宮城県仙台南高等学校 校長	熊谷 聡也	第 5 条第 1 項第 3 号 (本学の所在する地域の関係者)
7	株式会社 一条工務店宮城 代表取締役社長	峯岸 宏典	第 5 条第 1 項第 2 号 (経済界の関係者)

② 東北学院大学外部評価委員会規程

平成20年4月1日制定第6号

改正

平成22年6月1日
平成28年3月22日改正第69号
平成29年12月26日改正第177号
平成30年3月28日改正第39号
令和3年3月10日改正第31号
令和3年3月31日改正第71号
令和6年8月7日改正第128号

東北学院大学外部評価委員会規程

(設置)

第1条 東北学院大学（以下「本学」という。）に、東北学院大学点検・評価に関する規程第14条、第15条及び第16条に定める外部評価を実施する機関として、東北学院大学外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(目的)

第2条 委員会は、本学の教育・研究水準の向上及び組織の活性化に資するため、第三者の立場から本学の教育・研究等の状況を評価し、提言を行うことを目的とする。

(評価項目)

第3条 評価項目については、東北学院大学点検・評価に関する規程第3条に定める点検・評価項目に準じるものとする。

2 前項の規定にかかわらず、委員会による評価は、前項に定める点検・評価項目の趣旨を損わない限りで、評価項目を簡略化して実施することができる。

(評価の時期)

第4条 委員会が評価を実施する年度は、公益財団法人大学基準協会による評価を含む外部評価の実施の間隔が2年を超えないように、適切に決定されるものとする。

2 東北学院大学点検・評価委員会（以下「点検・評価委員会」という。）は、委員会が評価を実施する年度を検討し、学長に提案する。

3 委員会は、評価を実施しない年度にあっても本学が行っている事業に関する簡略な報告を受け取るものとする。

(組織の構成)

第5条 委員会の委員は、次の各号に掲げる者のうちから大学の運営に関する見識を考慮して学長が選考し、委嘱する。

- (1) 大学等の教育機関の教員
- (2) 経済界の関係者
- (3) 本学の所在する地域の関係者
- (4) 本学に在職した経験を有する者
- (5) 本学の学部を卒業した者又は大学院を修了した者
- (6) 前各号に定める者以外に、大学に関して広くかつ高い見識を有する者

2 委員の任期は、3年とする。ただし、再任を妨げない。

3 学長は、委員を委嘱した場合、委員の氏名、所属等を、速やかに点検・評価委員会に通知するとともに公表する。

- 4 委員会には、点検・評価委員会委員長のほか、本学の点検・評価に責任を持つ専任教職員が必要に応じて陪席する。

(委員長及び副委員長)

第6条 委員会に委員長及び副委員長1名を置き、委員の互選で定める。

- 2 委員長は、委員会の業務を統括する。

- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代行する。

(委員会の運営)

第7条 委員長は、学長の要請に応じて委員会を招集し、議長となる。

- 2 委員会は、第2条及び第3条に基づいて行われた評価の結果及び改善を求める提言事項を外部評価報告書にまとめ、学長に提出する。

- 3 学長は、前項に定める外部評価報告書を点検・評価委員会に提出し、その内容を報告する。

(守秘義務)

第8条 委員会の委員は、この規程に基づく評価を行う際に知り得た事項のうち、秘すべきとされた事項は、他に漏らしてはならない。

(事務)

第9条 この規程に関する事務は、学長室政策支援IR課において処理する。

(改廃)

第10条 この規程の改廃は、点検・評価委員会が発議し、教授会及び大学院委員会の議を経て学長が行い、理事会の承認を得るものとする。

附 則

この規程は、平成20(2008)年4月1日から施行する。

附 則 (平成22年6月1日)

この規程は、平成22(2010)年6月1日から施行する。

附 則 (平成28年3月22日改正第69号)

この規程は、平成28(2016)年4月1日から施行する。

附 則 (平成29年12月26日改正第177号)

この規程は、平成29(2017)年12月26日から施行する。

附 則 (平成30年3月28日改正第39号)

この規程は、平成30(2018)年4月1日から施行する。

附 則 (令和3年3月10日改正第31号)

この規程は、2021年4月1日から施行する。

附 則 (令和3年3月31日改正第71号)

この規程は、2021年4月1日から施行する。

附 則 (令和6年8月7日改正第128号)

この規程は、2024年8月7日から施行し、2024年4月1日から適用する。

③ 2024 年度第 1 回東北学院大学外部評価委員会 議事録

※メール審議にて行った。

2024 年度第 1 回東北学院大学外部評価委員会議事録

1. 概 要

会 議 名	2024 年度第 1 回東北学院大学外部評価委員会
開 催 日 時	メール審議期間 2024 年 8 月 23 日（金）10 時 00 分～8 月 30 日（金）10：00
開 催 場 所	メール審議
出 席 者 （名 簿 順）	杉本和弘（東北大学 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター長） 阿部 智（東北工業大学 地域連携センター事務長） 鈴木道子（尚絅学院大学 学長） 高野昌明（株式会社ミヤギテレビサービス 非常勤相談役） 伊東昭代（宮城県美術館 館長） 熊谷聡也（宮城県仙台南高等学校 校長） 峯岸宏典（株式会社一条工務店宮城 代表取締役社長）
委任状提出	なし
陪 席 者 （ 事 務 局 含 ）	なし
欠 席 者	なし
成 立 確 認	（メール審議により成立）
配 付 資 料	<ul style="list-style-type: none"> ● 2024 年度東北学院大学外部評価委員会委員名簿 ● 資料 1 第 5 期（2022-2024）東北学院大学外部評価の概要 （※2022 年度第 1 回外部評価委員会資料より） ● 資料 2 東北学院大学外部評価委員会 2024 年度外部評価計画表（案） ● 資料 3 2024 年度外部評価の評価項目・観点（案）
議 長	杉本委員長（東北大学 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター長）
司 会	
書 記	学長室政策支援 I R 課（事務局）

2. 議事の経過及びその結果

議 案	（1）2024 年度外部評価テーマについて	承認
●	<p>第 5 期（2022～2024 年度）の外部評価委員会では、「教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況」を評価対象とすることとしており（資料 1）、2022 年度・2023 年度は、それぞれ次の項目をテーマに評価を行った。</p> <p>2022 年度：</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 2017 年度の大学認証評価において「第 9 章 管理運営・財務（1）管理運営」で長所と評価された項目がどう伸長しているか ② 大学基準協会の大学基準 6「教員・教員組織」の点検・評価項目に関する状況 ③ 大学基準協会の大学基準 10「大学運営・財務（1）大学運営」の点検・評価項目に関する状況 <p>2023 年度：</p>	

- ① 学修成果の検証及び可視化
- ② eポートフォリオの活用
- ③ 学修支援・研究指導に関する取組

- 第5期の最終年度となる2024年度は、大学における正課外での学生支援の取り組み（一部、正課内を含む）に焦点を当て、「ピアサポート」及び「国際化・国際交流」をテーマとしたい（資料2、3）。それぞれの項目について、大学から取組状況についての報告を資料で提出し、外部評価委員と大学での質疑応答を経て、評価を行う。

2024年度の外部評価テーマおよび評価の進め方について、資料2、3の通り進めて良いか、ご審議をお願いする。

- 峯岸委員より「今年度のテーマとしてピアサポート / 国際交流を取り上げる理由について質問があった。
- 事務局より委員長に確認を行い、次の追加の説明を委員へ送付した。

第5期のテーマとして、「教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況」としており、2024年度は、大学における正課外での学生支援の取り組み（一部、正課内を含む）のうち「ピアサポート」及び「国際化・国際交流」をテーマとしました。

「教学マネジメント指針」（中教審大学分科会、令和2年1月22日）において、正課外活動については次のような記述があります。

「正課外活動の中でも、例えば大学が実施する海外派遣プログラム等、大学が主体的に関与し、責任を有するようなものは、教職員と学生との人間的なふれあいを可能とする機会や学生間で切磋琢磨できる環境の提供等を通じて、倫理性、忍耐力、意思伝達力、折衝力、決断力、適応力、行動力、協調性等、学生の基本的な資質・能力を培うものであり、学生の成長にとっては正課の教育活動に匹敵する重要性を有すると考えられる。

こうした大学が主体的に関与し、責任を有するような正課外活動については、本指針に盛り込まれた方向性を踏まえ、各大学において正課の教育活動に準じて取り扱うことも考えられる。

さらに、学修者本位の教育を実現するという観点からは、正課教育を補完するものとして考えられがちであった正課外活動の意義を積極的に捉え直し、各大学がそれぞれの理念や教育目標を踏まえ、適切にその支援等に取り組んでいくことが期待される。」（p.6）

東北学院大学において「ピアサポート」「国際化・国際交流」については、昨年度、学長からの諮問により学内で取り組みを強化している項目となっており、諮問に対する答申に基づいて取り組みを開始したばかりですが、これらの方針や取り組みについて、外部の視点から評価を行い、取り組みを支援していくことが有意義であると考えています。

- その他、意見なし。
- 資料の通り2024年度の外部評価テーマおよび評価の進め方について承認された。

3. 次回予定

開催日時	未定
開催場所	未定
報告(予定)	未定
議案(予定)	未定

以上

④ 2024 年度第 2 回東北学院大学外部評価委員会 議事録

※ 第一部を外部評価委員のみ、第二部を委員と大学関係者の陪席による質疑応答を行った。
第一部の議事録は非公開とし、第二部分のみ掲載する。

2024 年度第 2 回東北学院大学外部評価委員会（第二部）議事録

1. 概 要

会 議 名	2024 年度第 2 回東北学院大学外部評価委員会
開 催 日 時	2024 年 12 月 16 日（月）15 時 30 分～17 時 03 分（第二部）
開 催 場 所	土樋キャンパス 8 号館第 2 会議室
出 席 者 （名 簿 順）	杉本和弘（東北大学 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター長） 阿部 智（東北工業大学 地域連携センター事務長） 鈴木道子（尚絅学院大学 学長） 高野昌明（株式会社ミヤギテレビサービス 非常勤相談役） 伊東昭代（宮城県美術館 館長） 熊谷聡也（宮城県仙台南高等学校 校長） 峯岸宏典（株式会社一条工務店宮城 代表取締役社長）
委任状提出	なし
陪 席 者 （ 事 務 局 含 ）	大西晴樹（学長）、千葉智則（副学長（総務担当））、村野井仁（副学長（学務担当））、中沢正利（副学長（点検・評価担当））、倉田洋（学長室長）、早坂友行（総務部長）、中村教博（高等教育開発室長）、齋藤渉（高等教育開発室副室長）、河西晃祐（東北学院史資料センター所長）、松村尚彦（図書館長）、永田英明（博物館長）、平野幹雄（ラーニング・コモンズ所長）、菅原均（学務部学修支援課長）、松本章代（情報処理センター長）、岸浩介（外国語教育センター長）、武田三弘（就職キャリア支援部長）、大迫章史（教職課程センター所長）、呉国紅（国際交流部長（グローバル教育センター長））、猪股美賀子（国際交流部国際交流課長）、牧野悌也（入試部長）、栗林野一（広報部長）、坂本譲（学生部長）、石上貫繁（学生部学生課長）、早坂良一（学生部学生課課長補佐）、長谷川貴希（学生部学生課課員）、清水貴裕（学生健康支援センター長）、坂本泰伸（地域連携センター長）、草野正聡（地域連携部地域連携課長）、相澤孝明（地域連携部地域連携課課長補佐）、原田浩司（宗教部長） 阿部文智、廣瀬理行、武蔵幸子、佐藤壮（以上、事務局（学長室政策支援 I R 課））
欠 席 者	なし
成 立 確 認	委員総数 7 名、出席 7 名、成立定数はなし
配 付 資 料	<ul style="list-style-type: none"> ● 2024 年度第 2 回東北学院大学外部評価委員会 出席者名簿 ● 2024 年度第 1 回東北学院外部評価委員会議事録案 ● 資料 1 2024 年度東北学院大学外部評価委員会ヒアリングシート 【ピアサポート】【国際化・国際交流】 ● 資料 2-1 ヒアリングシートに関する質問・意見一覧【ピアサポート】 ● 資料 2-2 ヒアリングシートに関する質問・意見一覧【国際化・国際交流】 ● （外国語教育センター追加資料）在籍留学生国籍別人数
議 長	杉本委員長（東北大学 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター長）
司 会	中沢副学長（点検・評価担当）

書	記	学長室政策支援 I R 課（事務局）
---	---	--------------------

2. 議事の経過及びその結果

挨拶	
●	大西学長： 師走のお忙しい中、東北学院大学外部評価委員会にお集まりいただき感謝申し上げます。今回、外部評価項目としてピアサポーターと国際交流を扱っていただき、近年、本学が力を入れてきている項目であり大変ありがたい。本日はよろしく申し上げます。

質疑応答	【ピアサポート】 【国際化・国際交流】
●	杉本委員長： ピアサポートと国際交流の二つの大きなパートに分かれている。部署ごとに委員からの質問に対して、担当の方から回答をいただくという形で進めたい。評価委員からは質問と、その他の意見や評価等も加えさせていただければと思う。 ➤ 【資料2-1】をもとに、史資料センターから広報部までについて、陪席者より回答がなされた。
●	杉本委員長： 以上、この後については文書での回答とさせていただければと思う。大変きめ細かく対応がなされている。まだこれからの課題が多いが、努力されていることがわかる話であった。感謝申し上げます。 ➤ 回答時間のとれなかった学生部から宗教センター及び大学全体についてと、【資料2-2】の質問分を含めて、質問への回答については、後日書面で外部評価委員へ提出することとした。

委員長が議事の終了を宣言し、17：03 に閉会した。

3. 次回予定

開催日時	2025 年 3 月 予定
開催場所	未定
報告（予定）	未定
議案（予定）	未定

以上

⑤ 2024 年度第 3 回東北学院大学外部評価委員会 議事録

※ 第一部を外部評価委員のみ、第二部を委員と大学関係者の陪席による外部評価の結果報告を行った。第一部の議事録は非公開とし、第二部分のみ掲載する。

2024 年度第 3 回東北学院大学外部評価委員会（第二部）議事録

1. 概 要

会 議 名	2024 年度第 3 回東北学院大学外部評価委員会
開 催 日 時	2025 年 3 月 27 日（木）10 時 50 分～11 時 50 分（第二部）
開 催 場 所	土樋キャンパス 8 号館第 2 会議室
出 席 者 （名 簿 順）	杉本和弘（東北大学 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター長） 阿部 智（東北工業大学 地域連携センター事務長） 鈴木道子（尚絅学院大学 学長） 高野昌明（株式会社ミヤギテレビサービス 非常勤相談役） 伊東昭代（宮城県美術館 館長） 熊谷聡也（宮城県仙台南高等学校 校長） ※敬称略 峯岸宏典（株式会社一条工務店宮城 代表取締役社長）
委任状提出	なし
陪 席 者 （ 事 務 局 含 ）	千葉智則（副学長（総務担当））、村野井仁（副学長（学務担当））、中沢正利（副学長（点検・評価担当））、倉田洋（学長室長）、早坂友行（総務部長）、中村教博（高等教育開発室長）、齋藤渉（高等教育開発室副室長）、河西晃祐（東北学院史資料センター所長）、松村尚彦（図書館長）、永田英明（博物館長）、平野幹雄（ラーニング・コモンズ所長）、松本章代（情報処理センター長）、岸浩介（外国語教育センター長）、武田三弘（就職キャリア支援部長）、大迫章史（教職課程センター所長）、呉国紅（国際交流部長（グローバル教育センター長））、栗林野一（広報部長）、坂本譲（学生部長）、清水貴裕（学生健康支援センター長）、坂本泰伸（地域連携センター長）、原田浩司（宗教部長） 阿部文智、廣瀬理行、武蔵幸子、佐藤壮（以上、事務局（学長室政策支援 I R 課））
欠 席 者	大西晴樹（学長）、牧野悌也（入試部長）
成 立 確 認	委員総数 7 名、出席 7 名、成立定数はなし
配 付 資 料	● 2024 年度東北学院大学外部評価報告書（総評のみ抜粋）
議 長	杉本委員長（東北大学 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター長）
司 会	中沢正利（副学長（点検・評価担当））
書 記	学長室政策支援 I R 課（事務局）

2. 議事の経過及びその結果

挨 拶	
<ul style="list-style-type: none"> ● 中沢副学長（点検・評価担当）：第 3 回東北学院大学外部評価委員会を開催する。 ＜黙祷＞ 本日は学長が所用で欠席のため、千葉副学長よりご挨拶申し上げます。 ● 千葉副学長（総務担当）：本日は年度末のお忙しい中、ご参集いただき感謝申し上げます。また、今年度の外部評価報告書をおまとめいただき、心より感謝申し上げます。本来であれば大西学長から御礼申し上げますところであるが、出張中のため、代わって厚く御礼申し上げます。外部 	

評価委員会からのご指摘は、大学内部で議論していてもわかりづらい課題、また、強みを認識するための貴重な機会となっている。皆様からのご意見、ご指摘については大学のこれからの運営、改革に生かしていきたいと思っている。

本日もよろしくお願い申し上げます。

第 二 部

- 中沢副学長（点検・評価担当）：2024 年度の外部評価報告書の総評を外部評価委員会の杉本委員長からお話しいただく。
- 杉本委員長： お手元の総評をご覧ください。2024 年度の外部評価の結果について概略を少しお話しさせていただきたい。今年度をもって、第 5 期の外部評価が終了する。それも含めて最後にまとめをさせていただきたい。

第 5 期の外部評価委員会は 2022 年度から 2024 年度までの 3 カ年行ってきた。2022 年度は「事務職員の育成・資質向上の取組」や「教職員の能力開発（FD 及び SD）に関わる実施状況」、2023 年度は現在どこの大学でも喫緊の課題になってきている「学修成果の検証及び可視化」あるいは「e ポートフォリオの活用」について検証させていただき、それに関連する形で「学修支援・研究指導に関する取組」についても見させていただいた。とりわけ 2023 年度においては学生インタビューを行い、これについては最終報告書をご覧くださいと思うが、外部評価委員からは学生インタビューは素晴らしい機会だったと高く評価されている。今後も学生インタビューや授業の参観も外部評価委員会の中で行っていければ、より現場に密着した形で評価結果が出せるのではないと思う。最終年度の 2024 年度は「ピアサポート」と「国際化・国際交流」をテーマに書面調査を行った。関係部署におかれては非常に丁寧な説明、回答をいただいた。こうした書面調査に基づき、質疑応答も 12 月にさせていただいた。以上が第 5 期外部評価の概要である。

今年度は「ピアサポート」、「国際化・国際交流」をテーマとし、総評の中ではどうしてこのテーマが設定されたのかというところから説明している。2023 年度に学長から「ピアサポート」及び「国際化・国際交流」に関する諮問が出され、同じく 2023 年度に答申が行われた。学内でピアサポート、国際交流に関する情報の共有がなされているということもあり、外部の視点から新たに検証し、ご意見を述べさせていただく機会とした。

ピアサポートについては、2023 年度に諮問があり、今年度から動き始めたという部署があるということも確認できたが、既にラーニング・コモンズや新入生のオリエンテーション等でピアサポートがなされていることも確認した。ただ全体としてはまだまだこれからというところもある。しかしながら、それぞれの部署で企画等を行い、全学的にピアサポートの体制を構築していこうという姿勢が明確に示されていたと感じている。このようなピアサポートは正課外教育という形で、授業等では扱いきれない、そこでは十分に育成できない能力を学生に身に付けてもらうという機会だと思っている。今後も充実を図っていただきたい。ピアサポートと言っても、部署ごとに違い、やや馴染みづらい部署もあった。業務内容の特性上、入試関係など必ずしもピアサポートに学生が入ることが適切ではないのではないかという部署もあったので、そういうところは業務内容に応じて対応いただきたいと思う。今後もピアサポートに関して充実を図っていただきたいとまとめさせていただいた。

国際化・国際交流については、今年度から貴学ではグローバル教育センターを設置し、これを中心とした体制を構築する形で進んできていることを確認させていただいた。これは後から話すことにも関係するが、宮城県あるいは仙台市といった自治体もインバウンド施策を進めている。そうした観点からも大学としてどのように貢献できるのか。貴学におかれては五橋キャ

ンパス・土樋キャンパスという立地に恵まれたところにキャンパスがある。おそらく国際交流の活動においても非常にメリットが大きいだろうと思っている。まだまだ留学生が少ないという問題もあるが、今後、国際化・国際交流を進めていただく際にはキャンパスを十分に生かした形で学生の語学力の向上や、留学生に対する支援、さらには地域にも今後増えていく外国人とどう繋がっていくのかというところで、取り組みを進めていただきたい。ピアサポートも含めてそれぞれの部署で非常にしっかりと対応がなされており、外部評価委員会では高く評価している。まだまだ足りないところもあると思うが、継続的に取り組んでいただきたい。

最後に総評として、第5期の最終年度として、先ほどのピアサポート、国際化・国際交流に限らず、第5期で扱った内容全体を振り返る形で総評を書かせていただいた。第5期全体の外部評価のテーマは「教学マネジメント体制の個別具体的な運用状況」を評価するということで過去3年活動した。振り返ってみると教学マネジメントに関係する個別具体的な取り組みを各年度で扱ってきた。そういう意味では一貫したテーマを扱ってきたのではないかと考えている。ひとつは初年度の教職員の能力開発（FD・SD）等、2年目の学修成果の可視化という内部質保証に関する取り組み、3年目のピアサポート、国際化・国際交流ということで、教学マネジメントという傘にそれぞれの取り組みが入っている。どのようにマネジメントするのかというところから、それぞれテーマは異なるが、毎年度評価・検証させていただいたことが3カ年のまとめになる。私自身の思いも書かせていただいた。2022～2024の3カ年の間で、東北学院大学は確実に新たなフェーズ、新しい時代に入っただろうと思う。ひとつは2023年度に五橋キャンパスが開校し、新たな学部が新設されたこと、もう一つは東北学院大学だけではなく、コロナ禍が大きく社会の在り方を変えたことも重なり、東北学院大学として歴史的に振り返ったときに新たなフェーズに入った時期にあたるだろうと思っている。ただ、先ほどから申し上げているように、五橋キャンパスで新学部の設置は有利な、メリットの大きな取り組みだったと思う。そうした機会を十分に生かしたコンテンツをそれぞれ充実させるための「場」が整備されてきている。コンテンツを充実させながら、学生の学びや経験を高めていく取り組みを期待したい。3カ年の外部評価を振り返り、新たな時代における東北学院大学でどういうことを進めていってもらいたいかを最後にまとめさせていただいた。これについても引き続き議論をさせていただければと思う。

- 中沢副学長（点検・評価担当）：今回は外部評価委員会の締めとして、各部局長も陪席している。今年度の外部評価に関わらず、各委員の方々からお話しいただき、その中で各部局に加えて質問があれば議論したい。
- 阿部副委員長：今年度のテーマ、ピアサポートと国際化・国際交流についてまずお話しさせていただきたい。まずピアサポートについて、方向性としては非常にふさわしいものと思う。ピアサポートに全学を上げて取り組まれている。ただ、まだスタートしたばかりという段階だと思う。そういったことからピアサポーターの養成、あるいは制度そのものの学内全体への浸透が大きなポイントになってくるのではないかな。また、国際化・国際交流については大学としてもアドバンテージがあるというイメージであった。現状の社会情勢を見ても、外部的にもインバウンドの増加や少子化による労働人口の減少を考えれば、プラス要因になるのではないかな。これらの外部要因も含め、テコとしてこれからも取り組んでいただきたい。

他には3年間を通じて、質保証を大きなテーマとして、意識しながら外部評価委員会を実質的な協議の場にさせていただけるのは適切な対応だと思っている。様々な視点から大学運営そのものを見つめ直すスタンスを取られているという印象を受けた。あえて言うならば、2022年度の評価の中で、教職員の能力開発について、制度そのものが今の社会の評価制度とはやはり乖離があるという認識を持った。一般企業も含めて、一人一人の仕事ぶりを見て、それを適切に

評価していくことは、大学運営の中でも組織力の向上、組織としての価値の向上に間違いなく繋がるものだと思っている。そういった視点からも取り組みをしていただきたい。教職員の評価は、成果をどう測るかという課題はあるが、成果とプロセス両方の視点から本人のモチベーションに繋がるような評価の取り組みは、人が少なくなっていくという現状を考えればより一層重要になってくるのではないかという印象を持っている。是非こういったところにも意を配っていただきながら進めていただければと思う。

- 鈴木委員：第5期の外部評価委員として3年間関わらせていただいた。評価をするよりは、東北学院大学が羨ましいと思って過ごした3年間であった。

少子化の影響が本格的に出てきた。その時期を十分に考慮された上だと思うが、大学全体を改革され、大学の経営と教学の両面において非常に計画的に進められている。この時期に大学の経営面での心配なく、コンテンツの充実を図れることは、今の私立大学としては本当に羨ましいことだと思った。一方、大学運営の中身について、学長のリーダーシップの元に学内関係者が団結してその課題に取り組んでいるということは素晴らしいと思った。大学としてこうあるべきという体制の構築は、東北学院大学だけではなく、学長のリーダーシップの元で一定程度可能だと思う。ただし、その実質化には時間がかかると思う。

第5期で扱ってきたテーマはいずれも、すべての構成員が理解され、定着するまでに相応の努力と時間が必要だと思う。今、働き方改革と言われており、昭和の働き方ではなくなっている。その中で教職員に過剰な負担をかけることなく、人員配置に細心の注意を払い、時間をかけるべきところはかけて、実施してほしい。人を育てるのは難しいが、そのあたりも考慮してこれからも私学全体を引っ張っていただけると有難い。

- 高野委員：この3年間、外部評価委員として大学の在り方について私自身勉強をさせていただいた。私は元々マスコミ関係の仕事ずっとやってきており、大学は閉鎖的なところがあるのではないかという思いを持って外部評価委員会に参加させていただいたが、主役である学生に対して様々なことを提案して働きかけていることがわかっただけでも、私にとってプラスになった。学生が、大学から働きかけられたことに対して、どうやって応えるかというところがわからなかったが、インタビューで学生から話を聞いて、今の学生は私の頃と比べて、真面目でしっかりと考えていることがわかった。ピアサポート、国際化・国際交流とあったが、私は地域に根差した学生を育ててもらいたい。東北学院大学は東北の雄であり、地域の企業と連携し、東北学院大学の学生の活動をもっとPRしてもらいたい。先日も利府の高校生が梨のアイスクリームを作ったというニュースがあった。高校生でもいろんなことにトライしている。我々は地域のニュースにすぐに取材に行く。もっともっと東北学院大学が地域にこんなに貢献しているという話題を振りまいてほしい。そうすれば東北の雄である東北学院大学をもっともっとPRできていると思っている。様々なところで学生と向き合い、忙しいところ大変だと思うが、学生のやる気を出させて、東北学院大学に入学して良かったと思う学生が増えて欲しい。地域に貢献できる東北学院大学を目指してほしい。

- 熊谷委員：私立大学がどのような取り組みをしているのかを知る機会を与えていただいた。様々な取り組みを大学が行っている。自分が大学生だったころに比べれば、本当に色々なところで学生の資質・能力を高めるために支援をして取り組んでいるのだとわかった。大学ではピアサポートは難しい部署もあるということは先ほど話があったが、そういった中でも、ひとつの方向を向いて取り組んでいることに感銘を受けた。

高校生の質も昔と比べて変わっているところもある。大学生の質もおそらく変わっていると思う。今の高校生を見ていると、学校側から与えられるのを待っている、与えられるのが当然という感覚がある。そのために学校として様々な取り組みをしなければならない。そうすると

先生方も授業の他にいろいろと取り組まなければならない。学校としては、主体性、自主性を育むことを目標にしている。一方で、やっていることは主体性を奪っているところがある。おそらく大学でもピアサポートというところだけをキーポイントとして考えれば、今はどちらかと言えば大学、職員が主体的にメインで、生徒は付いていくという形になっているのかもしれない。いずれ主体的な取り組みにするにはどうしたらいいのかというところを考えていかなければ、いつまでも学生は主体的にならず、本来の取り組みになっていかないのではないか。国際化・国際交流というところについても、大学における国際化・国際交流は何なのかというところから考えていくことも必要なのではないか。英語を話す場面、外国語を話す場面を増やすことなのか、外国人との交流を増やすことが大学の国際化・国際交流なのか、大学におけるこの言葉の意味を考え取り組むことが大事なのではないか。地方の私立大学としてどんなところを目指すのか。高校では普通科の魅力化がひとつの取り組みになっている。東北学院大学がどういう方向性を目指すのか、仙台の中心にあるキャンパス、そこに全ての学部学科が集まる、そういった中でどういった大学にするのかを考えていくことが、この少子化の対策の一つになるだろう。今後にも期待している。

- 伊東委員：3年間、教学マネジメントの各種視点から、取り組みについて様々な話を聞かせていただいた。全体として、社会の多様な課題や大学に求められるものに対して積極的に、色々な制度も導入して取り組んでいこうという姿勢を感じられた。それを全学に広げていこうとしている。私も外部評価委員になる前の印象としては、学生も教職員も多い中でひとつの目標に向かってマネジメントしていくことは困難なことだろうと思っていたが、大学全体で取り組もうという姿勢を感じられた。ただ、本日、各部局長が来られているが、新しい制度が降ってくる中で、それを実現していくことはご苦労がおりだろうと感じた。そこは方針を立てる本部と、実際に動く部門の情報共有や風通しを良くし、その制度が本当の意味で何のために入ってきたのかというところを理解し、目標達成に向けてやり方を話し合えると良いだろうと思う。そのためにはまず取り掛かってみるのが大事である。特にピアサポートでは馴染まない、やりにくいところがある中で、まずはやってみようというところから始まり、自分の部署はこういうやり方であれば少人数でも学生が集まり、それぞれに一人一人がいろんなことを考え、学びに繋がっていくことを感じて実質化に進んでいくと、とても魅力的な取り組みになるであろう。これからも積極的なチャレンジをしてもらいたい。
- 峯岸委員：自分が学生の時には見えていなかったが、外部評価委員として大学のシステム、運営を感じさせていただいた。改めて東北学院大学のリソースの多さ、ブランド力、資金力、長期ビジョンに基づいた計画も学長のリーダーシップのもと、立てられている。新しいキャンパスも開校して本当に素晴らしい。ただ、民間企業もそうであるが、人が多くなると縦割りがどうしても生じてきてしまう。学生にサービスが見えづらかったり、システムが乱立したり、分散したり、そうすると資料が多くなったり、会議が多くなったりする。そういった弊害もあるだろう。学生がたらい回しになったり、窓口がわからないことがないような一元化された入口と出口がこれから大事になるのではないか。

また、ソフト面と分けて考えた場合に、第5期の外部評価で切り込めなかったと思っていることがプロダクト面、授業であった。社会に出ると、正解がない。答えを与えられるのではなく、自分で問いを立て、自分の答えらしきものを見つけていくための4年間だと思う。第6期の委員の方々にはぜひ授業の参観を入れていただきたい。

また、2022年度の評価になるが、教職員の評価制度がないということだった。その時は評価制度の導入に向けて取り組んでいる最中だということであったが、その進捗はあったか。

- 中沢副学長：教員評価制度について2022年度に指摘をいただいた。一般企業では早くから評価

制度が入っている。達成目標を出し、それに対する達成度が給与等に反映される。大学の中では給与に反映する制度になっていない。本学としてはインセンティブの表彰制度はあるが、それ以外はない。国立大学では導入されているが、私立大学でなかなか本格的な導入は難しい。本学でも難しいが、個人研究費が研究業績や教育業績で変動するような制度を検討している。すぐに実施できるかはわからないが、提案したところである。本当の意味での評価制度というところまでは行かないが、少し前進したと考えている。

- 峯岸委員：国立大学の方が導入が難しく、私学の方がダイナミックにできるのではないかと考えていた。研究費の変動は大きな変革だと思っている。教員は研究と授業、社会貢献の3つが大きな役割だと聞いていた。どうしても研究を優先する構造になっているかと思うが、学生にとっては授業が一番のプロダクトでもある。例えば研究4割、授業4割、社会貢献2割といったような評価をしていただければ、給料と連動しなくても違ってくるのではないかと期待している。
- 中沢副学長：委員の方々から様々なご意見、ご感想をいただいた。
まず、ピアサポーターについて意見を伺う。ピアサポーターは学生が自発的に応募、無給で参加している。色々な部署でピアサポーターを募集している。動いているところもあるし、これからというところもある。大学としては大学の枠組みの中で学生を使っていく。制限や限度が実際の部局でわかれば少し教えてほしい。まず動いているところとしてオープンキャンパスかと思う。広報部におけるピアサポーターの状況をお聞かせいただきたい。
- 栗林広報部長：明日、春のオープンキャンパスがある。800人近く参加の予定である。オープンキャンパス実施の学生運営団体を昨年立ち上げた。質問への回答でも書いているが、オープンキャンパス自体が大学の行事であり、これはピアサポートとは分けて考えている。QUOカードでの謝礼もしている。オープンキャンパスではENTERという学生団体が動く。学生のアイデアを取り入れたオープンキャンパスの内容となる。特に夏のオープンキャンパスでは学生主体のメニューを取り入れている。今、広報部で学生に指導している形ではあるが、最終的には学生主体、学生が自走する形にもっていきたいと考えている。
- 中沢副学長（点検・評価担当）：次に国際交流について、委員長からインバウンドについて、街中のキャンパスと国際交流が結びつくということも考えてはというご発言があったが、国際交流部長に国際交流に貢献する考えについて伺いたい。
- 呉国際交流部長：貴重なご意見をいただいた。先ほど委員の方からも発言があったが、大学にとって国際交流はどんなものなのか。本学は東北一の私学として場所も良いところにあるが、何ができるのか。2つに分けて見ていきたい。

国際交流は留学生の数を増やすだけでなく、本学において、グローバル志向を持つ環境を作ることが最終目標である。それを実現するために留学生の数を増やすこともひとつであるが、教職員の国際交流に対する考え方も同時に変えていく。東北一のブランド大学として地元への社会貢献を考えると、夢、目標について話したい。

まず、すぐにできることは、「CONVO LOUNGE」である。日本語、英語、中国語に関して外部の教師を呼び、現在は本学の学生だけが対象だが、将来地域の方にも公開したい。そうすることで、外部の方、地域の方、留学生の方にも東北学院大学とのつながりを深めていただくこともできる。言語学の教育の助けにもなればと思う。これを社会にオープンすることが、まずすぐにできる対策である。

また、すでに取り組んでいることとして、国際交流課では宮城の日本語学校に職員を派遣し、留学生の日本語教育と本学への進学について意見交換し、協力を進めている。

もう一つ、東北大学と東北学院大学と比べると、東北大学の方が留学生がずっと多いが、本

学が得意なところは何か。東北大学は留学生を受け入れて英語だけでも卒業できる。一方、東北学院大学は日本語教育も重視していて、教育リソースもあるという点である。

地元のブランド大学として、地元にはたくさんの OB・OG の企業の社長がいる。これまで本学では留学生の出口はあまり重視していなかった。日本への定着を重視していなかったが、優秀な留学生人材の地元定着に寄与できればと考えている。

決まったことではないが、将来新たな建物を建てる場合は、地域一般の方がアクセスしやすいところに国際交流コーナーを作りたい。グローバル教育を体験できるコーナーを作り、またイスラム教の礼拝個室も検討したいと考えている。

- 中沢副学長：他になれば、2024 年度外部評価報告書を副学長へお渡ししたい。
(杉本委員長より、千葉副学長（総務担当）へ報告書を手渡し)
- 千葉副学長：ありがとうございました。

委員長が議事の終了を宣言し、11:50 に閉会した。

3. 次回予定

開催日時	未定
開催場所	未定
報告(予定)	未定
議案(予定)	未定

以上

2024 年度 東北学院大学外部評価報告書

発 行 日 : 2025 年 3 月 27 日発行

編集・発行: 東北学院大学外部評価委員会

問 合 せ 先 : 東北学院大学外部評価委員会事務局

学長室政策支援 I R 課

〒980-8511 宮城県仙台市青葉区土樋一丁目 3-1

TEL 022-264-6545 FAX 022-264-6364

E-Mail tgir@mail.tohoku-gakuin.ac.jp